基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.1
2015.7

目次

●研究代表者の挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●研究内容の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
●各班の研究内容と今年度の研究計画・・・・・・・・・・・・・・ 4
●連載 玩味玩読デュルケームのことば 第１回・・・・・・・・ 9
●トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
●お知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
●成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

研究代表者の挨拶

研究代表者　中島道男

「その創立者のことを忘れてしまった科学は、もう駄目である」（J. B. Allcock）。

困ったことに、ホワイトヘッドは、これとは逆の主張をしている。――「その創立者のことを忘れかねている科学は、もう駄目である」。人口に膾炙しているのも、こちらの方である。ロバート・マートンも『社会理論と社会構造』「序論」のエピグラフとして、ホワイトヘッドのこの言葉を掲げている。創立者のことなどは忘れてしまった方がよいのだろうか。

ホワイトヘッドが念頭においているのは、自然科学についてであろう。たしかに、自然科学においては、ニュートンにまでさかのぼって研究する必要はないかもしれない。「科学ではもはやニュートンの『プリンキピア』に立ち返って詮索しなくともよい。それが進歩というものである」（中山茂『歴史としての学問』）。通常科学化してしまえば、累積や進歩が目指されるのである。

では、社会科学についてはどうだろうか。この点についてわれわれのスタンスを示したのが、冒頭の言葉である。社会科学は自然科学とは違うのだ。社会学において古典が重要であるのも、このことと関わっている。社会学は、ある意味、通常科学化していないのである。標準的な教科書がないのも、そのことの現われである。

古典に意義が認められているところにおいては、創立者を忘れてしまうことなど、あってはならない。古典からは、読むたびにさまざまな示唆が得られるし、また得るべきである。もちろん、自然科学においても古典は無視されていいわけではない。――「通常科学の奥行きの深い自然科学の分野においてさえも、学問の危機に際しては路線のつけかえをめぐって、古典が意味をもつことがある」（中山茂）。

では、古典をいかに読むのか――。それは、わ

れわれの科研課題を遂行していくなかで多様な形で示されるであろう。とはいえ、ひとつだけはっきりしているのは、われわれは、古典を（「情報として読む」のではなく）「古典として読む」ということだ。それは、「新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくるような」読み方である（内田義彦『読書と社会科学』）。われわれの読みを位置づけるにあたって、福沢惚れを自認している丸山眞男が、「福沢惚れによって福沢の真実にはとうてい到達できない」という批判にたいして、「一理も二理もある」ことは認めつつ述べていることを引いておくのもよいかもしれない。――「惚れた恋人には『あばたもえくぼ』に映る危険は確かにある。しかし、とことんまで惚れてはじめてみえてくる恋人の真実――つまり、電車の反対側の席に坐っている美人をみているだけの目には、況んやはじめから超越的な批判のまなざしで判断する者には、ついに到達できない真実――というものもあるのではなかろうか。〔中略〕そうして、とことんまで惚れてはじめて見えてきた対象の真実は、一時ほどの熱がたとえ覚めたあとでも、持続的な刻印として当人の頭脳と胸奥に残るものである」（丸山眞男『「文明論之概略」を読む』上）。

われわれが対象とするのはエミール・デュルケーム（1858～1917）である。彼は、社会学の founding fathers のひとりであり、社会学史上の「巨人」である。フランスの大学ではじめて社会学講座を創設した人物でもある。社会学をディシプリンとしてまとめあげ、他の社会諸科学から区別するものは何なのかという問題を、デュルケームほど考えた人はいないだろう。このデュルケームを事例として、ディシプリンとしての社会学の再生を考えようというのがわれわれの課題である。とはいえ、デュルケームが活躍したのは 100 年前である。もうすぐ没後 100 年にもなる。この 100 年の開きは無視できない。いかに読むか――。まさに、われわれの読みが試されているといえる。

研究内容の概要

●研究課題名

社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
――デュルケーム社会学を事例として

●研究代表者

中島道男（奈良女子大学）

●研究分担者

15 名（平成 27 年度・詳細は pp.4-7 を参照）

●研究種目と期間

基盤研究 B（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

研究内容の概要

デュルケーム社会学を事例として現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにする、という本研究の着想は、このように社会学のディシプリンが問題化する現況において、学説研究に何が寄与できるかを検討するなかで生まれた。

＊　デュルケームは社会学の方法論を提示し、学派を形成し、その成果を学校教育に導入する努力を重ねることで、制度的な社会学のディシプリンを確立した。
＊　アメリカ社会学（パーソンズ、ゴフマン、ベラー）やギデンズ、バウマンらが、デュルケームの批判的読解を通じて新たな学知の創造とディシプリン再構築に取り組んだ。
＊　デュルケームの学説はフランスおよび諸外国において固有の社会・文化的条件のもとで受容され、社会学教育に導入されている。
＊　よって、デュルケーム社会学のディシプリンの成立・批判・受容・教育化を事例として研究することで、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させることができる。

そこで、本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、　次の４つの角度から社会学的ディシプリンの成立・変容のプロセスを解明し、現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにすることを目指す。

●　研究推進の４つの柱

＊ディシプリンの成立過程

多種多様な"sociologie"論が存在するなか、デュルケーム学派がどのようにして制度的な「社会学」を成立させたのかを考察し、隣接諸学との分節化のプロセスを解明する

…　主に起源解明チーム（A 班）が担当

＊ディシプリンの継承・変容

デュルケーム社会学が後代にどのように解釈・批判・継承されたかを、社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、ディシプリン変容の過程を明らかにする

…　主に解釈史検討チーム（B 班）が担当

＊各国の学説受容と教育化

デュルケームの学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって追究し、学説受容と社会・文化的条件の関係性およびアメリカ社会学の影響を明らかにする

…　主に国際比較チーム（C 班）が担当

＊社会学教育法の開発

理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査するとともに、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組む

…　主に社会学教育チーム（D 班）が担当

各班の研究内容と今年度の研究計画

A　起源解明チーム

●研究分担者（班長以外は 50 音順。以下同）

太田健児（班長）　尚絅学院大学総合人間科学部　教授
小関彩子　和歌山大学教育学部　准教授
菊谷和宏　和歌山大学経済学部　教授
北垣徹　西南学院大学文学部　教授

今年度 A 班は「『社会学的方法の規準』成立とその周辺」を中心テーマに年次計画を立てた。その具体的内容は、1)『社会学的方法の規準』の再読、2)『社会学的方法の規準』成立の周辺を探るため、(1)人文系学問との交錯模様、(2)当該テーマに関する(直接・間接)研究動向の最前線の掌握、(3)『社会学年報』(和歌山大学全巻所蔵)の研究、(4) 第三共和制「後期」の社会学の動向(デュルケーム直後～)の研究、以上の内容からなっている。

具体的な作業として、上記計画 1)に関しては、今夏 A 班の 1 名が渡仏し関連文献を収集し新訳作業に着手する。また上記計画 2)も含めて、①デュルケーム年表の作成(次年度以降継続)、②デュルケーム研究文献最新完全版の作成・公開(Web 上で公開し、当該科研費メンバーが随時新作文献などを加筆していくシステムにする予定)、③A 班研究結果を『デュルケーム命題集』(仮題)用にカスタマイズする作業、④秋のデュルケーム／デュルケーム学派研究会で進捗状況報告、⑤次年度の日本社会学史学会、日仏社会学会などでの発表、⑥次年度以降隣接領域との研究会開催計画、以上の作業を行っていく。その他、ネット上で持続的な情報交換を行い、8 月以降連携研究者とも連絡し適宜研究に加わっていただく予定である。

B　解釈史検討チーム

●研究分担者

岡崎宏樹（班長）	神戸学院大学現代社会学部　教授
飯田剛史	大谷大学文学部　特任教授
江頭大蔵	広島大学大学院社会科学研究科　教授
中島道男	奈良女子大学研究院人文科学系　教授　（研究代表者）
古市太郎	文京学院大学人間学部　助教
三上剛史	追手門学院大学社会学部　教授

B 班「解釈史検討チーム」の課題は、欧米の社会学・人類学分野において「デュルケーム社会学はいかに批判・継承されたか」を検討することにあります。社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、デュルケーム社会学のディシプリンがどのように変容したかを明らかにしたいと考えています。

デュルケームに対する批判や批判的継承に関しては、班のメンバーが重要な研究を発表しています（三上剛史, 2003,『道徳回帰とモダニティ――デュルケームからハバーマス - ルーマンへ』、中島道男, 2009,『バウマン社会理論の射程――ポストモダニティと倫理』等）。こうした成果をふまえて、私たちはさらにディシプリンの変容という観点からデュルケーム社会学の批判・継承を検討します。そのポイントは 5 つ。①機能主義（パーソンズやルーマン）、②構造主義（レヴィ=ストロース他）、③相互作用論・エスノメソドロジー（ゴフマン他）、④社会学研究会（バタイユ、カイヨワ他）、⑤社会学内外の自殺研究です。また、デュルケームとモースの差異にも着目する必要があると考えています。デュルケームからモースへの「継承」のうちにすでに決定的な変化が生じている可能性があるからです。あるいは「継承」とみえるもののうちに失われたものは何かも確認しなければなりません。たとえば、ゴフマンの儀礼論はデュルケームの消極的礼拝を重視した議論であるが、積極的礼拝の問題はどうなったのかといった問題です。ディシプリンの変容という点では、方法論の批判と継承にも着目する必要があります。

8 - 9 月に班会議を開催し、情報交換とともにディシプリンの変容をめぐる共同討議をおこないます。10 月 10 日（土）のデュルケーム／デュルケーム学派研究会（奈良女子大学）では、バウマンによるデュルケーム解釈（中島）、バタイユによるデュルケーム解釈（岡崎）、「自殺論」の解釈史（江頭）に関する研究報告をおこなう予定です。

C　国際比較チーム

●研究分担者

藤吉圭二（班長）　追手門学院大学社会学部　教授
中倉智徳　立命館大学衣笠総合研究機構　研究員
林大造　神戸大学キャリアセンター　学術研究員

国際比較班では、海外現地調査と文献調査を中心に、デュルケームおよびデュルケーム学派の理論が、世界各国においてどのように受容され、また学部教育のプログラムにどのように組み込まれているかについて、調査を実施します。国際比較とはいえ限られた予算で世界全体を対象にすることは困難なため、効果的に成果を上げることを目的に、特に非西欧圏に力点を置いて調査を進めます。

まず海外現地調査では、すでに班員がネットワークを構築しているシンガポール、台湾などのアジア圏、およびアルゼンチンを中心とした南米圏での調査を実施すべく準備を進めています。シンガポール、台湾いずれの社会学会においても教授陣の多くはアメリカで学位を取得しており、アメリカ経由のデュルケーム理解が大勢を占めるのか、あるいはデュルケームをはじめとするヨーロッパ社会学の蓄積を直接摂取している部分もあるのか、またデュルケーム社会学のどのような部分が社会学教育において特に大きく紹介されているのかについて、両国の海外研究協力者と連携しつつ調査を進めます。また、アルゼンチン他の南米諸国については、どのような社会学教育が実施されているかということ自体が十分に把握されていないため、今後の研究の展開につなげられるよう、学会における研究動向、大学における社会学教育の傾向など基本的な事項についての調査から着手していく予定です。

次に文献調査については、トルコにおけるデュルケーム社会学の受容と教育について調査を進めます。トルコにおいても『宗教生活の原初形態』刊行 100 周年(2012 年)やデュルケーム没後 100 周年（2017 年）をきっかけにデュルケーム社会学の再評価およびトルコにおける社会学発展の回顧が活発に行なわれており、それらの議論を手がかりにトルコにおけるデュルケーム社会学の受容について調査を実施します。また、アクチュアルなトピックとして、アメリカで始まったオキュパイ運動の理論的支柱と目されているデヴィット・グレーバーの議論を中心に、デュルケーム学派の議論が社会的運動においてどのように参照されているかについて、文献調査に加えウェブ上での議論にも視野を広げ、調査を進めます。

これらの現地調査、文献調査とは別に、班員のネットワークを利用し、アメリカ、カナダの北米大陸などにおけるデュルケーム社会学の教育現場での紹介の実情について、可能な範囲で情報収集に努めます。

D 社会学教育チーム

●研究分担者

白鳥義彦（班長）　神戸大学大学院人文学研究科　教授
小川伸彦　奈良女子大学研究院人文科学系　教授
横山寿世理　聖学院大学人文学部　准教授
山田陽子　広島国際学院大学情報文化学部　准教授　※平成 28 年度より研究分担者就任予定

本科研は、「社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている」という認識の下、デュルケーム社会学を事例として、社会学のディシプリン再生はいかにして可能かということを、4 年間の研究期間を得て探究するわけですが、D 班＝社会学教育チームは、理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、社会学の教授法を調査するとともに、新たな教育方法を開発し、ディシプリン再生に実践的に取り組むことを課題とします。そのために、学説研究の成果を社会学教育にどう活かすかを探求することで、現代のディシプリン問題を解決するための知見が見出される、という観点を重視しながら研究を進めます。そして、学説研究の成果を活かした新たな社会学教育法と教材のモデルを開発することを目標とし、そのより具体的な成果として、まずは『デュルケーム命題集』（仮題）の刊行を目指します。

2015 年度には、第一に、10 月 10 日（土）に予定されているデュルケーム／デュルケーム学派研究会において、教育班からは、デュルケームのアルヴァックスに対する影響、デュルケームのパーソンズに対する影響についての報告を行います。また第二に、『デュルケーム命題集』作成に向けての作業を開始します。他の班からのメンバーの参加を得つつ、「編集委員会」を組織し、上半期の間に第一回の会合を持ち、項目数、ページ数、編立てなどの基本的なイメージについて検討する予定です。さらに第三に、国内外の社会学の教科書、公開されているシラバスの中で、社会学の歴史、特にデュルケームおよびデュルケーム学派がどのように扱われているのかを調査します。この調査のために、PD を雇用する予定も立てています。こうした研究活動を通じて、本科研での 4 年間の研究のための基盤を確かなものとし、これからの研究成果につなげていくことが、2015 年度の基本的な目標です。

各班の研究計画

● 本科研には、以下の連携研究者も加わります（50 音順）

安達智史	近畿大学総合社会学部　講師
池田祥英	東洋英和女学院大学国際社会学部　非常勤講師
梅澤精	新潟産業大学経済学部　教授
荻野昌弘	関西学院大学社会学部　教授
笠木丈	フランス国立社会科学高等研究院　博士課程
川本彩花	京都大学学際融合教育研究推進センター　研究員
金瑛	甲南女子大学　非常勤講師
杉谷武信	日本大学文理学部社会学科　非常勤講師
速水（小島）奈名子	神戸大学大学院人文学研究科　研究員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター　センター長
村田賀依子	奈良女子大学大学院人間文化研究科　博士研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部　非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学大学院国際社会科学研究院　研究員

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第１回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。
多様な読みへと開くため、解説的なことは〈ミニ〉にしています。
なお訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.１●

第一の、そしてもっとも基本的な規準、それは社会的諸事実を物のように考察することである。

<<La première règle et la plus fondamentale est de *considérer les faits sociaux comme des choses*.>>

【ミニ解説】
一般的には、実証主義や科学主義のマニフェストとして解釈されるこの命題だが、それだけのものか？ここで注意したいのは、物 chose が観念 idée と対比されていることだ。デュルケームによれば、さまざまな物に囲まれている人間は、それらについての観念をつくることなしには生きていけない。こうした観念は人間に近しく、比較的自由になる。ところが物はそうはいかず、よそよそしく、人間に抵抗力をもって立ち向かう。しかし、社会を考えるうえでは、こうした観念を捨て去り、直に物に向き合うように臨めと、デュルケームは檄を飛ばしているのではないか。社会とはいわば、既成の観念を越えた物自体の世界であり、諸力の蠢く物々しい世界だと考えられている（カント、というよりショーペンハウアー的世界観）。物 chose の語は力 force の語とかなり近く（実際テクストのなかで接近している）、場合によっては置き換えて読むことも可能だ。

（北垣　記）

【キーワード】
社会学的方法、社会的事実、物（モノ）

【出典】*Les règles de la méthode sociologique*, 1895（Presses Universitaires de France 版 p.15）
（邦訳）『社会学的方法の規準』岩波文庫、宮島喬訳、1978 年、71 頁

●ことばんごう no.2●

じっさい、われわれは、この表現の意味をゆがめることなしに、集合体によって確立されたあらゆる信念や行為様式を制度とよぶことができる。その場合、社会学は、諸制度およびその発生と機能にかんする科学と定義されることになる。

<<On pout en effet, sans dénaturer le sens de cette expression, appeler *institution* toutes les croyances et tous les modes de conduite institués par la collectivité ; la sociologie peut alors être définie : la science des institutions, de leur genèse et de leur fonctionnement.>>

【ミニ解説】
社会を実体化しているという批判に対して、デュルケームは社会的事実を「制度」と読みかえ、さらには社会学の定義へと進む。この観点から、社会的分業、社会主義、家族、教育制度、そして宗教が社会学的に研究された。
（江頭 記）

【キーワード】
制度、発生論的アプローチ、機能

【出典】*Les règles de la méthode sociologique*, Préface de la sedonde édition, 1901 (Presses Universitaires de France 版 p.XXII)
（邦訳）『社会学的方法の規準』岩波文庫、宮島喬訳、1978 年、43 頁（第 2 版への序文）

●ことばんごう no.3●

このように、社会的な生は、そのあらゆるその部面において、またその歴史のあらゆる時点において、広汎なシンボリスムによってのみ可能である。

<<Ainsi, la vie sociale, sous tous ses aspects et à tous les moments de son histoire, n'est possible que grâce à un vaste symbolisme.>>

【ミニ解説】
聖なるものをめぐるシンボリズムを社会構成原理の中核にすえようとしたデュルケーム社会理論のマニフェストとも言える一節。
邦訳が二種類出揃い、読み比べる楽しみも増えた。
（小川 記）

【キーワード】
シンボリズム、社会的生命（生活）、聖なるもの

【出典】*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912 (Presses Universitaires de France 版 p.331)
（邦訳）『宗教生活の原初形態』岩波文庫、古野清人訳、1960 年、上巻 417 頁、『宗教生活の基本形態』ちくま学芸文庫、山崎亮訳、2014 年、上巻 504 頁

トピックス

●出版情報

2015 年に入って海外で刊行されたデュルケームに関係する著作を中倉智徳氏に選んでいただきました。

＊ Callegaro, Francesco, 2015, *La science politique des modernes: Durkheim, la sociologie et le projet d'autonomie*, Economica.

＊ Cassell, Paul, 2015, *Religion, Emergence, and the Origins of Meaning: Beyond Durkheim and Rappaport*, Brill.

＊ Charbonnier, Pierre, 2015, *La fin d'un grand partage: Nature et société, de Durkheim à Descola*, CNRS Editions.

＊ Dingley, James, 2015, *Durkheim and National Identity in Ireland: Applying the Sociology of Knowledge and Religion*, Palgrave Macmillan.

＊ Fournier, Marcel, Charles Kraemer [dir.], 2015, *Durkheim avant Durkheim: Une jeunesse vosgienne*, L'Harmattan.

＊ Rosati, Massimo, 2015, *The Making of a Postsecular Society: A Durkheimian Approach to Memory, Pluralism and Religion in Turkey*, Ashgate.

お知らせ

●第 31 回デュルケーム／デュルケーム学派研究会　秋の例会のお知らせ

日　　時：　2015 年 10 月 10 日（土）午後

場　　所：　奈良女子大学

開催内容：　研究会としての定例報告に加え、本科研費研究関連の発表（デュルケーム解釈のレビュー）を予定しています。詳細が決定しましたらデュルケーム／デュルケーム学派研究会ＨＰ（http://homepage3.nifty.com/fjosh/durkheimian/）に掲載いたします。

※　備考　参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。

デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

お知らせ

訃報

二〇一五年六月二日未明、大野道邦先生（神戸大学名誉教授・奈良女子大学元教授・京都橘大学名誉教授）がお亡くなりになりました（享年七三）。

大野先生は、日本のデュルケーム研究の第一人者のおひとりであり、二〇〇〇年には、デュルケーム／デュルケーム学派研究会を組織して、研究の活性化に尽力されてこられました。また、ディシプリンとしての社会学を維持することの重要性も強調され、今回の科研費研究申請を後押ししてくださいました。採択を喜んでくださっていた矢先の訃報で、研究代表者・分担者・連携研究者一同ただただ茫然としております。

しかしわれわれは前に進まねばなりません。この研究を着実に推進することこそ先生へのご恩返しであるとの思いを共有しつつ、一層レベルの高い成果を目指す所存です。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（事務局）

成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●学会報告

岡崎宏樹「集合的沸騰の分析――溶解・拡大・連鎖」（第 55 回日本社会学史学会大会一般研究報告、2015.6.27 於京都大学）

編集後記

ニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」創刊号をお届けします。

このたび採択された科研費研究（右記）の内容と成果を年2回発信する予定です。活動報告や連載企画などを通して、古典の新たな「読み」やディシプリンとデュルケームをめぐる研究成果を掲載して参ります。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第 1 号

発行日　：2015 年 7 月 15 日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506　奈良市北魚屋西町　奈良女子大学文学部

中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.2
2016.1

目次

●第１回全体研究会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
●連載 玩味玩読デュルケームのことば 第２回・・・・・・・・ 8
●本科研メンバーによる関連業績・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
●本科研の概要（再掲）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

第１回全体研究会の報告

本科研の第１回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第 31 回研究会と共催)を下記のとおり実施しました。第２部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

●日時：2015 年 10 月 10 日（土）13:00～17:30
●場所：奈良女子大学 生環系Ｅ棟 107 室（奈良市北魚屋西町）
●参加者：30 名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
●プログラム：　第１部　自由報告　（13:30～15:00）

飯田剛史（大谷大学）
「9.11 テロからイラク戦争へ――「集合意識」による解明・試論」
コメンテーター：林大造（神戸大学）
司会：江頭大蔵（広島大学）

第２部　デュルケーム解釈に関するミニシンポジウム　（15:15～17:30）

江頭大蔵（広島大学）　「『自殺論』の解釈史」
岡崎宏樹（神戸学院大学）　「バタイユのデュルケーム解釈」
中島道男（奈良女子大学）　「バウマンのデュルケーム解釈」
白鳥義彦（神戸大学）　「パーソンズに対するデュルケームの影響」
横山寿世理（聖学院大学）　「アルヴァックスに対するデュルケームの影響」
司会：小川伸彦（奈良女子大学）

● 第 2 部ミニシンポジウム各報告の要旨 ●

『自殺論』の解釈史　―　A．ギデンズの場合

江頭大蔵（広島大学）

『社会学的方法の規準』は、社会学の研究対象と方法論を明確化してディシプリンの確立をめざすものであり、『自殺論』はその方法を自殺現象に適用して有効性をアピールするものであった。ギデンズは早期から『自殺論』や自殺研究に関心を寄せ、社会学的方法論の文脈でその意義について検討している。彼によると、『自殺論』で示された自殺と他の様々な社会的要因との関係は当時すでに周知のものであり、同書の革新性は、自殺の問題を個人心理学から完全に切り離し、社会的自殺率の分布を「社会構造」的要因（自己本位主義、集団本位主義、アノミー）によって説明したことである。

デュルケームの死後、自立的ディシプリンとしての社会学の立場と、それに対抗する心理学・精神医学の立場の論者との間で、自殺の原因が「社会的」か「心理的・生物学的」かをめぐる論争が展開された。しかし、これは誤って立てられた「疑似問題」であり、実際には個人と社会の間には常に「相互依存関係(reciprocity)」がある。そこでギデンズは、「デュルケームが想定した自殺率を規定する構造的変数は、自殺的パーソナリティの形成と分布に影響する変数と分離することはできない」との立場から、社会構造の問題が直接自殺率に影響するだけでなく、社会化の過程でパーソナリティの形成にも影響するという理論モデルを考案する。そしてその背景には、「パーソナリティと社会構造の間の緊密で複雑な相互依存」という構造化理論につながる発想があった。

後年ギデンズは、構造化理論の構築に関連する文脈においては特に、個人に対して「外在的」で「拘束的」とされる社会的事実の「一面性」を厳しく批判する傾向にある。しかしこの社会的事実の特性は、デュルケームが社会学を生物学や心理学から分節化するために考案した分析的な属性であった。現代ではもはや社会学が生物学や心理学に還元されることはないであろうが、構造化理論的な「総合」は同時に、他の学問分野に対する社会学の分節化の契機をも考案すべきなのかもしれない。報告では、日本社会において経済的指標と強い関係を持つ自殺率について、社会学的要因を分離して解析する必要性についても検討した。

バタイユのデュルケーム解釈

岡崎宏樹（神戸学院大学）

1937 年、ジョルジュ・バタイユは、R.カイヨワ、M.レリス、P.クロソウスキーらと「社会学研究会 le Collège de Sociologie」を結成した。社会学研究会は、デュルケーム学派の宗教社会学の成果に着目しつつも、「未開社会の構造分析」に限定されたこの学派の仕事を、さらに「現代社会」の分析に活用しようとした。カイヨワは戦争を「現代の祭り」として考察し、バタイユはファシズムの熱狂において指導者が聖化される構造を分析した。このように現代の「聖」を学問的に研究する一方で、バタイユは、秘密結社アセファルを結成し、聖なる共同体の創設を試みた。これらの活動は数年で閉じられることになるが、聖という主題に対するバタイユの関心は終生失われることなく、思索はさらに深化してゆく。

そのことは、晩期『宗教の理論』の参照文献に、デュルケームの『宗教生活の原初形態』があげられていることにも示されている。ここでバタイユは「今日、エミール・デュルケームは不当に貶められているように思われる。私も彼の学説からは遠ざかるけれども、その本質部分を維持しないでそうするわけにはいかない」(『宗教の理論』) と述べている。「本質部分」とは、聖への関心であろう。ただし、バタイユは、個人を超えた次元に「社会」を設定したデュルケームの枠組み（個人意識／集合意識）からは遠ざかる。バタイユが設定するのは「非連続性／連続性」という別の枠組みである。両理論の違いは、デュルケームが、宗教や祝祭を、主として社会秩序の創造や活性化の観点から論じるのに対し、バタイユが自我や社会秩序の無化や解体の契機に注目して論じる点によく表れている。バタイユによれば、宗教や祝祭が探求するのは「強烈な生の瞬間」であって、「社会的紐帯を創設する」という目的は「二次的な関心でしかない」のである（『文学と悪』)。

デュルケームは集団の高揚状態を「集合的沸騰」の概念で論じた。一方、バタイユは、「生命の沸騰として表出された過剰エネルギーの運動」を考察する「普遍経済学」を展開した（『呪われた部分』)。ここでは、モースの贈与論（ポトラッチ）も、生命エネルギーの「消尽」の問題として解釈されている。

バタイユは、デュルケーム学派の仕事に接近しつつも、学問分野（ディシプリン）の枠を超えて独自の思想を展開した。社会学の訓練（ディシプリン）を受けていないこの「作家」のことを社会学者とよぶことはできないが、その思考が社会学理論をさらに豊かにする重要な洞察を含んでいることは確かであろう。

バウマンのデュルケーム解釈

中島道男（奈良女子大学）

バウマンは、社会学における道徳論のチャンピオンとしてのデュルケームに対峙し、道徳的＝社会的ととらえるデュルケームのロジックでは、ホロコースト批判ができないと批判している――「社会の規則を破らなかった人々に不道徳という非難は可能なのか」、と。彼は、「個人を道徳化する力としての社会」ととらえるデュルケームに対して、「個人の道徳性を沈黙させる力としての社会」という考えを対置する。社会化のプロセスは道徳的能力の操縦にこそあるのであって、その生産にあるのではない、と。そして、ポストモダニティとしての現代においてはこの個人の道徳性が開花する条件が整った、と主張するのがバウマンのポストモダニティ論である。

バウマンのデュルケーム批判は通俗的であり、反論可能といえなくはない。可能態としての社会に依拠していることを考えれば、デュルケーム的視座は社会の倫理的システムに批判的なまなざしを向けることができないわけではけっしてないからである。とはいえ、バウマンがモダニティ／ポストモダニティの落差――のちに、ソリッド・モダニティ／リキッド・モダニティの対比へと変化――を指摘していることの意義を、受けとめなければならない。

デュルケームはディシプリンとしての社会学の根拠を一種独特の実在としての社会――社会の魂としての社会理想――に求めたが、現代ではもはやこれが成立し得なくなっているのではないか。――ホロコーストをモダニティと関連づけるバウマンの議論におけるデュルケーム批判のメッセージは、ここにある。視点は社会から個人に移行させられているのである。

では、そのとき、社会学というディシプリンの根拠はどこに求められるのだろうか？ディシプリンの再生という課題に関連づけて、若干の展望をしておこう。

ラトゥールは、タルドからインスピレーションを得つつ、actor-network-theory を提唱している。社会ではなく個人が重視され、sociology of the social から sociology of the association への移行が主張されるのである。このとき、デュルケームの論敵であったタルドの掘り起こしもたしかに有意義ではあるが、ラトゥール自身も sociology of the association の系譜に位置づけているガーフィンケルに焦点をあてて、デュルケームからガーフィンケルへの流れを検討することも大いに意義があろう。ガーフィンケルはパーソンズの学生でありながら師に批判的であり、しかもデュルケームに自らの源流をみていた。デュルケームからガーフィンケルへの流れは、デュルケーム／タルドとは違って、デュルケームが現代において孕んでいる可能性を、道徳論というデュルケーム社会学のど真ん中で探るのにふさわしいのではないか。バウマンのデュルケーム批判の趣旨を活かすひとつの途がここにあるといえよう。

パーソンズに対するデュルケームの影響

白鳥義彦（神戸大学）

本報告では、タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造―第 3 分冊デュルケーム論』を題材として、パーソンズに対するデュルケームの影響を検討した。

報告では本書での論点をいくつか取り上げて紹介、検討した。パーソンズは、ホッブズ問題に関わり、功利主義批判の文脈でデュルケームが同じ問題を論じていたとし、デュルケームによる契約の非契約的要素への注目や、個人と社会との関係への着目を指摘する。また、社会的事実の外在性と拘束性について、これが環境的、行動主義的なものか、規範的なものか、という問いも提起する。アノミー論から敷衍される快楽の限界効用という観点から、「幸福」の理論という視点も示す。科学と倫理、学問の実践性について、「実証科学はただ人間生活をよくするための手段となりうる限りにおいて正当化されるのである」と、デュルケームが学問の倫理性、実践性、有用性を強調していたと述べる。さらに、デュルケームが経験的研究、モノグラフを著したとして評価し、先行研究について、従来デュルケームが方法論に傾斜して読まれてきたと批判する（「デュルケームは、哲学者あるいは弁証家であって、経験科学者ではないといった結論を導き出してはならない。事実は全く逆であって、かれはその当時の最も偉大な経験科学者の一人であった。……デュルケームは、『非現実的な』空間で理論化を試みたり、『怠惰な思弁』にふけることなく、つねに決定的に重要な経験的問題の解決をめざしていたのであり、まさに科学的理論家そのものであった」）。

本書の特色は、学説史的研究の基盤上に、「主意主義的行為理論」という新たな理論学説の提起を行った点にあるが、こうした観点からすると、パーソンズ自らの理論を展開するために、デュルケームを「利用」しているとも考えられる。そのため、デュルケームの議論を持ち上げておいて、「だが」というような形で、その上で批判するという論調も少なからず見られ、表面的に議論を追っていくと、パーソンズがデュルケームを評価しているのかいないのか、両義的に見える側面もある。とはいえ、パーソンズは自分の理論を導くためであるとしても、デュルケームをよく読みこんでいるのは事実である。

パーソンズは、デュルケームによる研究の、モノグラフとしての意義を繰り返し強調しているが、これはシカゴ学派に典型的に見られるような、経験的研究を重視する当時のアメリカ社会学の文脈の中での、自らの研究の正当化を示すという側面もあったのだろうか。また、例えば、パーソンズによる医療、大学、専門職論といったモノグラフ的研究に見られるような、自らの問題関心の一傾向を示すものとしてもとらえられないだろうか。

全体として本書では、主意主義的行為理論の導出ということが主たる文脈となっており、構造（機能）主義、全体論的なマクロな視点、といったような、デュルケームからパーソンズへの影響といった文脈において通俗的に考えられ得るような観点は必ずしも強調されているわけではないということも、今回再読してあらためて感じたところである。

アルヴァックスに対するデュルケームの影響

横山寿世理（聖学院大学）

デュルケーム学派のアルヴァックス（M. Halbwachs）が論じた「集合的記憶」からは、ベルクソンの記憶論への批判を超えて、デュルケームの集合意識もしくは集合表象からの影響を受けていることが読み取れる。そこで、本報告では、そのアルヴァックスに対するデュルケームの影響について取り上げた。

アルヴァックスは、ほぼ忘れてしまったような過去の想い出を他者の記憶に助けられて想い出すことが、「集合的記憶」であると言う。集団内部の視点や、想い出の類似性が集合的記憶を説明するが、この視点と類似性はどこで担保されているのか。本報告では、集合的記憶の「時間的枠」（cadre temporel）と「空間的枠」（cadre spatial）によって、集団内部の視点や過去の類似性が担保されると考えた。

たとえば家族という集団は夫婦からはじまり、子どもの誕生、子どもの独立によって集団を変化させ、そこに流れる社会的時間を変化させる。この場合の社会的時間が「時間的枠」である。アルヴァックスは、夫婦独自の生活リズムは、やがて子どもを中心とした生活リズムに吸収されるのではなく、並んで新しい生活リズムが存続する、と説明する。家族に関する想い出は「時間的枠」によって再構成され、「空間的枠」によって保存される。つまり、まず家族の生活は「時間的枠」（日付や時期など）によって想起され、その後、継続する空間的なイメージを持って保存されるということになる。

このように持続する時間を日付によって区切ることは、ベルクソンの「持続」と対比される「時間の空間化」に他ならない。アルヴァックスは、ベルクソン的な「持続」を批判しており、むしろ「時間の空間化」を経て、過去を「空間的枠」に転回しようとしていると考えられる。

なぜアルヴァックスは時間の空間化を選んだのか。アルヴァックスはベルクソン的な「持続」を他者と共有するために、デュルケームの「集合表象」を要請する。アルヴァックスは「持続」を否定しているのではなく、ベルクソン的な「持続」を、「時間の天文学的区分や日付」という集合表象に重ねることで「時間の空間化」を生じさせ、社会に委ねていることになる。

ここから、アルヴァックスは「私」という個人の外にいる他の人びととも共通する集合的な状態から社会的事実を取り出そうとしていると論じた。

活動報告

●Ａ班（起源解明チーム）第１回研究会

日　時：2015 年９月 14 日(月) 13:30～17:00

場　所：和歌山大学 教育学部５階第２教室（和歌山県和歌山市）

出席者：５名

内　容：テーマは当初の方針どおり「『社会学的方法の規準』成立とその周辺」としました。プログラムは、①「Les règles de la méthode sociologique 新訳における訳語の変更について」(菊谷和宏)、②「経済学史からみたデュルケーム社会学」(吉本惣一)、③「『社会学年報』を中心としたデュルケーム学派と形而上学者たちとの論戦」(太田健児)の各報告に対して、「ベルクソンからみたデュルケーム社会学」(小関彩子)、「タルドからみたデュルケーム社会学」(池田祥英)を対置させるかたちで進められました。報告①では、「規準」の原語である règles の語義、訳語としての「基準」と「規準」との違い、これ以外の訳語の可能性について、contrainte についても同様の問題提起がなされ、いくつかの新訳語のアイディアが出されました。報告②では、経済学史の中にデュルケームがどう位置づけられるか、デュルケーム自身の経済学へのアクセスの検証可能性について意見が交わされ、現代フランスの経済学史研究やその著作群も紹介されました。報告③では『社会学年報』誌上のデュルケミアンと形而上学者たちとの議論が検証され、<<positif>>や<<sociologie>>などの「当時の“実相”」の解明こそ社会学のディシプリン化の起源解明に繋がることが確認されました。

　次回はベルクソン、タルドとデュルケームとの交錯模様の詳細解明も視野に入れた内容を予定しています。（太田健児 記）

●Ｂ班（解釈史検討チーム）第１回班別会議

日　時：2015 年９月 27 日（日）10:30～12:00

場　所：キャンパスプラザ京都　第２会議室（京都市下京区）

出席者：７名

内　容：各メンバーが研究の方向性と進捗状況について報告した後、Ｂ班の研究が〈社会学のディシプリン再生〉という主題に対し、どのような意義を持ちうるのかについて検討し、これを通じて、今後の研究で特に重要となるのは以下３点であるとの見通しを立てました。すなわち、①デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、②社会的なものが不透明化・不確実化する現代において、〈社会の生成〉をどう理論化するかという点に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、③批判的継承の中で失われたものや、非明示的な形で継承された問題意識と思考方法に着目し、後代の研究をとらえかえすことです。（岡崎宏樹 記）

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第２回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。
今回は、〈道徳〉概念をめぐるデュルケームの言葉に注目しました。本科研費研究の申請を後押ししてくださった故大野道邦先生、来年度より正式に本科研メンバーに加わる山田陽子氏、そして研究協力者の金瑛氏が選んだ「ことば」を掲載します。
※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.4●

遊びが肉体的生活の美学であり、芸術が知的生活の美学であると同様に、この独自の活動は道徳生活の美学なのである。

<<De même que le jeu est l'esthétique de la vie physique, l'art, l'esthétique de la vie intellectuelle, cette activité *sui generis* est l'esthétique de la vie morale.>>

【ミニ解説】
ここで、デュルケームが「独自の活動」といっているのは、唯心論的哲学者・道徳学者のポール・ジャネ(Paul Janet,1823-1899)いうところの「美的工夫」あるいは「道徳的工夫」(belles inventions ou invention morale）である。ジャネによれば、道徳的行為には、「道徳律」そのものに厳格に従う強制的な側面のみならず、個別的・具体的な状況に応じた「個人的創意」の側面もある。この後者の側面は、芸術における創意工夫のように道徳における創意工夫ということができる。たとえば、「祖国へ献身せよ」や「平和のために戦え」という抽象的かつ一般的な道徳的命令は、個々のひとびとの――とりわけ歴史上の政治家や市民、聖者や英雄の――銅像や箴言や詩歌や旋律などの表現や工夫によって具体化され彩色される。これは、デュルケーム流にいえば、「道徳的力の自由な発露(le libre déploiement de force morale)」であり、美学の領域に属するがそれ自体特有の「表現方式」である。道徳は、厳格かつ固定的な義務に服従する側面のみならず、個人の自由かつ柔軟な創意工夫によって創られ生（活）そのものを魅力的な潤いで充たすような審美的表現の側面も含むのである。（なお、大野道邦「モラルと表現――デュルケームにおける『倫理的文化』の可能性」、大野道邦・中島道男『現代における社会構想の可能性――デュルケームとバウマン』平成 13 年度奈良女子大学プロジェクト報告書, 2002: 23-36 も参照のこと)。
（大野道邦　記）

【キーワード】
道徳、美学、創意工夫

【出典】*Textes 2: Religion, morale, anomie*, Présentation de Victor Karady, 1975（Minuit p. 282）
〔事務局註:『社会分業論』の「第１版序文」からの引用。『社会分業論』の「第１版序文」は第2版以降では削除されているので、デュルケーム『テクスト』(カラディ編)第2巻に収められている「第１版序文」の抜粋からの引用となっている。〕
（邦訳）『社会分業論』青木書店、田原音和訳、1970 年、420 頁

●ことばんごう no.5●

つまり、自殺は、われわれの道徳のすべての基礎をなしている人格尊重の精神を傷つけるために非難されるというわけである。

<<Le suicide est donc réprouvé parce qu'il déroge à ce culte pour la personne humaine sur lequel repose toute notre morale.>>

【ミニ解説】
『自殺論』といえば自殺の諸類型として知られるが、デュルケームは人格崇拝という道徳との関連でも自殺を考えていた。デュルケームは、歴史上、様々な社会で自殺がどのように道徳的に評価され、その根拠が何であったかを探りながら、近代化の中で自殺が厳禁されていく理由を解明する。自殺は個人に宿る神聖な性質を侵犯するがゆえに、嫌悪をもたらす。

（山田陽子 記）

【キーワード】
自殺、道徳、人格崇拝

【出典】*Le Suicide: étude de sociologie*, 1897（Félix Alcan 版 p.379）
（邦訳）『自殺論』中公文庫、宮島喬訳、1985 年、421 頁

●ことばんごう no.6●

道徳を教えるとは、道徳を説教して頭に叩き込むことではない。それは、道徳を説き明かすことなのである。

<<Enseigner la morale, ce n'est pas la prêcher, ce n'est pas l'inculquer : c'est l'expliquer.>>

【ミニ解説】
デュルケームは、道徳性の本質的な要素として、規律の精神、社会集団への愛着、意志の自律性の三つを挙げた。人が道徳的に振る舞うためには、規律や愛着といった道徳感情によって個人が拘束されているだけでは十分ではない。デュルケームはカントを念頭に置きながら、自律性がなければ、道徳は受動的な服従に堕すると論じている。それは宗教的道徳の枠内にとどまる道徳であり、世俗化の進んだ社会においては、自律性に基づく道徳こそが重要となる。このような道徳は、規則の根拠や存在理由を説き明かす「道徳の科学」によって可能になる、というのが『道徳教育論』における彼の主張である。「道徳を説教して頭に叩き込む」ことが声高に叫ばれがちな現代社会において、「道徳を説き明かす」という別のあり方を追究するデュルケームの姿勢から学ぶことは多い。

（金瑛 記）

【キーワード】
規律の精神、社会集団への愛着、自律の精神

【出典】*L'éducation morale*, [1925]2012（Quadrige/Presses Universitaires de France 版 p.122）
（邦訳）『道徳教育論』講談社学術文庫、麻生誠・山村健訳、2010 年、215 頁

本科研メンバーによる関連業績

●本科研メンバーによる関連業績を紹介します。

（2015 年発表分のうち事務局で把握しているもの／著者名の 50 音順）

＊ 飯田剛史、2015、「9/11 同時多発テロからイラク戦争への米政策・マスコミ・世論の動態過程――「集合意識」による解明・試論」『大谷大学研究年報』第 67 集（大谷学会発行）、pp.1-33

＊ 岡崎宏樹、2015、「リズム論的思考(1)――社会学とクラーゲスのリズム論」『Becoming』No.34（BC 出版）、pp.98-132

＊ 岡崎宏樹、2015、「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』第 26 号、pp.69-90*

＊ 菊谷和宏、2015、『「社会」のない国、日本――ドレフュス事件・大逆事件と荷風の悲嘆』講談社

＊ 白鳥義彦、2015、「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム――現代との応答」『日仏社会学会年報』第 26 号、pp.91-104*

＊ 中島道男、2015、「デュルケムの「国家ー中間集団ー個人」プロブレマティーク」『日仏社会学会年報』第 26 号、pp.47-67*

備考：*を付した論文は『日仏社会学会年報』第 26 号（2015 年）の特集２「古典と現代――社会学におけるデュルケーム学派の今日的意義」に所載。

お知らせ・今後の活動

●Ｄ班第１回班別研究会　本科研メンバー向け

日　　時：　2016 年２月７日（日）

場　　所：　神戸大学（兵庫県神戸市）

内　　容：　事例紹介（社会学教育におけるデュルケーム・デュルケーム学派について）・研究動向の整理（「特集・社会学教育の現代的変容」を読む（『社会学評論』Vol.58(2007-2008)No.4）等）、および班の活動内容の確認

●第２回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催）

日　　時：　2016 年４月 16 日（土）午後

場　　所：　文京学院大学（本郷キャンパス）Ｂ館４０８教室（東京都文京区向丘）

内　　容：　本科研費研究関連としては、「社会学的方法の規準成立の“周辺”」というテーマの発表が予定されています。詳細が決定しましたらデュルケーム／デュルケーム学派研究会ＨＰ（http://homepage3.nifty.com/fjosh/durkheimian/）に掲載いたします。

備考：参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。

デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

※　研究会の内容は一部変更される場合もあります

本科研の概要　～前号に掲載した紹介の一部を再掲します［所属等は最新情報］～

●研究課題名
社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　15 名（平成 27 年度）
●研究種目と期間　基盤研究Ｂ（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要
本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、次の４つの角度から社会学的ディシプリンの成立・変容のプロセスを解明し、現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにすることを目指すものである。

●　研究推進の４つの柱と研究分担者一覧

＊ディシプリンの成立過程
多種多様な"sociologie"論が存在するなか、デュルケーム学派がどのようにして制度的な「社会学」を成立させたのかを考察し、隣接諸学との分節化のプロセスを解明する。
◆主に起源解明チーム（Ａ班）が担当＝太田健児［班長］（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（和歌山大学経済学部教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）

＊ディシプリンの継承・変容
デュルケーム社会学が後代にどのように解釈・批判・継承されたかを、社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、ディシプリン変容の過程を明らかにする
◆主に解釈史検討チーム（Ｂ班）が担当＝岡崎宏樹［班長］（神戸学院大学現代社会学部教授）／中島道男（奈良女子大学研究院人文科学系教授）［研究代表者］／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／飯田剛史（大谷大学文学部特任教授）／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）

＊各国の学説受容と教育化
デュルケームの学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって追究し、学説受容と社会・文化的条件の関係性およびアメリカ社会学の影響を明らかにする
◆主に国際比較チーム（Ｃ班）が担当＝藤吉圭二［班長］（追手門学院大学社会学部教授）／林大造（神戸大学キャリアセンター学術研究員）／中倉智徳（立命館大学衣笠総合研究機構研究員）

＊社会学教育法の開発
理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査するとともに、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組む
◆主に社会学教育チーム（Ｄ班）が担当＝白鳥義彦［班長］（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学研究院人文科学系教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）
※ 28 年度より研究分担者就任予定

さらに 13 名の研究協力者が参加（次頁）

● 研究協力者一覧（50 音順）

安達智史	近畿大学総合社会学部　講師
池田祥英	北海道教育大学函館校　特任准教授
梅澤精	新潟産業大学経済学部　教授
荻野昌弘	関西学院大学社会学部　教授
笠木丈	フランス国立社会科学高等研究院　博士課程
川本彩花	京都大学学際融合教育研究推進センター　研究員
金瑛	甲南女子大学　非常勤講師
杉谷武信	日本大学文理学部社会学科　非常勤講師
速水（小島）奈名子	神戸大学大学院人文学研究科　研究員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター　センター長
村田賀依子	奈良女子大学大学院人間文化研究科　博士研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部　非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学大学院国際社会科学研究院　研究員

クロニクル　2015 年 4 月～2016 年 1 月

- ●５/26(火)　国際学会発表に向けての準備会（大阪市）参加者５名
- ●６/２(火)　大野道邦先生ご逝去（享年７３）
- ●６/４(木)　部内報創刊号配信
- ●７/２(木)　部内報第２号配信
- ●７/15(水)　ニュースレター創刊号発行
- ●７/20(月)　デュルケーム命題集第１回編集委員会（広島市）参加者５名
- ●８/６(木)　部内報第３号配信
- ●９/３(木)　部内報第４号配信
- ●９/14(月)　Ａ班第１回研究会（詳細は本号 p.7）
- ●９/27(日)　Ｂ班第１回班別会議（詳細は本号 p.7）
- ●10/10(土)　第１回全体研究会（詳細は本号 pp.1-6）
- ●10/11(日)　第１回国際シンポジウム企画会議（奈良市）参加者 12 名
- ●10/15(木)　部内報第５号配信
- ●11/５(木)　部内報第６号配信
- ●12/３(木)　部内報第７号配信
- ●１/７(木)　部内報第８号配信
- ●１/９(土)　Ｂ班第２回班別会議（詳細は次号）
- ●１/10(日)　第２回国際シンポジウム企画会議（京都市）参加者７名

編集後記

ニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第2号をお届けします。今号では主に、2015 年7月以降の研究活動の報告を掲載しました。10 月には第1回全体研究会を開催し、その他、随時班別の研究会をおこなっています。次号では、4月の第2回全体研究会の模様などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）
「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第２号

発行日　：2016 年 1 月 15 日
編集発行：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506　奈良市北魚屋西町　奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.3
2016.7

3

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●2015 年度研究報告・2016 年度研究計画・・・・・・・・・・・ 2
●第 2 回全体研究会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 3 回・・・・・・・ 16
●2015 年度成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　14 名（平成 28 年 7 月現在・詳細は pp.2-9 を参照）
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（１）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（２）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（３）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（４）我が国における社会学教育(特に学説・理論教育)を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

2015 年度研究報告・2016 年度研究計画

A　起源解明チーム

●研究分担者（班長以外は 50 音順。以下同）

太田健児（班長）　尚絅学院大学総合人間科学部　教授
小関彩子　和歌山大学教育学部　准教授
菊谷和宏　一橋大学大学院社会学研究科　教授
北垣徹　西南学院大学文学部　教授

●連携研究者

池田祥英　北海道教育大学函館校　特任准教授

●研究協力者

荻野昌弘　関西学院大学社会学部　教授
笠木丈　フランス国立社会科学高等研究院　博士課程

—2015 年度研究報告—

デュルケームは「道徳的事実の定義」(1906)の中でこの道徳的事実に関する研究歴を回顧してこう述べている。「…およそ 20 年間私がこのテーマについて従事した研究から導出された道徳的事実の概念定義の結論である…」[1)]。この 20 年前にデュルケームはドイツに留学し、当時の仏文科省への報告論文「ドイツにおける道徳の実証科学」を書いたわけだが[2)]、「道徳的事実の定義」はフランス哲学会での論文発表とそれについての質疑応答とが編集されて今日残っている。このように、デュルケームの実証主義社会学の牙城は自ら創刊した『社会学年報』(*L'année sociologique*,1898～)だけでなく、*Bulletin de la Société française de Philosophie*、*Revue de Métaphysique et de Morale* にも進出し論陣が張られていた。これはデュルケームが哲学・思想の坩堝の中からその社会学をディシプリン化したことを示している。それゆえ、『社会学的方法の規準』(以下『規準』と略記)をディシプリン化の一つの到達点とみなし、『規準』自体の研究及び新訳作業を軸にしながらも、その成立過程と成立以後とその周辺を当時の文献に基づき再構成する作業が必須である(テーマ設定は「『社会学的方法の規準』成立とその周辺」である)。具体的に 2015 年度は *Les règles de la méthode sociologique* の新訳作業(菊谷担当)とその訳語の検討(菊谷、小関、太田、池田、吉本担当)、他分野との交錯についての経済学史から検討(吉本担当)、あるいは『社会学年報』を中心としたデュルケーム学派と形而上学者たち(Tarde,Fouillée,Guyau)との論戦などからの検討(北垣、太田、池田担当)、ベルクソン研究史からみたデュルケーム像の再構成(小関担当)などが試みられた。『社会学年報』誌上のデュルケミアンと哲学者・思想家たちとの議論からは、positif、sociologie、fait などデュルケーム学派固有と思われがちな鍵概念が当時の哲学者・思想家たちによっても使用されていた点が確認された。しかし他方で、フイエなどの著作では positiviste の代表的著作としてタルドの著作やデュルケームの『自殺論』が挙げられているという錯綜とした思想文脈が存在している点も確認された[3)]。また、ル・プレ学派とデュルケームとの関連の有無が要検討であり、さらにデュルケミアン

の中から活発な社会運動家が輩出し、それに応じた社会運動論が展開された点も再確認され、新たな検討課題になった。

1)E.Durkheim,*Sociologie et philosophie*,puf,1924,p.89.

2)E.Durkheim, "La science positive de la morale en Allemagne",dans *Textes, t.1*,Minuit,1975,pp.267-343.

3)A.Fouillée,*La France en point de vue moral*,Félix Alcan,1900,p.416.

A.Fouillée,*Le movement positiviste et la conception sociologique du monde* ,Félix Alcan,1910,p.375.

cf)D.Parodi,*Du positivism à l'idéalisme*,1930,J.Brin,p.253.

—2016 年度研究計画—

A 班の研究計画は次の四つからなる。①『社会学的方法の規準』(以下『規準』と略記)の新訳作業の加速(菊谷)、②『規準』成立の周辺解明のため『社会学年報』の詳細分析の継続(北垣、太田)、③デュルケーム社会学と他分野(哲学・倫理学、経済学など)との相違の解明(小関、池田、吉本、北垣、太田)、④デュルケーム研究の最前線の把握(北垣、太田)、以上四つからなる。

①に関しては、2015 年度の A 班研究会(和歌山大学)で『規準』の新訳における訳語の検討を行い、従来の訳語の成立背景、それが研究史に与えた影響、現在の社会学の研究水準や現代の"語感"と照合した場合の妥当性を、当時の社会思想家(タルド、フイエ)との対比、哲学・倫理学分野(ベルクソン)との対比、仏経済学史との対比も取り入れながら検討した。これらの成果を踏まえ新訳作業を加速させていく。②については、デュルケーム以外の自称社会学者たちも、「実証」、「事実」というキータームを平然と使用していた事情が判明したので、これらとデュルケーム社会学とを截然と区別する原理(ディシプリン)の発見を「デュルケームの中に見出していく」のが 2016 年度の目標である。それゆえ③については、『規準』成立あるいは成立後の周辺を、当時の歴史的文脈に還元し、その詳細をズームアップする作業になる。特に、ベルクソン哲学との違いよりも類似性探索の意義を A 班では確認しているので、ベルクソン自体の研究成果(国際学会での発表)も取り入れて検討を重ねていく。また、J.M.ギュイヨーなど社会学とは一線を画する道徳論の系譜との対比、G.タルドとの対比、経済学史からみたデュルケーム社会学の意義の再構成なども組み込んで「周辺」解明を行う。④については、ロラン・ミュキエリの研究や J-M.ベルトゥロらの研究を紹介していく。また、A 班の研究過程で、ル・プレ学派とデュルケームとの関連の有無の解明、デュルケミアンの中から活発な社会運動家が輩出し、それに応じた社会運動論が展開された事情の解明、以上が新たな研究課題として浮上したので、これらも作業の一環として組み込む。加えて、荻野昌弘氏によるフランス社会学史研究(『社会学史研究』日本社会学史学会に掲載)という金字塔が存在するので、それを参照しながらフランス社会学の再構成を行っていく。

中間報告を兼ねた研究会は秋に実施する(東京を予定)。

B　解釈史検討チーム

●研究分担者

岡崎宏樹（班長）	神戸学院大学現代社会学部　教授
飯田剛史	大谷大学文学部　特任教授
江頭大蔵	広島大学大学院社会科学研究科　教授
中島道男	奈良女子大学研究院人文科学系　教授　（研究代表者）
古市太郎	文京学院大学人間学部　助教
三上剛史	追手門学院大学社会学部　教授

●研究協力者

金瑛	甲南女子大学　非常勤講師
杉谷武信	日本大学文理学部社会学科　非常勤講師
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター　センター長
村田賀依子	奈良女子大学大学院人間文化研究科　博士研究員
吉本惣一	横浜国立大学成長戦略研究センター　研究員

―2015 年度研究報告―

2015 年度は、2 度の班別会議を開催し、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。研究は概ね順調に進められている。

2015 年 9 月 27 日に開催された第 1 回の班別会議では、B 班の研究が〈社会学のディシプリン再生〉という主題に対し、どのような意義を持ちうるのかを検討した。これを通じて、今後の研究で特に重要となるのは以下 3 点であるとの見通しを立てた。すなわち、①デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、②社会的なものが不透明化・不確実化する現代において、〈社会の生成〉をどう理論化するかという点に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、③批判的継承の中で失われたものや、非明示的な形で継承された問題意識と思考方法に着目し、後代の研究をとらえかえすこと、である。

2016 年 1 月 9 日に開催された第 2 回の班別会議では、江頭大蔵「デュルケーム社会学理論の修正と歴史的・発生論的方法」、古市太郎「贈与論の再考：一般社会学としての贈与」の研究発表がおこなわれた。江頭は、デュルケームの社会学が後世に継承される際に、彼においては有機的に結びついていた「歴史的方法」と「機能的方法」が分断されたことを指摘した。古市は、「贈与論」に焦点を当て、M.A.U.S.S.、経済社会学、人類学者・エナフに着目し、モースの継承と展開について考察した。

また、2015 年 10 月 10 日の第 1 回全体研究会・第 2 部「デュルケーム解釈に関するミニシンポジウム」では、バウマン／バタイユによるデュルケーム解釈（中島／岡崎）、「自殺論」の解釈史（江頭）に関する研究報告が行われた。

研究報告・研究計画

本科研に関連する成果としては、岡崎宏樹「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』26、「集合的沸騰の分析――溶解・拡大・連鎖」（日本社会学史学会大会報告）、中島道男「デュルケムの「国家―中間集団―個人」プロブレマティーク」『日仏社会学会年報』26 などがあげられる。

―2016 年度研究計画―

2016 年度も、引き続き、デュルケーム学派の社会学が、どのように解釈され、批判・継承されたのかという問題を検討する。その際、社会学・人類学の領域だけでなく、それ以外の領域にも視野を広げて検討を進めることにしたい。特に、哲学・思想、歴史学、経済学、思想的社会運動などを重点的に研究する予定である。哲学・思想に関しては、カイヨワとバタイユが 1930 年代におこなった「社会学研究会」の試みや、レヴィナスをふまえたバウマンのデュルケーム批判などに注目する予定である。歴史学に関してはアナール学派を中心に検討し、思想的社会運動についてはフランスの M.A.U.S.S.を考察する予定である。

班別の研究会は、第 1 回を 6 月に、第 2 回を 9 月に、さらに日程を調整し、年度内に後 1～2 回の研究会を開催する予定である。研究会の開催場所は京都を予定している。

第 1 回研究会（6 月）では、岡崎宏樹が「カイヨワとバタイユの戦争論」をテーマに報告し、村田賀依子が「ブルデューとデュルケーム」をテーマに報告をおこなう。また、第 2 回研究会（9 月）では、三上剛史が「贈与論」解釈の類型化の試みから明らかになる問題について報告し、中島道男がデュルケームとバウマン、デュルケームとガーフィンケルの関係に焦点を当て、社会学のディシプリン再生の契機を探る報告をおこなう予定である。

班別研究会では、2 名の研究発表をおこなうが、その内容をふまえて、デュルケーム社会学に対する後代の批判が学問のディシプリンにどのような影響を与えたかという問題を共同で討議する。また、各メンバーの研究の進捗状況についての報告をおこない、研究情報に関する情報交換をおこなう。

年 2 回の全体会議においては、他の班の成果を吸収するとともに、解釈史の検討という角度から何が寄与できるかを検討する。特に、D 班の「社会学教育」の『デュルケーム命題集』の企画に対し、解釈史研究の立場から積極的な提案をおこないたい。

班別研究会・全体会議以外の機会では、メールやネット会議によって随時情報交換や討議をおこなう計画である。

C　国際比較チーム

●研究分担者
藤吉圭二（班長）　追手門学院大学社会学部　教授
中倉智徳　立命館大学先端総合学術研究科　非常勤講師
●連携研究者
林大造　神戸大学キャリアセンター　学術研究員
●研究協力者
速水(小島)奈名子　神戸大学大学院人文学研究科　研究員
横井敏秀　大阪大学外国語学部　非常勤講師

―2015 年度研究報告―

2015 年度の国際比較班は、（１）スペイン・バルセロナでの古典社会学の受容とくに社会学専攻の新入生および他の社会科学系学生に対して社会学の古典の成果がどのように教えられているかに関する現地調査、および（２）台湾の社会学会においてデュルケーム理論がどのように受容され教えられているかに関する日本での聴取り調査を実施した。

（１）スペインでの調査

2016 年 2 月 21 日（日）～28 日（日）にかけてスペインでの調査を実施した（藤吉圭二、吉本惣一、川本彩花）。現地では、バルセロナおよび近郊に位置する Universitat Oberta de Catalunya、Universitat Autònoma de Barcelona、Universitat Abat Oliba CEU、Universitat Rovira i Virgili の 4 大学にそれぞれ海外研究協力者を訪問し、デュルケームをはじめとする社会学の古典的業績がどのように現在の研究に生かされ、また学生の教育に取り入れられているかについて調査を実施した。特に Universitat Oberta de Catalunya では 2 日間にわたり当大学の社会学者複数を交え、いかにして古典の成果を若い学生に伝えていくかといった課題について意見交換を実施した。いずれの大学においてもひきつづきメール等により情報提供に関し協力をいただけることになっており、それらの情報を補足した上で報告論文を作成する。

（２）台湾での古典教育に関する調査

2016 年 1 月 6 日（水）に、来日中の Hsiao 教授（国立台湾大学）に、台湾におけるデュルケーム理論の受容およびその教育などについて、インタビューを実施した（速水奈名子）。Hsiao 教授からはインタビューのテーマにかかわる資料等の提供も受けており、これらをとりまとめ報告論文を作成する。

―2016 年度研究計画―

2016 年度の国際比較班は、デュルケームの学説の各国での受容と教育プログラム化の状況を以下の諸点から解明する。（１）各国の社会学史・教育史文献および学説適用事例の収集・分析、（２）各国の研究者との連携強化、（３）海外調査の実施（アジア）。以下、順を追って記述する。

（１）各国の社会学史・教育史文献および学説適用事例の収集・分析

海外文献の収集を踏まえ、トルコ、台湾、コロンビアなど非英語圏での社会学受容、特にデュルケーム社会学の受容について調査を継続する。いずれの国も社会学を生み出したヨーロッパとは異なる社会背景を持つ国であり、それらの国において「近代的な社会」を対象と想定して成立・発展してきた社会学がどのように受容され、教育されているかについて調査を進める。特に台湾については 2015 年度に実施した聴取り調査の成果を踏まえ、現地調査実施の可能性を追求する。

（２）各国の研究者との連携強化

2015 年度に実施した調査の成果を踏まえ、スペインを中心としたヨーロッパおよびラテンアメリカの研究者との連携強化を進める。ヨーロッパでは 2015 年度に実施した現地調査によって得られた連携関係をより強化していく。ラテンアメリカでは電子メール、スカイプなどオンラインツールを利用して連携関係を強化していく。いずれの連携においても、デュルケームをはじめとする古典社会学の受容について情報収集を推進する。

（３）海外調査の実施（アジア）。

冒頭（１）でも既述したとおり、2015 年度に日本で実施した聴取り調査の成果を踏まえ、台湾での現地調査の実施を追求する。これまでの調査では、台湾社会学のアカデミアは主としてアメリカで学び学位を取得したスタッフによって発展してきたという経緯から、デュルケームをはじめとするヨーロッパ社会学の影響はそれほど濃いとは言えない。しかし、それらは社会学の古典として紹介され学ばれており、そうした古典的な社会学理論が台湾社会を研究するにあたりどのような視点や切り口を提供しているかについてより立ち入った調査が必要とされている。現地の研究協力者の助力を得て、これらの諸点について解明を進める。

D 社会学教育チーム

●研究分担者

白鳥義彦（班長）　神戸大学大学院人文学研究科　教授
小川伸彦　奈良女子大学研究院人文科学系　教授
横山寿世理　聖学院大学人文学部　准教授
山田陽子　広島国際学院大学情報文化学部　准教授　※平成 28 年 10 月より研究分担者就任予定

●研究協力者

安達智史　近畿大学総合社会学部　講師
梅澤精　新潟産業大学経済学部　教授
川本彩花　京都大学学際融合教育研究推進センター　研究員

—2015 年度研究報告—

第 1 回全体研究会（10 月）において、D 班からはアルヴァックス（横山寿世理）およびパーソンズ（白鳥義彦）それぞれに対するデュルケームの影響についての報告 2 本を行った。前者では、アルヴァックスが論じた「集合的記憶」からは、ベルクソンの記憶論への批判を超えて、デュルケームの集合意識もしくは集合表象からの影響を読み取ることができるという観点から、アルヴァックスに対するデュルケームの影響について取り上げた。後者では、『社会的行為の構造』を題材として、パーソンズに対するデュルケームの影響を検討した。パーソンズがデュルケームをよく読みこんでいるという事実とともに、本書では主意主義的行為理論の導出ということが主たる文脈となっており、構造（機能）主義、全体論的なマクロな視点、といったような、デュルケームからパーソンズへの影響といった文脈において通俗的に考えられ得るような観点は必ずしも強調されているわけではないことも確認された。

また班別研究会（2 月）において、「日本の大学における社会学教育と社会学説—2015 年度シラバスの検討から」（梅村麦生）、「社会学教育に関する研究動向—『社会学評論』Vol.58（2007-2008）、No.4「特集・社会学教育の現代的変容」をもとに」（白鳥）が報告され、さらに、参加者による研究課題の可能性として、国内で出版された社会学の教科書におけるデュルケーム／デュルケーム学派についての解説の調査・分析（横山）、デュルケームがどのように古典となっていたかという「『古典』化の社会学：デュルケームを事例に」（小川伸彦）、特にブルデューの芸術論に着目してのフランス社会学におけるデュルケームの継承（川本彩花）、という方向性が示された。加えて、『デュルケーム命題集（仮）』の出版計画についての現況も確認した。研究対象とするシラバスや教科書の範囲、社会福祉士等の専門資格と社会学教育との関係、出版に向けての『命題集』の位置づけの検討等、これからの研究遂行の土台となる諸点について考察を深めることができた。

さらに、論文として、「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム—現代との応答—」（白鳥）、「言葉としての「震災遺構」—東日本大震災の被災構造物保存問題の文化社会学—」（小川）なども刊行することができた。

―2016 年度研究計画―

本科研において、D 班＝社会学教育チームは、理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、社会学の教授法を調査するとともに、新たな教育方法を開発し、ディシプリン再生に実践的に取り組むことを課題とする。そのためにまず、2015 年度からの班別研究会を通じて考察を進めてきている、国内の社会学テキスト（教科書）におけるデュルケーム社会学の変遷やシラバスの検討を通じて、日本の大学教育におけるデュルケームを中心とした社会学史・社会学理論の位置づけを明らかにする、という研究課題について、2016 年度も継続して取り組んでいく。また国外の状況についても、英語圏およびフランス語圏を中心として、テキスト（教科書）、シラバス、またインターネット上に公開されている講義の内容等を通じて、検討を進めていきたい。さらに、デュルケーム社会学がどのように「古典化」されていったのかについて、国内外の研究書や教科書を通じて明らかにしていくことや、ブルデューをはじめとする後の社会学者に対するデュルケームの影響等についての研究の可能性も探っていく。

学説研究の成果を活かした新たな社会学教育法と教材のモデルを開発するという大きな目標の下でのより具体的な成果として、2015 年度に項目数、ページ数、編立てなどの基本的な編集のイメージを固めた『デュルケーム命題集』（仮題）の、出版社との交渉を含めた刊行の準備も引き続き進めていく。

これらの研究を着実に進めていくために、年 3 回程度の班別研究会を開催し、メンバー間での研究成果の共有を図る。また、具体的に調査を進めていくために、PD を雇用する予定を 2016 年度も立てている。研究成果の公表の一つとして、2016 年 7 月 10 日から 14 日の日程でウィーンで開催される、国際社会学会（International Sociological Association、ISA）の第三回 ISA 社会学フォーラム（Third ISA Forum of Sociology）において、D 班のメンバーからも本科研に関わる報告を行う予定である。

こうした研究活動を通じて、デュルケーム社会学を事例として社会学のディシプリン再生はいかにして可能かということを探究していく本科研での 4 年間の研究のための基盤をさらに確かなものとし、具体的な研究成果につなげていけるように形あるものに一歩ずつ近づけていくことが、2016 年度の目標である。

第２回全体研究会の報告

2016

本科研の第 2 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第 32 回研究会と共催)を下記のとおり実施しました。第 2 部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

●日時：2016 年 4 月 16 日（土）13:00～17:30
●場所：文京学院大学　本郷キャンパス　B 館 408 教室（東京都文京区）
●参加者：28 名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
●プログラム：

第 1 部　自由報告　13:30～15:00

芦田徹郎（甲南女子大学）
「デュルケームの culte de l'homme とサン=テグジュペリの culte de l'Homme」
コメンテーター：梅澤精（新潟産業大学）
司会：江頭大蔵（広島大学）

第 2 部　科研関連報告ミニシンポジウム　15:15～17:30

テーマ「社会学的方法の規準成立の“周辺”」
太田健児（尚絅学院大学）「社会思想から“社会学”へ－実証主義の系譜の再編の試み－」
北垣　徹（西南学院大学）「ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論」
小関彩子（和歌山大学）　「デュルケム認識論における二つの位相」
全体討議　司会：小川伸彦（奈良女子大学）

● 第２部ミニシンポジウム各報告の要旨 ●

社会思想から“社会学”へ－実証主義の系譜の再編の試み－

太田健児（尚絅学院大学）

デュルケームは『社会学的方法の規準』の中で自らの思想的な立ち位置を、唯物論者でもなく唯心論者でもなく、合理主義者(rationaliste)であるとし、実証主義(positivisme)はこの合理主義の一帰結であるとしている [1)]。当時の所謂人文系の思想家たちも自らの学問を sociologie とし、誰しもが sociologue であり、positiviste であった。それゆえ、デュルケームとその他の思想家たちとを区別する新たな根拠を見つけ出す必要がある。例えば、デュルケームの「道徳的事実の定義」(1906)には「…およそ 20 年間私がこのテーマについて従事した研究から導出された道徳的事実の概念定義の結論である…」[2)]という記述がみられる。20 年前といえば、特にドイツ留学後の報告論文「ドイツにおける道徳の実証科学」(1887)が該当する。F.-A.イザンベール(François-André Isambert)は道徳的事実(fait moral)という用語がこの論文で初めて使用されたことを指摘し、そこにデュルケームの道徳研究の出発点をみている [3)]。デュルケームは類推ではなく観察によって、現象のあらゆる個別的形態、あらゆる微妙な差異・多様性を詳細に研究することを説く。善自体、義務自体、法自体ではなく、私たちが直接に観察するものは、善、義務、法の具体相なのである [4)]。以上から、道徳的事実は、一面性に対する全体性、抽象態に対する具体相なのであり、類推に対する観察によって初めて把握可能となる。ちなみにデュルケームはコントの実証主義も批判している。『規準』の中でコントについて、「ユマニテの進歩」という「観念」を歴史に投射した点、歴史の「因果関係」という「観念」でもって「三段階の法則」が構築された点で批判されている [5)]。また、経験論についても（ロック、コンディヤック(Etienne Bonnot de Condillac,1715-1780)）、事物と観念とが混同されていた点が批判されている。彼らの考察対象は感覚そのものではなく感覚という「観念」についての考察であり、心理現象の客観的考察に値せずと酷評されている [6)]。

以上から、デュルケーム独自の実証主義の定式の一部が垣間見えてくるのである。

註

1)デュルケーム,宮島喬(訳)『社会学的方法の規準』岩波書店,1978 年(初版),19 頁.
E.Durkheim,*Les règles de la méthode sociologique*,puf,1933,p.Ⅸ.

2) E.Durkheim, "Détermination du fait moral",dans *Sociologie et philosophie*,puf,1924(1993),p.89.

3) François-André Isambert,*De la religion à l'éthique*,Cerf,1992,pp.357-369.

4) E.Durkheim, "La science positive de la morale en Allemagne",dans *Textes,t.1*,Minuit,1975,p.298.

5)デュルケーム,宮島喬(訳),前掲書,78-79 頁.
E.Durkheim,*op.cit.,*p.19.

6) デュルケーム,宮島喬(訳),同上書,94 頁.
E.Durkheim,*op.cit.,*pp.29-30.

ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論

北垣徹（西南学院大学）

1888 年に 34 歳で亡くなったジャン＝マリー・ギュイヨーは、『義務も制裁もなき道徳』『将来の無宗教』『社会学的観点から見た芸術』などの著作を残し、「フランスのニーチェ」と呼ばれることもある哲学者だ。実際、ニーチェはギュイヨーの著作を読んでおり、『力への意志』には彼についての言及がある。またギュイヨーは、ベストセラーとなった初等教育用教科書『二人の子どもによるフランス一周旅行』の著者 G.ブリュノ（オーギュスティーヌ・フイエ）を母とし、『自由と決定論』『社会的所有と民主主義』『現代の社会科学』の著者アルフレッド・フイエを義理の父とする。社会学との関連でいえば、デュルケームは初期の業績として『将来の無宗教』についての書評を行っている。そこに出てくる「アノミー」の新語を、ギュイヨーとは別の意味で継承し、『自殺論』の著者はみずからの社会学の中心的概念とするのだ。

ギュイヨーは道徳の問題にかんして、功利主義的説明と義務論的説明の両方を退け、「生 vie」の観点から考えようとする。生には無意識的生と意識的生がある。功利主義の考える快楽や苦痛は、無意識的な行動の原因ではありえず、後になってから意識のなかに入ってくるものである。快苦は付随的なもので、当初から存在するわけではない。当初に存在するのは、生の働きそのものとしての行為・行動 agir である。

ギュイヨーによれば、生の本性とは、増大と拡張、蓄積と横溢である。したがって、生は個体の内にとどまることなく、力の余剰から、他の個体の生成（生殖）に向かう。生の増大と拡張の原理により、個人が自己充足することはない。もっとも豊かな生は、みずからを惜しみなく与え、他者と共に分かつ方向へと向かう。つまり個体の生は、必然的に利他的・社会的な方向へと向かうのだ。

義務とは、こうした利他的方向へと拡がる無意識の力 pouvoir が意識化されたものだとギュイヨーはいう。義務や責務、道徳法則と呼ばれるものは、道徳の義務論的説明が想定したような超越的なものではない。それは、みずからが実行されることを要求する衝動 impulsion である。したがって、義務の感情は内的には、必然や拘束としてではなく、力能 puissance として感じられる。義務とは、必然的に行為へと至る力＝可能性 pouvoir の別名に過ぎず、生は、たえずみずからを展開していくことを固有の法則とするのである。

デュルケム認識論における二つの位相

小関彩子（和歌山大学）

デュルケムが認識論の伝統における経験主義と先験主義の双方を批判し、カテゴリーの持つ社会的性格を指摘することによって、このアポリアに解決を与えうる、と主張していることは既によく知られているところである。本発表は、デュルケムの提唱するこの解決法を吟味し、その限界を指摘するための試みである。

経験主義と先験主義の問題点を指摘したデュルケムは、カントのカテゴリーがアプリオリに与えられることを批判したが、しかし、普遍的なカテゴリーの存在を否定するわけではない。あえて言うならば、彼はなお観念論者であるとさえ言えるかもしれない。彼にとって、カテゴリーによって認識するという能力は人間に普遍的なものである。ただし、そのようなカテゴリーが、社会的事物であり、集合的思惟の所産である、と強調するところに、彼の力点がある。

デュルケムは普遍的概念とは対象の「本質」をあらわす「真理」なのである、という非常に伝統的な形而上学的真理観に則っている。ただし、彼にとって普遍性とは、永遠不変の絶対的真理ではなく、社会的・歴史的に構築されたものである。結局、デュルケムの言う「真理」も「永遠」も、カッコつきの「真理」だと言えるだろう。

ひとまず我々は、社会的表象を可能にするカテゴリーの持つこのような相対性をデュルケムが前提としている、と結論しよう。社会事象はそれ自体として実在するものであるわけではなく、集合意識にとって「現れ出てくる」現象であると結論付けよう。そして、社会学者たるデュルケムは、そのような表象の様式を「観察」しているのだ、と仮定しよう。

ここで我々が問わなければならないのは、では、そのような客観的観察者たるデュルケムは、どこに位置づけられるのか？という問いである。デュルケムが「科学的」だと称するこの方法もまた、もろもろの社会的認識図式のうちの一つに過ぎないのではないだろうか。デュルケムは、集合意識が集合表象を「構成」する、その様式を観察し、そのような様式について認識する。そのデュルケムの認識もまた、表象であるはずだ。だとすると、デュルケムが得たというその表象もまた、彼が構成したもの（あるいは、彼が属する社会の集合意識が構成したもの）なのではないだろうか？デュルケムは近代フランスという「社会」によって用意されたカテゴリー・図式によってものを認識している、あるいは、そのようなカテゴリーこそが彼の現実経験を可能にしている、と言うべきなのではないだろうか？

デュルケムは、あるいは、カントの言う超越論的主観性の位置に立っているのだろうか。対象にかかわるのではなく、アプリオリに可能だとされるような種類の我々の対象認識にかかわる全ての認識・経験を可能にする諸条件として機能する限りでの「アプリオリな認識」についての認識、そのような認識が自らに可能だと考えているのだろうか。しかしながら、このような超越論的主観性が、どこから依って来るのが不明だ、とデュルケムはカントの観念論を批判するはずではなかったのか。

デュルケムのカテゴリー論を精査すると、集合表象を表象する表象、集合意識に与えられたカテゴリーを認識するカテゴリー、社会的事象を構成する集合意識を構成する主観、と、無限に遡って行かざるを得なくなる。我々は、この無限遡及のどこに終止符を打つことが出来るのだろうか？あるいは、それもまた社会的「信憑」の範囲内におさめるべきなのだろうか？今後のさらなる考究が要請されている。

活動報告

2015 Ｂ班（解釈史検討チーム）2015 年度第 2 回班別会議の報告

日　時：2016 年 1 月 9 日（土）13:30～17:00

場　所：キャンパスプラザ京都　２階　第２会議室（京都市）

出席者：11 名

内　容：江頭大蔵「デュルケーム社会学理論の修正と歴史的・発生論的方法」
古市太郎「贈与論の再考：一般社会学としての贈与」

2015 第２回国際シンポジウム企画会議

日　時：2016 年 1 月 10 日（日）10:00～12:00

場　所：キャンパスプラザ京都　２階　第２会議室（京都市）

出席者：7 名

内　容：国際シンポジウムの開催時期やテーマ、招聘者などについて協議しました。

2015 Ｃ班（国際比較チーム）2015 年度第 1 回研究打ち合わせ

日　時：2016 年 1 月 31 日（日）13:30～15:00

場　所：追手門学院大学茨木キャンパス藤吉研究室（茨木市）

出席者：3 名

内　容：スペイン・バルセロナの大学で行う社会学教育に関する調査の事前打ち合わせ

2015 Ｄ班（社会学教育チーム）2015 年度第 1 回班別研究会

日　時：2016 年 2 月 7 日（日）13:30～18:00

場　所：神戸大学六甲台キャンパス文学部・人文学研究科 C 棟 4 階・C462 共同談話室（神戸市）

出席者：6 名

内　容：梅村麦生（神戸大学 PD）「日本の大学における社会学教育と社会学説—2015 年度シラバスの検討から」、白鳥義彦「社会学教育に関する研究動向—『社会学評論』Vol.58（2007-2008）、No.4「特集・社会学教育の現代的変容」をもとに」の報告が行われ、さらに、他の参加者の問題関心に基づく、複数の研究課題の可能性が示されました。

2015 Ｃ班（国際比較チーム）2015 年度第 2 回研究打ち合わせ

日　時：2016 年 2 月 15 日（月）14:00～16:00

場　所：追手門学院梅田サテライト（大阪市）

出席者：3 名

内　容：バルセロナ調査の詳細確認のための事前打ち合せ

活動報告

2016 2016 年度第 1 回全体会議

日　時：2016 年 4 月 17 日（日）10:00～13:30

場　所：日仏会館　509 室（東京都渋谷区）

参加者：14 名

内　容：各班の 2015 年度の研究成果と 2016 年度の研究計画、国際シンポジウムの開催計画、『デュルケーム命題集』（仮題）や最終報告書の刊行計画などについて協議しました。

2016 D 班（社会学教育チーム）2016 年度第 1 回班別研究会

日　時：2016 年 5 月 15 日（日）13:30～18:00

場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階 C462 共同談話室（神戸市）

出席者：6 名

内　容：横山寿世理「国内の社会学テキスト（教科書）におけるデュルケーム社会学の変遷（仮）」
小川伸彦「デュルケーム社会学の『古典化』―研究の可能性を探る」
白鳥義彦「『社会学分野の参照基準』とデュルケーム社会学」
山田陽子「『デュルケーム命題集』（仮題）刊行に向けての出版社との交渉の状況」
川本彩花「スペイン・バルセロナ調査と、それをふまえての研究プラン（案）など」
梅村麦生「日本の大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム―2015 年度シラバスの検討から（続き）」

2016 B 班（解釈史検討チーム）2016 年度第 1 回班別研究会

日　時：2016 年 6 月 12 日（日）14:00～17:30

場　所：KYOTO de MEETING（京都市）

出席者：8 名

内　容：岡崎宏樹「カイヨワとバタイユの戦争論――聖俗理論の展開」
村田賀依子「ブルデューとデュルケーム――国家の権力・存在の意味・象徴資本」

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第３回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。
今回は、「デュルケームの継承・展開」というテーマで、モースやゴッフマン、ブルデューの著作から、デュルケームの影響やデュルケームからの展開がうかがえる言葉を選びました。

※　ことばんごう no.7 と no.9 は「モース／ブルデューのことば」、ことばんごう no.8 は「（ゴッフマンが引用した）デュルケームのことば」となっています。
※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.7●モース「贈与論」のことば

善、幸福とはいかなるものかと遠くに探し求める必要はない。それは、課された平和のなかに、公共のための労働と個人のための労働とが交叉する律動のなかに、また、蓄積され、ついで分配される富のなかに、さらに、教育によりもたらされる相互的な尊敬と互酬的な寛容のなかに存在するはずである。

<< Il est inutile d'aller chercher bien loin quel est le bien et le bonheur. Il est là, dans la paix imposée, dans le travail bien rythmé, en commun et solitaire alternativement, dans la richesse amassée puis redisribuée dans le respect mutuel et la générosité réciproque que l'éducation enseigne. >>

【ミニ解説】
モースの贈与論で素描されている古今東西の贈与慣行は、打算に満ちつつも鷹揚であろうとする、面子を賭けた闘いの世界であった。鷹揚であろうとするがゆえに、審美的にもなるし（道徳生活の美学）、打算に満ちているがゆえに、政治的（権力関係の発生）でもあるし呪術的（呪術的パワーでの圧倒）でもある。こうして贈与は多機能的な全体性を帯びる。しかし、このような「血なまぐささ」にも関わらず、モースは現代においても日々取り交わされる、かつての贈与慣行の残存形態としての贈与の中に、道徳の可能性を見つけようとする。この視角は、デュルケーム宗教論における、集合的理想による社会の道徳的再建という課題の「日常化」とも言える。贈与、そして贈与によって取り交わされる「物」への着目は、デュルケームが社会の高みに追いやってしまった高邁な理想の取っつきにくさを、平均人（homme moyen）にも取りあつかい可能なかたちへと変換し、道徳の契機を日常のそこかしこに発見する道を開いた。

（林大造　記）

【キーワード】
道徳、贈与、美学（ことばんごう no.4 も参照のこと）

【出典】M. Mauss, *Sociologie et anthropologie,* [1950]1993（Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.279）
（邦訳）「贈与論」『社会学と人類学 I』弘文堂、有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳、1973 年、397 頁

●ことばんごう no.8●

人間の人格は神聖なものである。人はそれを侵したり、その境界を侵害してはならない。しかし同時に、他人とコミュニケーションをとることは最大の善事となる。

<<'The human personality is a sacred thing; one dare not violate it nor infringe its bounds, while at the same time the greatest good is in communion with others.'>>

【ミニ解説】

古典のレガシーを受け継ぎつつも、独創的な社会学理論を編み出した E.ゴッフマン。シカゴ大学出身の彼が、相互行為理論を構築する際に拠り所にしたのは、ジンメルでも、ミードでもなくデュルケームの理論であった。デュルケームは『宗教生活の原初形態』の中で、「聖／俗論」を展開し、宗教生活における「儀礼」の機能を詳細に分析したが、ゴッフマンは、現代社会における日常的相互行為状況のなかにも、これらの効果を見いだせる、と主張した。彼は、デュルケームによって分類された「積極的儀礼／消極的儀礼」を、「人格崇拝」をもとに繰り拡げられる「呈示儀礼／回避儀礼」として捉えなおし、相互行為状況において、行為者が互いに近づきすぎない／離れすぎないといった物理的・精神的距離の保ち方が「相互行為秩序」を維持する上で非常に重要である、と指摘した。このように、デュルケームによって考察された儀礼論は、後にゴッフマンやパーソンズらによって再考され、アメリカで展開された次世代の行為論に応用されていくことになるのである。

（速水(小島)奈名子　記）

【キーワード】

人格崇拝、儀礼、相互行為（秩序）

【出典】E. Goffman, Chapter2 "The Nature of Deference and Demeanor", *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior,* [1967]1982（Pantheon Books 版 p.73）

（邦訳）第二章「表敬と品行の性質（敬意とふるまいの性質）」、『儀礼としての相互行為』法政大学出版局、広瀬英彦・安江孝司訳、1986 年、69 頁

註：ゴッフマンは下記文献から引用している。

E. Durkheim, "The Determination of Moral Facts," *Sociology and Philosophy,* translated by D. F. Pocock, Free Press, Glencoe, Ill., 1953, p.37.

●ことばんごう no.9●ブルデューのことば

「思考形式」の社会的生成のデュルケームによる分析に続いて、社会的条件と歴史的状況に応じた世界に対する認知性向の変異を分析しなければならない。

<<Il faut [...] prolonger l'analyse durkheimienne de la genèse sociale des «formes de pensée» par une analyse des variations des dispositions cognitives à l'égard du monde selon les conditions sociales et les situations historiques.>>

【ミニ解説】

認識構造と社会構造の関係という問題は、ブルデューの研究をつらぬく重要なテーマのひとつである。ブルデューは、認識構造についての自身の議論を、デュルケームが分類のプリミティヴな形態についておこなった分析の続きに位置づけている。この「続き」の射程には、ハビトゥス概念はもちろんのこと、権力の問題や国家論までが入る。ブルデューは「デュルケーム派」だとは言えないだろうが、デュルケームの「遺産相続者」のひとりなのである。

（村田賀依子 記）

【キーワード】

分類、ハビトゥス、社会構造

【出典】P. Bourdieu, *Méditations pascaliennes,* [1997]2003（Seuil p.32）
（邦訳）『パスカル的省察』藤原書店、加藤晴久訳、2009 年、35 頁

2015 年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●論文・図書

＊ 岡崎宏樹、2015、「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』26：69-90*

＊ 小川伸彦、2015、「言葉としての「震災遺構」――東日本大震災の被災構造物保存問題の文化社会学」 『奈良女子大学文学部教育研究年報』12：65-80

＊ 白鳥義彦、2015、「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム――現代との応答」『日仏社会学会年報』26：91-104*

＊ 中倉智徳、2015、「イノベーション、社会、経済――ガブリエル・タルドと戦間期アメリカにおける「発明の社会学」」『年報　科学・技術・社会』24：35-57

＊ 中倉智徳、2015、「19 世紀末フランスにおける「科学の哲学」としての社会学――ガブリエル・タルドのネオ・モナドロジー成立過程」『フランス哲学・思想研究』20：15-28

＊ 中倉智徳、2016、「フランスにおける「イスラモフォビアの社会学」をめぐるノート――概念をめぐって」『生存学』９：120-127

＊ 藤原信行・中倉智徳編、2016、『生存をめぐる規範と秩序』、生存学研究センター報告 26、立命館大学

・中倉智徳、「社会学における倫理的自然主義の可能性について――フィリップ・ゴルスキ「事実／価値区分を越えて」論文を中心に」藤原信行・中倉智徳編『生存をめぐる規範と秩序』76-87

・藤原信行・中倉智徳、「まえがき――理論と経験的記述をめぐる〈雑感〉から」藤原信行・中倉智徳編『生存をめぐる規範と秩序』8-11

・中倉智徳・藤原信行、「あとがき」藤原信行・中倉智徳編『生存をめぐる規範と秩序』243-248

＊ 中島道男、2015、「デュルケムの「国家ー中間集団ー個人」プロブレマティーク」『日仏社会学会年報』26：47-67*

＊ 林大造、2016、「「大阪都構想」住民投票が生み出したローカル・マニフェスト運動――しみんマニフェスト大阪 UP の取組」『おおさかの住民と自治』（大阪自治体問題研究所）447：26-29

＊ 林大造、2016、「ローカル・マニフェスト運動からみた「都構想」住民投票、2015 年大阪市長選」『市政研究』（大阪市政調査会）190：6-15

備考：*を付した論文は『日仏社会学会年報』第 26 号（2015 年）の特集２「古典と現代――社会学におけるデュルケーム学派の今日的意義」に所載。

●学会報告

＊ 岡崎宏樹「集合的沸騰の分析――溶解・拡大・連鎖」（第 55 回日本社会学史学会大会一般研究報告、2015.6.27 於京都大学）

お知らせ・今後の活動

●第 3 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催)

日　　時：　2016 年 10 月 22 日（土）午後

場　　所：　奈良女子大学　S 棟 128 教室（奈良市）

内　　容：　池田祥英氏（北海道教育大学函館校）の研究報告と、本科研費研究関連としては、国際比較チームによるスペイン調査の報告が予定されています。
詳細が決定しましたら本科研の HP（http://homepage3.nifty.com/fjosh/discipline/）に掲載いたします。

備　　考：　参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。
デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

※　研究会の内容は一部変更される場合もあります

クロニクル　2016 年 1 月～2016 年 7 月

- 1 月 7 日（木）　部内報第 8 号配信
- 1 月 9 日（土）　解釈史検討班 2015 年度第 2 回班別会議（京都市）　参加者 11 名
- 1 月 10 日（日）　第 2 回国際シンポジウム企画会議（京都市）　参加者 7 名
- 1 月 15 日（金）　ニュースレター第 2 号発行
- 1 月 31 日（日）　国際比較班 2015 年度第 1 回研究打ち合わせ（茨木市）　参加者 3 名
- 2 月 4 日（木）　部内報第 9 号配信
- 2 月 7 日（日）　社会学教育班 2015 年度第 1 回班別研究会（神戸市）　参加者 6 名
- 2 月 15 日（月）　国際比較班 2015 年度第 2 回研究打ち合わせ（大阪市）　参加者 3 名
- 3 月 3 日（木）　部内報第 10 号配信
- 4 月 7 日（木）　部内報第 11 号配信
- 4 月 16 日（土）　第 2 回全体研究会（東京都文京区）　参加者 28 名
- 4 月 17 日（日）　2016 年度第 1 回全体会議（東京都渋谷区）　参加者 14 名
- 5 月 12 日（木）　部内報第 12 号配信
- 5 月 15 日（日）　社会学教育班 2016 年度第 1 回班別研究会（神戸市）　参加者 6 名
- 6 月 2 日（木）　部内報第 13 号配信
- 6 月 12 日（日）　解釈史検討班 2016 年度第 1 回班別研究会（京都市）　参加者 8 名
- 7 月 7 日（木）　部内報第 14 号配信

編集後記

ニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第 3 号をお届けします。本科研費研究も 2 年目に入りました。今号では 2015 年度と今年 6 月までの研究活動の報告や、2016 年度の研究計画を掲載しました。

次号では、10 月の第 3 回全体研究会の模様などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）
「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第 3 号

発行日　：2016 年 7 月 15 日
編集発行：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506　奈良市北魚屋西町　奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.4
2017.1

4

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●第 3 回全体研究会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 4 回・・・・・・・ 9
●学会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　13 名　●連携研究者　2 名　●研究協力者　12 名（平成 28 年 12 月現在）
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度
●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

● ４つの班とメンバー

Ａ班（起源解明チーム）
—ディシプリンの成立過程

【研究分担者】太田健児［班長］（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）
【連携研究者】池田祥英（北海道教育大学函館校特任准教授）
【研究協力者】荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

Ｂ班（解釈史検討チーム）
—ディシプリンの継承・変容

【研究分担者】岡崎宏樹［班長］（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学研究院人文科学系教授）［研究代表者］／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）
【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（日本大学文理学部社会学科非常勤講師）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビセンター　センター長）／村田賀依子（奈良女子大学大学院人間文化研究科博士研究員）／吉本惣一（横浜国立大学成長戦略研究センター研究員）

Ｃ班（国際比較チーム）
—各国の学説受容と教育化

【研究分担者】藤吉圭二［班長］（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（立命館大学先端総合学術研究科非常勤講師）
【連携研究者】林大造（神戸大学キャリアセンター学術研究員）
【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

Ｄ班（社会学教育チーム）
—社会学教育法の開発

【研究分担者】白鳥義彦［班長］（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学研究院人文科学系教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）※ 29年度より研究分担者就任予定
【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／川本彩花（京都大学学際融合教育研究推進センター研究員）

第３回全体研究会の報告

2016

本科研の第 3 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第 33 回研究会と共催）を下記のとおり実施しました。第 2 部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時：2016 年 10 月 22 日（土）13:00～18:00
- 場所：奈良女子大学　文学系 S 棟 128 教室（奈良市）
- 参加者：24 名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
- プログラム：

第 1 部　自由報告

「デュルケーム／デュルケーム学派とガストン・リシャール」

池田祥英（北海道教育大学函館校）

コメンテーター：北垣徹（西南学院大学）

司会：江頭大蔵（広島大学）

第 2 部　科研関連報告ミニシンポジウム

テーマ「海外でのフランス社会学受容について――スペイン、韓国、台湾を事例に」

・「日程・概要など」　藤吉圭二（追手門学院大学）

・「スペイン調査について」　吉本惣一（横浜国立大学）
川本彩花（京都大学）

・「韓国調査について」　林　大造（神戸大学）
中倉智徳（立命館大学）

・「台湾調査について」　速水(小島)奈名子（神戸大学）
［藤吉が代読］

全体討議　司会：小川伸彦（奈良女子大学）

● 第 2 部ミニシンポジウム各報告の要旨 ●

スペイン調査について

吉本惣一（横浜国立大学）・川本彩花（京都大学）

社会学の多様化・細分化が進む中で、社会学における共有知の希薄化は我々にとって等閑視できない課題の一つである。この課題に対し、考え得るアプローチはいくつかあるが、デュルケーム、ジンメル等、いわゆる古典と呼ばれるものに立ち戻り、それらを現代と結びつけなおすことは、その中でも有効な手段の一つといえるだろう。そのための糸口として、バルセロナにおいて、社会学の古典がどのように用いられているのかを、現地の社会学者たちに質問した。

今回の調査（2016 年 2 月 21 日～28 日）では、Universitat Oberta de Catalunya（online による大学）、Universitat Autònoma de Barcelona（スペインの大学では最高ランクの大学）、Universitat Abat Oliba CEU（カトリック系キリスト教大学）の三大学を訪問し、各大学に所属する三名[1]にインタビューすることができた。バルセロナの大学共通の社会学教育指導要領は存在しないものの、学生の就職という観点からも、理論よりも実践的な側面（例えば社会調査）が重視される傾向にある。そのため、古典を扱うには、現代社会といかに結びつけられるかが重要となってくる。したがって、古典の「正統的」解釈よりも、現代という視点から、その有効な部分を篩い分け、使える部分と使えない部分を明確にしていく必要がある、などの状況報告を吉本が行なった。

続いて川本報告では、上述のスペイン調査のさらなる内容紹介と、それをふまえて本科研で取り組みたい研究について報告を行なった。

まず、スペイン調査の内容としては、とくに Universitat Oberta de Catalunya にて行った日本における社会学教育に関する発表（学部時代にどのような社会学教育（とくに社会学の古典）を受けたか、現在の自分の研究にどのような影響があったか）と、それに対するコメントに焦点を当てて報告した。また、社会学教育に関する情報・意見交換（学生（学部生）に社会学の古典をどのように教えているか）において得られた、スペインでの社会学教育のあり方の一端についても紹介した。次に、今回のスペイン調査をふまえて本科研で取り組みたい研究テーマとしては、「西洋と社会学／日本と社会学」を提示した。具体的には、西洋で生まれた学問である社会学の理論・学説が教えられる際、その理論・学説のもつ地域性や時代性、およびその理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などはいかに扱われているのかについて、当面は日本の社会学教育を対象に検討するという課題である。さらに本報告では、研究方法や現時点での結果、今後の展望等についても提示したため、これからさらに検討を進めていきたい。

1　Natàlia Cantó Milà（Universitat Oberta de Catalunya）
Swen Seebach（Universitat Autònoma de Barcelona）
Miguel Franquet dos Santos（Universitat Abat Oliba CEU）
なお、今回の調査はバルセロナにおいて実施したので、マドリードなどでの状況は異なる可能性がある。

韓国調査について

林大造（神戸大学）・中倉智徳（立命館大学）

本報告では、2016 年 9 月 17 日に実施したキム・ミョンヒ（金明姫・Kim Myung-Hee）先生（建国大学統一人文学センター研究教授）への、韓国でのデュルケーム受容をめぐるインタビュー調査結果について報告した。キム先生は博士論文でマルクスとデュルケームを社会学史・理論史として論じられて以来、デュルケーム理解の更新とその現代的応用に努められ、とくに社会学的トラウマ理論から、自殺や被害者に関する研究をされている。強く印象に残ったのは、キム先生が、深いデュルケーム愛と理解とに基づいた実践的な応用を一貫してなされていることである。デュルケームの前期／後期という区別をあえてせず、「一つのデュルケーム」として理解し、社会科学を自然科学へと還元する還元主義に対抗するために、デュルケームの科学認識論を、創発概念に着目しつつ、非還元的階層性をもった批判的実在論の基礎理論として解釈しておられた。この立場は理論的なものだけではない。彼女は「九老（クロ）市民センター」の創設などの市民運動への参加や、さらには韓国政府の自殺対策の委員会やセウォル号沈没事故の研究プロジェクトの審査など、実践的な活動にも関わっている。とくに自殺対策について、心理現象（うつや報道による模倣）や経済現象（不況）といった還元主義的な理解と対策が中心であったのに対し、自殺をそれらに還元しえない社会学的な現象としてとらえ、むしろ家族を含む社会的な紐帯をどのように再活性化するかが課題であるという立場から、自殺対策の変更を政府の委員会において提言されている。このような新たなデュルケーム理解に基づいた政策提言を行なうキム先生の姿勢は、社会学のディシプリン再生を目指す私たちの科研の重要な参考となるのではないか。

最後に韓国の状況について言及しておくと、やはり理論社会学は危機的状態にあり、とくにデュルケームおよびフランス社会学の受容は不十分であるとのことであった。デュルケームの著作の訳出も最近になってからで、1990 年に『自殺論』（完訳版）が訳出されたのが最初であり、2012 年に『社会分業論』が刊行されたことで、ようやく主著の完訳がそろうような状況であった。ただ、ベラーの弟子で延世大学のパク・ヨンシン氏の元でデュルケーム研究を行なった院生が多く輩出されたほか、『社会分業論』の訳者ミン・ムンホン氏らの活動によって、デュルケームの再評価の機運が高まりつつあるそうだ。キム先生も博士論文、そして自殺論に関する著作が刊行予定である。今後は日韓のデュルケーム研究を連携して進めていくといった新たな展開もみえてくるような調査となった。

台湾調査について

速水(小島)奈名子（神戸大学）

京都大学東南アジア研究所客員研究員として日本滞在中の簫新煌教授（Professor Hsiao Hsin-Huang）に速水がインタビューを実施し、台湾におけるデュルケーム理論の受容について聴取りを行なった。簫教授は国立台湾大学社会学部教授で、中央研究院（台湾）社会学科特聘研究員もお務めである。実施形態は以下の通り。

日時：2016 年 1 月 6 日（水）13:30-14:50（本科研の説明も含めて 80 分）

場所：京都大学東南アジア研究所　　使用言語：英語

質問は大きく、①台湾におけるデュルケーム理論受容について、②台湾社会学におけるデュルケーム理論の位置づけについて、③台湾と中国におけるデュルケーム理論受容の比較について――以上 3 点に集約できる。以下、質問への回答を摘記する。

①台湾におけるデュルケーム理論受容について

デュルケームが古典社会学理論の重要人物の一人として取り上げられることはもちろんだが、授業で取り上げる際の比重はそれほど大きくない。はじめの 1 コマで紹介する程度で、授業を通じて彼の理論を分析・熟考したという例は、私の教え子である宗教社会学者がデュルケーム理論を取り上げた授業以外には稀だと思う。デュルケームは間違いなく社会学理論の基礎を築いたが、台湾ではむしろ彼は経験的調査のための方法論の基礎を築いた人物と捉えられている。彼が実際に用いた方法論を研究者や学生が自らの調査研究に応用するということがよくなされてきた（参考：国家図書館での論文タイトルデータ検索：http://ndltd.ncl.edu.tw/）。

②台湾社会学におけるデュルケーム理論の位置づけについて

上にも述べたように、台湾では実践的な関心で社会学に取り組む場合が多い。1960 年代にアメリカ社会学の影響を強く受ける中で成立した台湾の社会学は、他民族の自立と共生という台湾の歴史と現状に取り組んできた。台湾社会の構造そのものを分析するための経験的調査およびその方法論の洗練がそこでの使命とされた。台湾の社会学のこうした姿勢には、確かにアメリカ経由の社会学の伝統を受け継いだという背景があるように思われる。

③台湾と中国におけるデュルケーム理論受容の比較について

これについて詳細まで語ることは難しいが、まずスタートが台湾と中国では異なる。中国では 1980 年代から社会学の基礎が築き上げられた。中国は「マルクス熱」の強い地域だが、マルクスの思想は社会学の範疇を超え、社会思想として受け入れられた。社会学の成立にあたってデュルケームの理論も紹介されたが、その理論研究が活発とは言えない。中国ではアメリカ社会学をそのまま受け入れることにも抵抗があるため、独自の調査方法論が展開されており、デュルケーム理論への関心は台湾よりも低いと思う。

以上の回答を得る過程で興味深い指摘もなされた。台湾では経験的調査と分析が活発で、批判理論への関心も高く、ディシプリンが揺らいでいることは日本と同様だが、そこで「社会学の危機」が強調されることは少ない。この点について日本の状況への関心が示された。

（なお、本報告文は速水の発表原稿を藤吉が要約し、速水の了承を得たものである。）

活動報告　※2016 年７月から現在まで

2016 Ｄ班（社会学教育チーム）2016 年度第２回班別研究会

日　時：2016 年 8 月 28 日（日）13:30～18:00

場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階 C462 共同談話室（神戸市）

出席者：5 名

内　容：小川伸彦「＜デュルケーム命題集＞刊行計画について」

梅村麦生「社会学の方法論と主題設定に関わるデュルケーム――社会学史・社会学概論・社会学理論のシラバスから」

横山寿世理「国内社会学教科書におけるデュルケーム社会学の変遷」

川本彩花「社会学教科書における理論・学説の教授法――デュルケーム学派を中心に」

白鳥義彦「日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケームの取り上げられ方」

2016 Ｂ班（解釈史検討チーム）2016 年度第２回班別研究会

日　時：2016 年 9 月 24 日（土）13:00～17:00

場　所：キャンパスプラザ京都　第２会議室（京都市）

出席者：10 名

内　容：三上剛史「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話――Mauss から MAUSS へ」

中島道男「社会学のディシプリン再生――バウマンのデュルケム批判を出発点に」

2016 2016 年度第２回全体会議

日　時：2016 年 10 月 23 日（日）10:30～12:20

場　所：奈良女子大学文学系 N 棟 339 室（奈良市）

出席者：14 名

内　容：各班の進捗状況報告や国際シンポジウムのプログラム案などの検討、『デュルケーム命題集』（仮題）や最終報告書の刊行計画などについて協議しました。

2016 2016 年度第１回編集会議

日　時：2016 年 10 月 23 日（日）13:30～15:15

場　所：奈良女子大学文学系 N 棟 339 室（奈良市）

出席者：10 名

内　容：『デュルケーム命題集』（仮題）の構成について検討しました。

活動報告

2016 D班（社会学教育チーム）2016 年度第３回班別研究会

日　時：2016 年 12 月 10 日（土）13:30～19:00
場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階 C462 共同談話室（神戸市）
出席者：5 名
内　容：川本彩花「社会学教科書における理論・学説の教授法」
横山寿世理「国内社会学教科書におけるデュルケーム社会学の受容――「社会」と「近代市民社会」」
白鳥義彦「社会学教科書に関する研究レビュー ――『社会学評論』Vol.56（2005-2006）No.3「特集・テキストに映し出される社会学の知―大学の大衆化とテキスト革命―」をもとに」
梅村麦生「ドイツの大学における社会学史・社会学理論とデュルケーム――ビーレフェルト大学ほかのシラバスを例に」
小川伸彦「索引の中のデュルケーム――装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について（１）」

2016 A班（起源解明チーム）2016 年度第１回班別研究会

日　時：2016 年 12 月 17 日（土）13:00～17:00
場　所：一橋大学大学院・社会学研究科 社会学共同研究室会議室（東京都国立市）
出席者：7 名
内　容：荻野昌弘「分業の起源を問う――『社会分業論』を起点として」
小関彩子「デュルケム認識論の外に立つデュルケム」

2016 B班（解釈史検討チーム）2016 年度第３回班別研究会

日　時：2017 年 1 月 7 日（土）13:00～17:00
場　所：キャンパスプラザ京都　２階ホール（京都市）
出席者：10 名
内　容：金瑛「デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に」
古市太郎「贈与と社会性（le social）――贈与論の継承と展開」

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第４回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号のように、デュルケームをめぐる言葉も取り上げることがあります。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.10●

これらの（ダーウィンによる）仮説は道徳生活の本質的要素を捨象してしまっている。つまり、社会がその成員たちに課して、生存のための闘争や自然淘汰というむきだしの活動をやわらげ、中和する、あの調整力というものを考慮に入れていない。ところが、社会が存在するところでは、どこにでも愛他主義がある。そこには、連帯があるからである。

<< Elles (les hypothèses de Darwin) font, en effet, abstraction de l'élément essentiel de la vie morale, à savoir de l'influence modératrice que la société exerce sur ses membres et qui tempère et neutralise l'action brutale de la lutte pour la vie et de la sélection. Partout où il y a des sociétés, il y a de l'altruisme, parce qu'il y a de la solidarité. >>

（　）内は引用者による

【ミニ解説】

『社会分業論』は社会学の古典のひとつであり、左記のことばにはデュルケームの社会観が現れている。

この箇所では、まず個人あるいは利己主義が出発点にあり、生存競争と自然淘汰の結果、社会に秩序がうまれるというスペンサーの社会進化論あるいはその基となる思想・ダーヴィニズムが批判されている。

このような批判が可能なのは、社会が個人あるいは利己主義からなるのではなく、そこに存在する連帯および愛他主義が社会生活の根本的基礎にある、とデュルケームが捉えているからだ。この立場に基づき、未開社会あるいは近代社会における「機械的連帯・有機的連帯」という彼独自の連帯論が展開されている。

また、デュルケームが捉える個人主義とは歴史的発展からうまれるというものであって、単純な「個人 vs 社会」という二項対立的立場や「社会実在論」に陥っていない。

近年では、「連帯経済論」や「社会包摂論」が注目を浴び、それらの水脈の一つに、デュルケームの連帯論も位置付けられている。このように、連帯は、社会を読み解く際の有効な基礎概念のひとつとなっている。

（古市太郎　記）

【キーワード】
連帯、社会、個人主義

【出典】E.Durkheim, *De la division du travail social*, [1893]2013（Quadrige/Presses Universitaires de France 版 p.174）
（邦訳）『社会分業論』現代社会学体系 2・青木書店、田原音和訳、1971 年、191 頁.

●ことばんごう no.11●ズィヤ・ギョカルプのことば

集合表象（maş'erî ter'iler）は、沸騰的危機（galeyanlı buhranlar）の時期には、極めて強力な忘我的熱狂（vecitler）を喚起する円光に身を包むことによって、最大のエネルギーと威力を獲得する。集合表象はその時まことの「理想（mefkûre）」となる。集合表象は、それが理想と化して初めて、真の革新（inkılâplar）の動因となるのである。

<< Maş'erî ter'iler, galeyanlı buhranlar esnasında gayet şiddetli vecitlerle halellenerek son derece büyük bir kudret ve kuvvet iktisap ederler. Maş'erî ter'iler,asıl mefkûre halini aldıktan sonradır ki, hakikî inkılâpların âmili olurlar. >>

【ミニ解説】

ズィヤ・ギョカルプ(Ziya Gökalp, 1876-1924)は、近代トルコ最大の思想家(一時期イスタンブル大学教授)として、トルコ・ナショナリズムを定式化し、ケマル・アタテュルクによるトルコ革命に思想的基礎づけを提供した人物である。同時代人デュルケームの社会学に深く傾倒したギョカルプは、社会学をナショナリズムと近代化に寄与する中心的科学とみなし、デュルケーミスムの移植と制度化に力を尽くした。彼はデュルケームの言説のうちに、集合的「理想」の出現メカニズムと役割についてのアイディアを基礎とする革新的社会変動の理論枠組を読み取り、国家新生の陣痛のさなかにあったトルコ社会に適用しようとした。デュルケームを静態的・秩序志向的にではなく、理想主義的文脈において動態論的に読み込み、摂取することに向けられた彼の試みは、その後本家の欧米学界を長らく支配する、「保守主義的」デュルケーム像の対極に位置するものである。それは、デュルケーム・ルネサンスの到来により、例えばティリヤキアンらによって「発見」された「沸騰論的な」デュルケーム像との親縁性さえ感じさせる斬新さをもつ。その思考において、時としてショッキングなほどナイーヴな一面をのぞかせるギョカルプではあるが、ここに引用した一節は、彼の社会学的直観の鋭さ、確かさを雄弁に物語るものといってよい。

（横井敏秀　記）

【キーワード】

ズィヤ・ギョカルプ、理想、集合的沸騰、動態論的アプローチ

【出典】*Türkçülüğün Esasları*　（『トルコ主義の諸原理』）, 1923　（Varlık Yayınevi 版 pp. 50-51）

学会報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）　※2016 年 7 月から 2016 年 12 月まで

●国内学会

＊　杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論――『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」（2016 年度日仏社会学会大会自由報告、2016.11.19　於関西大学）

＊　村田賀依子「ハビトゥスと潜在性（potentialité）――実践と状況の関係をめぐる考察」（2016 年度日仏社会学会大会テーマセッション報告、2016.11.19　於関西大学）

●国際学会

＊　Ayako Ozeki "Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology", 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.12 University of Vienna

Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology（要旨）

小関彩子（和歌山大学）

2016 年 7 月 12 日、ウィーン大学における 3rd ISA Forum of Sociology の RC25 Language and Society Session: Sociological Studies of Language 部会に参加し、Theory & Method セッションにて、Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology というタイトルで発表を行った。報告内容の概要は以下の通りである。

まず第 1 章では、デュルケムがカテゴリーをどのように位置づけていたのかを明らかにした。ここでは、彼が最終的には客観的で普遍的な真理の存在を否定し、カテゴリーという認識の枠組みを相対化するに至ると結論づけた。

その上で第 2 章では、デュルケム自身が社会を認識するに際して採る、その立ち位置を検証した。そして、彼の認識論批判が彼自身に向けられた場合に帰結する、その矛盾を指摘した。デュルケムにとってカテゴリーとは、集合意識が対象を表象する、そのしかた、様式のことである。そして、社会学者たるデュルケムは、そのような表象の様式を「観察」している。しかしながら、そのような観察者たるデュルケムの得た認識もまた、彼が構成したものなのではないだろうか。

デュルケム自身は彼が解明した認識論の枠組みの外に立ち、あたかも超越論的主観性を持っているかのような立ち位置から社会的事象を「科学的」に観察・記述できると主張しているように見えるが、しかしその根拠は示されていない。報告者の提示したこの図式に対して、報告後、会場の数人の参加者から、賛同の意が表された。

お知らせ・今後の活動

●訃報

2016 年 8 月 20 日、研究分担者（解釈史検討班）の飯田剛史教授（大谷大学文学部）がご病気のためお亡くなりになりました（享年 66）。デュルケームの理論研究のみならず在日コリアンの宗教とまつりの研究で大きな功績を残された飯田先生の早すぎるご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈りいたします。

（事務局）

●第 4 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催）

日　　時：　2017 年 4 月 15 日（土）午後
場　　所：　文京学院大学（本郷キャンパス）
内　　容：　本科研費研究関連としては、社会学教育チームによる報告が予定されています。詳細が決定しましたら本科研のウェブページに掲載いたします。
備　　考：　参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。
デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

※　研究会の内容は一部変更される場合もあります。

●ウェブページのお知らせ

本科研のウェブページの URL が変わりました。ニュースレターのバックナンバーも読めますので、ぜひご利用下さい。

新 URL：http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

クロニクル　2016 年 7 月～2017 年 1 月

■■　2016 年

7 月 7 日（木）	部内報第 14 号配信
7 月 15 日（金）	ニュースレター第 3 号発行
8 月 7 日（木）	部内報第 15 号配信
8 月 28 日（日）	社会学教育班 2016 年度 第 2 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名
9 月 1 日（木）	部内報第 16 号配信
9 月 24 日（土）	解釈史検討班 2016 年度 第 2 回班別研究会（京都市）参加者 10 名
10 月 6 日（木）	部内報第 17 号配信
10 月 22 日（土）	第 3 回全体研究会（奈良市）参加者 24 名
10 月 23 日（日）	2016 年度第 2 回全体会議（奈良市） 参加者 14 名
10 月 23 日（日）	2016 年度第 1 回編集会議（奈良市） 参加者 10 名
11 月 10 日（木）	部内報第 18 号配信
12 月 1 日（木）	部内報第 19 号配信
12 月 10 日（土）	社会学教育班 2016 年度 第 3 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名
12 月 17 日（土）	起源解明班 2016 年度 第 1 回班別研究会（国立市）参加者 7 名

■■　2017 年

1 月 7 日（土）	解釈史検討班 2016 年度 第 3 回班別研究会（京都市）参加者 10 名
1 月 12 日（木）	部内報第 20 号配信

編集後記

「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第4号をお届けします。今号では、10月の第3回全体研究会の報告や研究活動の報告を掲載しています。次号では、4月の第4回全体研究会の模様や、今年度の研究報告などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）
「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第４号

発行日　：2017 年 1 月 15 日
編集発行：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部 中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.5
2017.7

5

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●2016 年度研究報告・2017 年度研究計画・・・・・・・・・・ 2
●第 4 回全体研究会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 5 回・・・・・・・ 18
●2016 年度成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　14 名　●連携研究者　3 名　●研究協力者　13 名（平成 29 年 7 月現在）
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

2016 年度研究報告・2017 年度研究計画

A　起源解明チーム

●研究分担者（班長以外は 50 音順。以下同）

太田健児（班長）　尚絅学院大学総合人間科学部　教授
小関彩子　和歌山大学教育学部　准教授
菊谷和宏　一橋大学大学院社会学研究科　教授
北垣徹　西南学院大学文学部　教授

●連携研究者

池田祥英　北海道教育大学函館校　特任准教授

●研究協力者

赤羽悠　フランス国立社会科学高等研究院　博士課程
荻野昌弘　関西学院大学社会学部　教授
笠木丈　フランス国立社会科学高等研究院　博士課程

◆2016 年度研究報告

デュルケーム社会学の起源解明とはそもそも何を意味し、その達成のためどのような研究方法が有効なのか。これを自問自答しながら 2016 年度の研究活動は続けられた。つまり『社会学的方法の規準』(以下『規準』)をディシプリン化の一つの到達点とみなし、『規準』自体の研究及び新訳作業を軸に、その成立過程と成立以後、それらの周辺を、デュルケームのテキストの内在的理解を根本に据えながら、当時の思想潮流一般をなるべく丁寧に再現させ、その中にデュルケームを位置づけて、デュルケーム社会学を浮き彫りにしていく作業を下記の通り継続した。

一つは春の全体研究会で「社会学的方法の規準成立の“周辺”」というタイトルの下、「社会思想から“社会学”へ ―実証主義の系譜の再編の試み―」(太田)・「ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論」(北垣)・「デュルケム認識論における二つの位相」(小関)と題して発表報告を行った。『規準』の新訳作業(菊谷)が着々と進む中、他の 3 人はその周辺つまり外堀を埋める作業に徹したことになる。2015 年度の A 班の研究成果の一部である「実証」「社会学」「社会学者」というキーワードがデュルケームだけに限らず、広く人文系学問と共有していた点を深めるべく、フランス思想史の奥の深さ、裾野の広さ、ある種の自己完結的な思想空間(ドイツ哲学に依拠せずともフランスだけで一つの思想空間・系譜を築いていたという事実)を証明する作業が行われたわけである。そして、フランス版ニーチェのようなギュイヨー、世評に比してデュルケームとの思想的共通性が多々あるベルクソン、言語学的観点からのデュルケーム思想の再構成の可能性などが明らかになった。中でもデュルケームとベルクソンとの比較思想研究は国際学会でも発表された(小関)。

さらにこれらが継続され、12 月には一橋大学での A 班研究会に持ち込まれた。「社会学的方法の規準成立の“周辺”」あるいは「デュルケーム独自のディシプリン」解明には、他の社会科学とデュルケーム社会学との相関解明が必須である。この観点から、A.スミスやマルクスがデュルケームにどう流れ込んでいるのかを『社会分業論』の再読を通しての研究(荻野)、フランス経済学史からみたデュルケームの社会分業論研究(吉本)、外堀埋め作業としてのドゥプロワジェやリシャールの研究(池田)の発表とかなり深入りした討論が行われた。今日的な高度化・専門化され個別細分化されていたわけではない当時の社会科学にあって、デュルケ

ームにおける経済学的志向の有無、サン・シモン研究とは一体デュルケームにとって何だったのか、彼の思想圏外に成り下がったのか、その後のデュルケミアンたちの社会運動や労働運動、延いては政治活動へのコミットメントをどう評価し、その点へのデュルケーム自身の社会学の理論的影響の有無など、今後も A 班の重要な研究課題である点が確認された。

なお、起源解明、社会学的方法の規準成立という看板からは、この時代「以前」か「同時期」の研究を連想してしまいがちだが、そうではない。デュルケーム以後を知らずして、デュルケームの思想を浮き彫りにはできない。デュルケームが弟子たち、他の社会学者や思想家たちにどのような影響を与えたのか、この点から「逆照射」することで起源解明がよりよく進展するからである。

◆2017 年度研究計画

A 班の 2017 年度の研究計画は 2016 年度とほぼ同様だが、次の五つの作業からなる。①『社会学的方法の規準』(以下『規準』と略記)の新訳披露(菊谷)、②『規準』成立の周辺解明のための『社会学年報』分析の継続(北垣、太田)、③デュルケーム社会学と他分野(哲学・倫理学) (小関、池田、北垣、太田)、④社会科学史の中のデュルケーム ―特に A.スミス、マルクス、デュルケーム以降の社会運動との関連を中心に―(荻野、吉本、太田)、⑤デュルケーム研究の最前線の把握(北垣、小関、荻野、太田)、以上五つからなる。

①に関しては、新訳完成の報告があったので、それを原本に全員でテキストクリティークを行う。②については、『社会学年報』の解読を加速し、デュルケーム社会学と「それ以外」との違いの「決別点」がどこにあったのかを探し続けていく。ただし、この際「ディシプリン」の発見をデュルケームのテキスト解読＝内在的理解を土台に置く点は変更しない。③については、『規準』成立あるいは成立後の周辺を、当時の歴史的文脈に還元し、その詳細をズームアップする作業の継続になる。特に、デュルケーム思想におけるベルクソン哲学との違いよりも類似性探索の意義が優る点をこの２年間で確認できたので、ベルクソン自体の研究成果(国際学会で発表済)も取り入れてさらに検討を重ねていく。また、J.M.ギュイヨーなど社会学とは一線を画する道徳論の系譜との対比作業は 2016 年度から本格化したので、その他の思想家群を視野に入れ、次は誰を狙っていくか現在検討中である。④については、昨年 12 月の A 班の研究会(一橋大学)で、A.スミス、マルクスと『社会分業論』との相関というオーソドックスで骨太の研究報告がなされ(荻野)、同時に経済学史の中の『社会分業論』というテーマで、経済学分野への精通者でなければなし得ない貴重な研究報告もなされ(吉本)、改めてこれらの観点の重要性が確認されたことによる。また、デュルケーム以降の社会運動との関連を視野に入れておく必要性がある。なぜなら、デュルケミアンの中から活発な社会運動家が輩出し、それに応じた社会運動論が展開されたという歴史的背景があるからである。この観点からの研究なくしてデュルケミアンの社会学の立体的再構成は不可能であることも、この研究会の議論の結果であった。⑤については、2016 年度からの継続である。ロラン・ミュキエリの研究や J-M・ベルトゥロらの研究紹介を本格的にしていく。ル・プレ学派とデュルケームとの関連の有無の解明なども 2016 年度から新たな研究課題として浮上してきたので、これも継続して作業に組み込んでいく。加えて、荻野昌弘氏によるフランス社会学史研究(『社会学史研究』日本社会学史学会に掲載)という金字塔が存在しており、A 班では、それを参照しながらフランス社会学史の再構成を 2016 年度から行っているわけだが、2017 年度はさらにそれに肉付けをして、フランス社会学史の抜本的書き換えを目指していく。

中間報告を兼ねた研究会は冬に実施する(関西学院大学か一橋大学を予定)。

B　解釈史検討チーム

●研究分担者

岡崎宏樹（班長）	神戸学院大学現代社会学部　教授
江頭大蔵	広島大学大学院社会科学研究科　教授
中島道男	奈良女子大学研究院人文科学系　教授　（研究代表者）
古市太郎	文京学院大学人間学部　助教
三上剛史	追手門学院大学社会学部　教授

●研究協力者

金瑛	甲南女子大学　非常勤講師
杉谷武信	東京工学院専門学校公務員科・航空学科　専任教員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター　センター長
村田賀依子	奈良女子大学　非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学　成長戦略研究センター研究員

◆2016 年度研究報告

2016 年度は、3 度の班別会議を開催し、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。研究は概ね順調に進められている。

2016 年 6 月 12 日 14:00～17:30（場所：KYOTO de MEETING）に開催された第 1 回班別研究会では、岡崎宏樹が「カイヨワとバタイユの戦争論――聖俗理論の展開」と題した報告をおこない、村田賀依子が「ブルデューとデュルケーム――国家の権力・存在の意味・象徴資本」と題した報告をおこなった。

2016 年 9 月 24 日 13:00～17:00（場所：キャンパスプラザ京都 第 2 会議室）に開催された第 2 回班別研究会では、三上剛史が「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話――Mauss から MAUSS へ」と題した報告をおこない、中島道男が「社会学のディシプリン再生――バウマンのデュルケム批判を出発点に」と題した報告をおこなった。

2017 年 1 月 7 日 13:00～17:00（場所：キャンパスプラザ京都 2 階ホール）に開催された第 3 回の班別研究会では、金瑛が「デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に」と題した報告をおこない、古市太郎が「贈与と社会性（le social）――贈与論の継承と展開」と題した報告をおこなった。

研究会では毎回学説研究が〈社会学のディシプリン再生〉という主題に対し、どのような意義を持ちうるのかを検討した。

本科研に関する成果研究成果（詳細は 21、22 ページに記載）としては

・三上剛史「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話――Mauss から MAUSS へ」
・岡崎宏樹「文学からの社会学――作田啓一の理論と方法」
・岡崎宏樹「規律訓練と主体化（M. フーコー）」
・岡崎宏樹「〈リアル〉の社会学――作田啓一の生成の思想」

また、学会報告としては

・岡崎宏樹「現代社会の変容と超近代へのまなざし――作田啓一の犯罪論と憐憫論」

・杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論――『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」

・村田賀依子「ハビトゥスと潜在性（potentialité）――実践と状況の関係をめぐる考察」

なお、2016 年 8 月 20 日、研究分担者（解釈史検討班）の飯田剛史教授（大谷大学文学部）が病気のため逝去された（享年 66）。デュルケームの理論研究のみならず在日コリアンの宗教とまつりの研究で大きな功績を残された飯田先生の早すぎるご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈りしたい。

◆2017 年度研究計画

2017 年度も、引き続き、デュルケーム学派の社会学が、どのように解釈され、批判・継承されたのかという問題を検討するとともに、その学知がどのような現代的意義を持つのかという問題について重点的な検討を進めることにしたい。二点目の問題については、デュルケーム学派の学知が、①現代社会学、現代思想においてどのように批判・継承・忘却されたのか、②現代社会のリアリティを分析する際にどの程度有効なのかという点に注目して考察を進め、さらに、③学説研究の成果が「社会学のディシプリン再生」にどのように寄与しうるのかを深く検討する予定である。

班別の研究会は、第 1 回を 4 月に、第 2 回を 6 月に、第 3 回を 9 月に、さらに日程を調整し、年度内に後 1～2 回の研究会を開催する予定である。研究会の開催場所は京都および奈良を予定している。

第 2 回研究会（6 月：奈良女子大学）では、笠木丈（A 班所属）が「ベルクソンとデュルケームの比較考察」をテーマに報告し、江頭大蔵が「個人と社会の相互浸透性と異質性」をテーマに報告し、また、第 3 回研究会（9 月：奈良女子大学）では、参加メンバー全員が、それぞれの学説研究の成果が「社会学のディシプリン再生」にどのように寄与しうるのかというテーマについて報告をおこない、全体で討論する予定である。研究会では、各メンバーが研究の進捗状況について報告し、研究情報に関する情報交換もおこなう。

年 2 回の全体研究会においては、他の班の成果を吸収するとともに、解釈史研究という角度から何が寄与できるかを検討する。

班別研究会・全体研究会以外の機会では、メールやネット会議によって随時情報交換や討議をおこなう計画である。

なお、9 月 18 日 13:30～18:00（東京・日仏会館）には「社会の境界と社会学の境界――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」と題した国際シンポジウムが開催されるが、B 班の代表である岡崎宏樹が報告をおこなう。また、9 月 21 日は、（京都・キャンパスプラザ京都）で「古典から現代へ――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」と題した国際シンポジウムが開催され、B 班の研究メンバーである江頭大蔵が報告をおこなう。これらの報告は、B 班の研究成果が活かされたものとなる予定である。

C　国際比較チーム

●研究分担者

藤吉圭二（班長）	追手門学院大学社会学部　教授
中倉智徳	立命館大学先端総合学術研究科　非常勤講師
林大造	追手門学院大学社会学部　准教授

●研究協力者

速水(小島)奈名子	神戸大学大学院人文学研究科　研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部　非常勤講師

◆2016 年度研究報告

国際比較班では、海外現地調査と文献調査を中心に、デュルケームおよびデュルケーム学派の理論が、世界各国においてどのように受容され、また学部教育のプログラムにどのように組み込まれているかについて、調査を実施してきた。国際比較とはいえ限られた予算で世界全体を対象にすることは困難なため、効果的に成果を上げることを目的に、特に非西欧圏に力点を置き、2016 年度は韓国・建国大学統一人文学センター研究教授のキム・ミョンヒ（金明姫・Kim Myung-Hee）教授を訪問し、インタビューを実施した（林大造、中倉智徳、安孝淑)。

キム教授は、博士論文でマルクスとデュルケームを社会学史・理論史として論じられて以来、デュルケーム理解の更新とその現代的応用に努められ、とくに社会学的トラウマ理論から、自殺や被害者に関する研究をされている。強く印象に残ったのは、キム教授が、深いデュルケーム愛と理解とに基づいた実践的な応用を一貫してなされていることである。デュルケームの前期／後期という区別をあえてせず、「一つのデュルケーム」として理解し、社会科学を自然科学へと還元する還元主義に対抗するために、デュルケームの科学認識論を、創発特性によって還元しえない階層性をもった批判的実在論の基礎理論として解釈しておられた。この立場は理論的なものだけではない。彼女は「九老（クロ）市民センター」の創設などの市民運動への参加や、さらには韓国政府の自殺対策の委員会やセウォル号沈没事故の研究プロジェクトの審査など、実践的な活動にも関わっている。とくに自殺対策について、心理現象（うつや報道による模倣）や経済現象（不況）といった還元主義的な理解と対策が中心であったのに対し、自殺をそれらに還元しえない社会学的な現象としてとらえ、むしろ家族を含む社会的な紐帯をどのように再活性化するかが課題であるという立場から、自殺対策の変更を政府の委員会において提言されている。このような新たなデュルケーム理解に基づいた政策提言を行なうキム教授の姿勢は、社会学のディシプリン再生を目指す私たちの科研の重要な参考となるのではないか。

最後に韓国の状況について言及しておくと、やはり理論社会学は危機的状態にあり、とくにデュルケームおよびフランス社会学の受容は不十分であるとのことであった。デュルケームの著作の訳出も最近になってからで、1990 年に『自殺論』が訳出されたのが最初であり、2012 年に『社会分業論』が刊行されたことで、ようやく主著がそろうような状況であった。ただ、ベラーの弟子でソウル大学のパク・ヨンシン氏の元でデュルケーム研究を行なった院生が多く輩出されたほか、『社会分業論』の訳者ミン・

ムンホン氏らの活動によって、デュルケームの再評価の機運が高まりつつあるそうだ。今後は日韓でデュルケーム研究を連携して進めていくといった新たな展開もみえてくるような調査となった。

◆2017 年度研究計画

国際比較班では、2016 年度までの 2 年間にスペイン・バルセロナ（2016 年 2 月）、韓国・ソウル（2016 年 9 月）において現地調査を実施し、また台湾での社会学古典教育に関する聴取り調査（2016 年 1 月）を、来日中の台湾人社会学者に対して実施した。これらはいずれも個別に実施され、それぞれの国内での状況を調査したものであるが、その結果を互いに突き合わせることによって、各国に共通の課題も見出すことができたと思われる。それを並べると以下のようになる。

（1）100 年ちかく前のフランスで論じられた社会に関する議論が今の社会を検討するのにどのような意義を持つか。

（2）社会学を学ぼうとする今の学生に社会学の古典はどのような意義を持つか。

いずれも特段目新しい課題ではないが、それぞれに異なる背景を持つ各国の社会において、ひとつの理論枠組みがどのようなかたちで意義ある視点を提供しうるのかについて、なお掘り下げるべきものと言える。韓国、台湾、日本は同じアジア圏の社会であることから、デュルケーム的視点がその分析にどのようなかたちで有効性を発揮するかを比較検討することは、その理論的射程を測定するうえで重要な作業である。

また調査地のひとつであるスペインは広くみてヨーロッパ社会に属するが、その調査の過程で知己を得たコロンビアの社会学者とは、「外来の社会学理論で自分たちの社会を考察すること」に関する共通の問題意識を確認することができた。

2017 年度は予算等の制約により新たな海外調査を組むことは困難だが、過去 2 年間の調査結果を検討する研究会を実施し、また調査の過程で協力関係を得ることのできた海外の研究者とはメール等を通じて情報交換することにより、学術論文等のかたちで成果を発表していく予定である。

D　社会学教育チーム

●研究分担者

白鳥義彦（班長）	神戸大学大学院人文学研究科　教授
小川伸彦	奈良女子大学研究院人文科学系　教授
横山寿世理	聖学院大学人文学部　准教授

●連携研究者

梅村麦生	日本学術振興会　特別研究員 - PD（京都大学）
山田陽子	広島国際学院大学情報文化学部　准教授

●研究協力者

安達智史	近畿大学総合社会学部　講師
梅澤精	新潟産業大学経済学部　教授
川本彩花	関西大学　非常勤講師

◆2016 年度研究報告

2016 年度にD班は 3 回の班別研究会を開催し、各人が報告を行って議論を深めることによってそれぞれの研究を進めてきている。班としての全体的な方向性は、社会学教育という観点から、デュルケーム／デュルケーム学派にアプローチするということである。具体的な研究の対象としては、シラバス、教科書等を中心としてきている。シラバスの検討を通じてどのような教科書が多く使われているかを明らかにし、その教科書についての具体的な考察を行う、といった手順も用いている。取り上げる教科書は日本のものが多いが、フランス語、英語、ドイツ語のいくつかも対象としてきている。教科書で取り上げられるのはデュルケームの生前の四著書およびそこで論じられている諸概念が多く、他方、経歴としても著作としてもデュルケームにおいて重要な位置を占める教育に関しては今回研究対象とした教科書ではそれほど取り上げられてはいないということなど、実際に教科書を読んでみてわかったことも少なからずある。また、デュルケームの社会学がどのようにして「古典」となっていったかを考察する「『古典』化の社会学」というアプローチからの研究も引き続き行っている。研究成果の公表として、論文「テクストから見るデュルケーム受容」、「ディシプリン／教科書関係論のために―社会学入門テキスト分析における対象書目抽出方法論」の刊行や、ウィーン大学で開催された第 3 回社会学 ISA (International Sociological Association)フォーラムでの発表、国内の学会での報告なども行ってきている。D班は、班として『命題集』の刊行に関わるということも意識しており、企画編集に携わる先生方とも協力しながら、情報を共有しつつ実現を目指して活動している。

◆2017 年度研究計画

2017 年度もＤ班＝社会学教育チームは、理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、社会学の教授法を調査するとともに、新たな教育方法を開発し、ディシプリン再生に実践的に取り組むという、本科研における班としての課題に取り組んでいく。科研 3 年目となる本年度は、これまでの班別研究会を通じて得られた蓄積を生かしながら、国内の社会学テキスト（教科書）やシラバスの検討を通じて日本の大学教育におけるデュルケームを中心とした社会学史・社会学理論の位置づけを明らかにすることをさらに進めていく。また国外の状況についても、英語圏、フランス語圏に加えてドイツ語圏も主たる対象としながら、テキスト（教科書）、シラバス、またインターネット上に公開されている講義の内容等を通じて、国内の状況との比較の視点を持ちながら研究を進めていきたい。デュルケーム社会学がどのように「古典化」されていったのかについて、国内外の研究書や教科書を通じて明らかにしていくことも目指す。

学説研究の成果を活かした新たな社会学教育法と教材のモデルを開発するという大きな目標の下でのより具体的な成果として、2015 年度から編集についての議論を継続的に行ってきている『デュルケーム命題集』（仮題）の、出版社との交渉を含めた刊行の準備も、編集委員会と協力しながら引き続き進めていく。

これらの研究を着実に進めていくために、前年度までと同様に、年 3～4 回程度の班別研究会を開催し、メンバー間での研究成果の共有を図る。また研究成果の公表の一つとして、4 月の本科研第 4 回全体研究会におけるミニシンポジウムをＤ班が担当して報告を行うとともに、9 月に東京および京都で開催予定の本科研による国際シンポジウムに積極的に関わり、さらに 11 月の日本社会学会第 90 回大会においても、複数の報告を行う予定である。

こうした研究活動を通じて、デュルケーム社会学を事例として社会学のディシプリン再生はいかにして可能かということを探究していく本科研での４年間の研究のための基盤を一層確かなものとし、具体的な研究成果につなげていくことが、2017 年度の目標である。

第４回全体研究会の報告

2017

本科研の第 4 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第 34 回研究会と共催）を下記のとおり実施しました。第 2 部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時：2017 年 4 月 15 日（土）13:30～17:45
- 場所：文京学院大学　本郷キャンパス　Ｂ館 410 教室（東京都文京区）
- 参加者：25 名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
- プログラム：

第 1 部　自由報告

「デュルケムの社会学的思考と政治哲学――『世論（opinion）』の概念を手がかりに」

赤羽　悠（フランス国立社会科学高等研究院）

コメンテーター：池田祥英（北海道教育大学函館校）

司会：中島道男（奈良女子大学）

第 2 部　科研関連報告ミニシンポジウム

テーマ「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」

・「索引の中のデュルケーム

――装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について」

小川伸彦（奈良女子大学）

・「デュルケーム社会学の語られ方――日本の社会学教科書分析を通して」

横山寿世理（聖学院大学）

・「日本の社会学教科書における理論・学説の教授法」

川本彩花（関西大学）

・「ドイツの大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム――シラバスと教科書から」

梅村麦生（日本学術振興会／京都大学）

・「日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケーム」

白鳥義彦（神戸大学）

全体討議　司会：江頭大蔵（広島大学）

● 第 2 部ミニシンポジウム各報告の要旨 ●

索引の中のデュルケーム

――装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について――

小川伸彦（奈良女子大学）

研究の営為がディシプリンとして成立し維持されるには、なんらかの「古典」をストックとして集合的に所有することが必要な分野が存在する。多くの人文・社会科学系の分野とともに、社会学もそのひとつに数えられるのではないか。では、社会学の″founding fathers″のひとりとされるデュルケームの著作は、いかにして「古典」となり、社会学のディシプリンを支える柱の一つとなったのか。それに迫る方法論を探究したい。

探求において使用する主要な概念はふたつ。古典（＝長く読み継がれるべきであるという価値が一定の範囲の主体にひろく共有され、さらにその認識が事実上一定期間受け継がれた実績を有する著作）と、古典化（＝特定の著作（群）が古典となるプロセス）である。

この「古典化」には２つの位相があるといえよう。明示的認知（＝「古典」″classics″ ″classical″というような語を用いて、実際に特定の著作を形容）と事実上の認知（その著作に直接間接に頻繁に言及することによる、事実上の認定）である。

では「古典化」を測定する指標にはどのようなものがあるか。つぎの通り列挙できよう：辞書や事典への掲載やその扱いの大きさ／特定の学問分野における教科書での言及の頻度や重視度／実際に「古典」と呼称されているかどうか／学術論文で言及・引用される頻度／教育機関での言及頻度や講読対象としての重視の度合い／著作集や全集の刊行／その著者に特化した研究集団の存在／その著者の著作群の解読のための事典等の存在／著者をめぐる記念碑・記念日・記念祭・記念建造物など／学会誌での記念年特集号（例：没後５０年記念特集）やシンポジウム／非専門家における認知度 etc.。

このうち教科書は以下の４つの機能を有する媒体であるといえる。すなわち、①体系性の維持・表出装置／②継続性の維持装置＆漸次的変容の実現装置／③社会的発信装置／④研究者の再生産装置、である。

そしてそこに掲載されている「索引」、特に″name index″に注目し、人名のカウントの変化から古典化のプロセスを読み取れないか。今回は、その準備段階として、教科書のサンプリング方法を検討した。

その検討を通じて、「古典化」という概念がディシプリン生成の様態を把握するために有効なものであるとしても、実際の検証を行うにはかなりの工夫が必要だということが判明した。

われわれは、＜すでに古典群が存在する状況＞のなかで社会学に接触してきた世代である。消え去り忘却された社会学者たちによるいわばもうひとつの社会学ではなく、なぜこの社会学がわれわれの前にあるのか。他でもあり得たのではないか、という感覚は維持したいものであるが、科学論の一部門としてのディシプリン論にどこまで踏み込んでいくのかどうか、悩ましい。

参考文献

Perrucci, Robert. 1980, “SOCIOLOGY AND THE INTRODUCTORY TEXTBOOK,” *American Sociologist* 15(1): 39-49. ほか

備考：本ニュースレター掲載に際し、発表時にレジュメで用いた文言を一部修正した。

デュルケーム社会学の語られ方
――日本の社会学教科書分析を通して――

横山寿世理（聖学院大学）

日本国内の社会学系学部・学科・専攻等がある大学 102 校において、2015 年度開講した社会学科目で教科書として掲載された件数の多い三冊を取り上げて、デュルケームや彼の業績がどのように教育され、受け継がれてきたのかを概略的に報告した。この三冊とは、①長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』（有斐閣、2007 年）、②新睦人『新しい社会学のあゆみ』（有斐閣、2006 年）、③那須壽『クロニクル社会学』（有斐閣、1997 年）であった。

これら三冊で、デュルケーム社会学に関して共通して言及されているのが、「社会的事実」「正常／病理」「連帯」の概念である。

なかでも、「社会的事実」がデュルケーム社会学の中心的な概念に据えられているのは、いずれの教科書も、「社会的事実」が個人に外在して、個人を拘束する概念として説明していることから明らかである。

その一方で、『社会学』と『クロニクル社会学』では、デュルケームの社会学的視点である「正常／病理」を、ヴェーバーの「価値自由」に基づく立場と結びつけて説明しているということを取り上げた。ヴェーバーの「価値自由」については議論があるところだが、わざわざ「価値自由」の説明にデュルケームの『社会学的方法の規準』の解釈を取り入れていることを指摘した。

さらに、『新しい社会学のあゆみ』では、フーコーの現代社会学的意義は、デュルケームが「連帯」を重視したこととは切り離せない、とされる。これに加えて、『社会学』でも中間集団による「連帯」が社会学的視点であり、現代社会にも通じる普遍的な価値であることが示される。

報告では、三冊の教科書の検討を通じて、次の二つのような、デュルケーム社会学教育方法があることを示した。一つは、「価値自由」に代わる「正常／病理」概念や、「連帯」概念のように、デュルケーム社会学が、実際の経験的な事象と結びつけられ、具体化されて、教育された可能性である。もう一つは、教科書のなかで扱われる現代の社会学理論を、社会学理論として読者にわかりやすく理解させるため、いわば社会学において権威づけを行うため、デュルケーム社会学に言及するという方法である。今後はこれらの分析をさらに展開させたい。

日本の社会学教科書における理論・学説の教授法

川本彩花（関西大学）

社会学は、19 世紀ヨーロッパで誕生した学問だが、今日では、世界各国で（普遍的な）「科学」のひとつとして学ばれ教えられている。しかし、西洋人にとっての社会学と、日本人（非西洋人）にとっての社会学には、なにか大きな違いがあるのではないか。日本人が社会学を学ぶ・教えるときには、西洋との社会のあり方や社会に対する考え方などの違いゆえに、西洋人にはない「障壁」といった側面もあるのではないか。

本報告では、このような問題意識のもと、社会学教育において理論・学説が教えられる際、その理論・学説のもつ地域性や時代性、およびその理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などはいかに扱われているのかについて検討を行った。すなわち、社会学の理論・学説を、その背景と結びつけて学ぶ・教えることは、一種の知識社会学的な作業であると考えられるが、社会学教育において、このような「知識社会学的実践」はいかに行われているのかという問いである。

分析方法としては、当面は日本の社会学のテキストを対象に分析を進めることとした。また、テキストは、理論・学説そのものの解説に加えて、その理論・学説の背景にも目配りしているものを対象とし、複数のテキストを取り上げ比較検討を行った。具体的に今回分析対象としたテキストは、『はじめて学ぶ社会学――思想家たちとの対話』（土井文博・萩原修子・嵯峨一郎編，2007，ミネルヴァ書房）、および『社会学ベーシックス』（井上俊・伊藤公雄編，2008～2011，世界思想社）である。なお、将来的には、国際比較研究へと展開することも視野に入れている。

分析の結果、まず、社会学の理論・学説のもつ地域性や時代性、その理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などの扱われ方（語られ方）として、次のような類型を提示した。すなわち、理論・学説が作り出されたとき／受容されたときの状況・背景に言及するもの、および地域性・時代性・個人史的背景などがあることを肯定（強調）／保留／否定するものである。また、上記の 2 種類のテキストを比較検討した結果として、同一の社会学者（理論・学説）に対する記述・説明の仕方の相違についても具体例を提示しつつ報告を行った。

今回は 2 種類のテキストの比較検討にとどまっているが、報告後の議論等においていただいたご指摘・ご教示等をもとに、これからさらに精査し検討を進めていきたい。

ドイツの大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム

――シラバスと教科書から――

梅村麦生（日本学術振興会／京都大学）

本報告では社会学教育におけるデュルケーム／デュルケーム学派に関して、フランスや日本以外の例として、ドイツの大学における社会学専攻の科目から、デュルケームを取り上げている社会学史・社会学理論のシラバスと教科書の一例を紹介した。

ドイツの大学での社会学史・社会学理論の科目としては、「社会学理論」「社会学理論の歴史」「社会学的思考の主要潮流」といった講義が開講されており、デュルケームはそこで古典的な社会学者の代表つまり社会学の「古典家（Klassiker）」のひとりとして、そして社会学を固有の学問分野として確立した学者のひとりとして言及されている。例えば、「社会学的思考の中核となる問いに対する最重要の古典的な理論的・概念的な回答」を提示しているものとして（「古典社会学理論」デュイスブルク＝エッセン大学、社会学コース）、特に「実証主義社会学」や「社会の構造効果」を研究した者として記述されている。

また教科書として用いられているテキストから、フォルカー・クルーゼ『社会学史』（Volker Kruse, 2012, *Geschichte der Soziologie*, 2 版, UVK.）とハルトムート・ローザほか『社会学理論』（Hartmut Rosa, David Strecker, und Andrea Kottmann, 2013, *Soziologische Theorien*, 2 版, UVK.）を取り上げた。

クルーゼ『社会学史』は社会学史の課題を、「社会学の発展をそのつどの歴史的文脈から理解できるようにすること」や、「社会学の〈古典的〉な知識在庫を伝えること」であるとして、1890-1933 年という時期の中で重要な社会学者の筆頭としてデュルケームを挙げている。デュルケームの導入的な紹介として、「社会学特有の認識対象（社会的事実）を指摘」し、「方法的・理論的に画期的な研究を行った」としている。ローザほか『社会学理論』では、社会学理論が扱う近代化の次元として、（1）順化、（2）合理化、（3）分化、（4）個人化の四つを挙げ、デュルケームは社会学の中で分化を扱った学者の代表として取り上げられている。

以上、少数の事例からではあるが、今日のドイツ語圏の社会学で、デュルケームが社会学の方法論および研究領域を確立させた「古典家」の一人として言及されている様を確認することができた。

日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケーム

白鳥義彦（神戸大学）

理論・学説史という社会学のディシプリンのコアの部分を適切に継承するための一視点を得るために、またディシプリンとしての社会学という枠組みの中で、社会学教育という観点から、デュルケーム社会学のどのような側面が重要視されてきたかということを明らかにするために、日本の教科書 12 冊、フランスの教科書 3 冊を取り上げて分析し、以下の諸点を明らかにした。

まず、こうして複数の教科書を検討してみると、生前に刊行されたデュルケームの 4 冊の著作、中でも初期の 3 冊はほぼ必ず言及されることがわかる。

社会学の制度化という文脈で、『規準』、特にそこで示された社会的事実への着目がなされ、またアノミーの概念と『自殺論』（および『分業論』）への言及も多く行われている。さらに、連帯への言及も多い印象を受ける。テーマ的には、正常と病理なども多く取り上げられている。

社会学の制度化という観点からは、『社会学年報』の刊行にもいくつかで触れられている。またいくつかの教科書では『社会学講義』にも言及がなされている。一方、経歴としても、また著作としても、教育に関わる比重はデュルケームにおいて大きかったと考えられるが、今回検討の対象とした教科書では思ったほど取り上げられてはいない。これは、教育に関するデュルケームによる議論は、講義録などの形で没後刊行されたということにも拠る部分があろう。また職業集団論も、それ自体としてはあまり取り上げられてはいない印象を受ける。

議論の大きな枠組みとしては、構造論／行為論、方法論的集団主義／方法論的個人主義、といった文脈で、デュルケームとヴェーバーが対比される。この組み合わせに加えて、ジンメルが取り上げられることもある。同時代では、やはりこの 3 人が最も取り上げられることが多い。

いくつかの教科書においては「デュルケーム学派」にまで論が進められるが、全体として見るとそれほど多くはない。

このように、社会学というディシプリンの中でのデュルケームの重要性をあらためて示すとともに、教科書の中での取り上げられ方には一定の枠組みが見出されることも明らかにすることができた。また、そうした枠組みをもとにして、社会学という学問が形成されているという側面も指摘することが可能である。一方、「ディシプリン」ということを考える際には、教育における「標準化」という点についても留意する必要があろう。例えばアメリカの学部生向けの教科書では、標準化が日本の教科書以上に進んでいる。大学教育の分野別質保証のために「参照基準」が定められるような動向を念頭に置けば、ディシプリンの中でデュルケーム社会学を生かす、ということを考えた場合、枠づけされた「教科書」の中で、どれだけデュルケームの重要性を高めるか、という方向性も考えられる。それは、例えば、研究を通じて新たなデュルケーム像を示す、といったこととは相容れない側面があるかもしれない。

活動報告　※2017 年 1 月から現在まで（白ヌキは年度）

2016 Ｂ班（解釈史検討チーム）2016 年度第３回班別研究会

日　時：2017 年 1 月 7 日（土）13:00～17:00

場　所：キャンパスプラザ京都　２階ホール（京都市）

出席者：10 名

内　容：金瑛「デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に」
古市太郎「贈与と社会性（le social）――贈与論の継承と展開」

2017 Ｂ班（解釈史検討チーム）2017 年度第 1 回班別研究会

日　時：2017 年 4 月 15 日（土）11:00～12:00

場　所：文京学院大学　本郷キャンパス　Ｂ館 410 教室（東京都文京区）

出席者：7 名

内　容：「学説史研究は社会学のディシプリン再生にいかに寄与しうるか」というテーマで会議を開催しました。隣接学問との比較によって社会学の固有性を検討する一方、古典の枠組みでは及ばない問題を考察し、近代／現代の落差を見据えた社会学理論の重要性を確認するなかで、活発な討議がなされました。

2017 2017 年度第 1 回全体会議

日　時：2017 年 4 月 16 日（日）10:15～13:40

場　所：文京学院大学　本郷キャンパス　Ｂ館 410 教室（東京都文京区）

出席者：16 名

内　容：国際シンポジウムなどについて協議し、各班から、2016 年度の活動内容、これまで二箇年度の研究を通して見えてきた具体的な知見と課題についての報告が行われました。

2017 2017 年度第 1 回編集会議

日　時：2017 年 4 月 16 日（日）14:10～16:10

場　所：文京学院大学　本郷キャンパス　Ｂ館 410 教室（東京都文京区）

出席者：15 名

内　容：『デュルケーム命題集』（仮題）の構成について検討しました。

活動報告

2017 B班（解釈史検討チーム）2017 年度第２回班別研究会

日　時：2017 年 6 月 10 日（土）14:00～17:30

場　所：奈良女子大学文学系 N 棟 339 室（奈良市）

出席者：8 名

内　容：笠木丈「非人格的／人格的な力の熱狂――ベルクソン『二源泉』とデュルケム『原初形態』の比較考察」

江頭大蔵「個人と社会の相互浸透性と異質性」

2017 D班（社会学教育チーム）2017 年度第１回班別研究会

日　時：2017 年 6 月 16 日（金）14:00～18:00

場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 2 階プレゼンテーションルーム（神戸市）

出席者：5 名

内　容：横山寿世理「デュルケーム社会学の教えられ方―日本の社会学教科書分析から」

川本彩花「日本の社会学教科書における理論・学説の教授法」

梅村麦生「ドイツ社会学教科書におけるデュルケーム」

白鳥義彦「『社会学教科書の社会学』への視点」

小川伸彦「〈古典化〉論と社会学教科書―論点の整理」

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第５回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号のように、デュルケームをめぐる言葉も取り上げることがあります。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.12●

最も高い徳は、良き社会秩序に最も直接に必要とされる諸行為を規則正しく厳格に遂行することの中にはない。最も高い徳は、自由で自発的な活動、まったく必要とされない献身、時には賢い管理のための教えに反することさえある献身から作り上げられる。そうした熱狂（狂気）的な徳というものがあるのだ。そしてその熱狂（狂気）こそが徳を偉大なものにしているのである。

<< Les vertus les plus hautes ne consistent pas dans l'accomplissement régulier et strict des actes le plus immédiatement nécessaires au bon ordre social ; mais elles sont faites de mouvements libres et spontanés, de sacrifices que rien ne nécessite et qui même sont parfois contraires aux préceptes d'une sage économie.　Il y a des vertus qui sont des folies, et c'est leur folie qui fait leur grandeur. >>

【ミニ解説】

文中「賢い管理」と訳したのは「une sage économie」であるが、économie は《過不足のない》合理的な行為を要請する。デュルケームは当初、規制された社会的分業の実現を主張し、他方でアノミーを批判し、合理主義者を標榜した（『社会学的方法の規準』）が、『宗教生活の原初形態』を中心とする後期になると非合理的な「集合的沸騰」に社会の本質を見いだすようになる。「集合的沸騰」にみられる《過剰性》こそが、日常の過不足のない社会生活（合理的な économie）を可能にし、さらには日常を超えた創造的な社会変革を主導すると主張する。人間の卓越性（アレテー）を示す「徳」とはまさにこうした過剰性、必要を超えた献身（sacrifice）・熱狂・狂気（folie）を本質としている、というのがデュルケームのたどり着いたひとつの到達点であった。

（梅澤精　記）

【キーワード】
徳、エコノミー、過剰性、献身、熱狂、集合的沸騰

【出典】"Jugements de valeur et jugements de réalité" , dans *Revue de métaphysique et de morale* 19, 1911, pp.437-453 et dans *Sociologie et philosophie*, 1951 (Presses Universitaires de France 版 p.108)
（邦訳）「価値判断と現実判断」『社会学と哲学』創元社、山田吉彦訳、1946 年所収、193 頁

●ことばんごう no.13●タルドのことば

社会的事物にかんしては、われわれは例外的な特権によって、事実をつくりだした真の原因である個人的行為を手にすることができる。そのような原因は、社会以外の領域における事物には、まったく見あたらないものである。物理学者や博物学者は、力やエネルギー、存在条件、あるいは他の苦しまぎれの用語をもって事物の原因とみなさざるをえないが、それは彼らが事物の本性をよく理解していないためである。しかし、われわれは社会における諸現象を説明するために、そのようないわゆる「一般的原因」に頼らなくてもよいように思う。

<< En matière sociale, on a sous la main, par un privilège exceptionnel, les causes véritables, les actes individuels dont les faits sont faits, ce qui est absolument soustrait à nos regards en toute autre matière. On est donc dispensé, ce semble, d'avoir recours pour l'explication des phénomènes de la société à ces causes, dites générales, que les physiciens et les naturalistes sont bien obligés de créer sous le nom de forces, d'énergies, de conditions d'existence et autres palliatifs verbaux de leur ignorance du fond clair des choses. >>

【ミニ解説】

『模倣の法則』（1890 年、第 2 版 1895 年）の冒頭部分であり、そこでタルドは物理学や生物学などと比較した社会学の例外的な特性を主張している。物理学や生物学においては、われわれは原子や細胞の立場に立つことができず、それを外から観察して推測することしかできない。それに対して社会学においては、社会を認識しようとする社会学者もひとりの個人であり、社会の構成要素となっている個人を内側から把握することができる。構成要素としての個人という立場で内側から社会をみるかぎり、何らかの個人を超える意識体が比喩的な意味ではなく、現実として出現するのを目にすることはない。したがって、社会はそれを構成している個人間の関係からうまく説明することができる、というのがタルドの発想である。このような見解は、1895 年に発表された彼のモナド論のなかに色濃く表れており（「モナド論と社会学」河出書房新社、村澤真保呂・信友建志訳、2008 年）、1894 年に開催された第 1 回国際社会学協会大会でのタルドの報告「要素的社会学」（『国際社会学協会年誌』第 1 巻、1895 年）においては、デュルケムの『社会学的方法の規準』の原型となった同名の論文（1894 年に『哲学評論』誌に掲載）に対する批判という形で登場する。

これに対して、デュルケムは『自殺論』の第 3 編第 1 章「自殺の社会的要素」でタルドの主張を引用しながら反論している（『自殺論』中公文庫、宮島喬訳、1985 年、385-404 頁）。『自殺論』におけるタルド批判としては、第 1 編第 4 章「模倣」が有名であるが、『規準』のテーマであった社会的事実をめぐる論争のいわば「延長戦」ともいえるこの議論は、デュルケムとタルドの立場の違いを考えるうえで興味深い。

（池田祥英　記）

【キーワード】　個人的行為、社会的事実、モナド

【出典】　Gabriel Tarde, *Les lois de l'imitation : Etude sociologique,* 2e éd., 1895 (Félix Alcan 版 pp.1-2).

（邦訳）『模倣の法則』河出書房新社、池田祥英・村澤真保呂訳、2007 年、28–9 頁

●ことばんごう no.14●

およそ物とは、知性にとってごく自然には洞察しえないようないっさいの認識の対象であり、たんなる精神的な分析方法によっては適切にその概念を構成し得ないようないっさいのもの、さらには、精神がみずからの内から脱して、観察と実験を通じて、もっとも外面的で接近しやすい特質からもっとも感知しがたい根底にある特質へと徐々にすすんでいくという条件においてしか理解されるにいたらないいっさいのものである。

<< Est chose tout objet de connaissance qui n'est pas naturellement compénétrable à l'intelligence, tout ce dont nous ne pouvons nous faire une notion adéquate par un simple procédé d'analyse mentale, tout ce que l'esprit ne peut arriver à comprendre qu'à condition de sortir de lui-même, par voie d'observations et d'expérimentations, en passant progressivement des caractères les plus extérieurs et les plus immédiatement accessibles aux moins visibles et aux plus profonds. >>

【ミニ解説】

アルヴァックスが「デュルケームの学説」（1918 年）において取り上げているデュルケームの「ことば」である。言うまでもなく、「社会的事実を物のように考察すること」というデュルケームの命題に関して、「物とは何か」を説明したこの一文に、アルヴァックスは注目して引用しつつ、デュルケームが促した社会学者の科学的な立場を強調する。それは、「社会的事実」を認識する際に、社会学者が先入観を捨て、未知なる世界に入り込むという自覚である。この「デュルケームの学説」において、アルヴァックスはデュルケームの主著をそれぞれ検討している。デュルケームから大きな影響を受けたアルヴァックスであるが、『集合的記憶』におけるデュルケームへの直接的な言及が少ないことを考えると、「デュルケームの学説」は対照的な論考であり、種々あるデュルケームの命題を真正面から取り上げていることになる。

（横山寿世理　記）

【キーワード】

社会的事実（ことばんごう no.1 も参照のこと）

【出典】 *Les règles de la méthode sociologique*, [1937] 1999 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.XII-XIII)

（邦訳）『社会学的方法の規準』岩波書店、宮島喬訳、1978 年、24 頁

2016 年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●論文・図書

＊　岡崎宏樹、2016、「文学からの社会学――作田啓一の理論と方法」亀山佳明編『記憶とリアルのゆくえ――文学社会学の試み』新曜社、169-196
＊　岡崎宏樹、2016、「規律訓練と主体化（M. フーコー）」西村大志・松浦雄介編『映画は社会学する』法律文化社、161-172
＊　岡崎宏樹、2016、「〈リアル〉の社会学――作田啓一の生成の思想」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂、258-310
＊　小川 伸彦、2017、「ディシプリン／教科書関係論のために――社会学入門テキスト分析における対象書目抽出方法論」『奈良女子大学社会学教育研究論集』1: 17-28
＊　白鳥義彦、2017、「テクストから見るデュルケーム受容」『紀要』（神戸大学文学部）44: 89-107
＊　中倉智徳、2017、「イノベーションと都市――特区政策とクリエイティブ都市論に関する批判的検討」『立命館言語文化研究』28(4): 121-130
＊　三上剛史、2017、「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話――Mauss から MAUSS へ」『追手門学院大学社会学部紀要』11: 1-16

●国内学会

＊　太田健児「社会思想から“社会学”へ――実証主義の系譜の再編の試み」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第２回全体研究会シンポジウム、2016.4.16　於文京学院大学）
＊　岡崎宏樹「現代社会の変容と超近代へのまなざし――作田啓一の犯罪論と憐憫論」（日本社会学理論学会大会 特別セッション「作田啓一の社会学」、2016.9.4　於神戸学院大学）
＊　小関彩子「デュルケム認識論における二つの位相」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第２回全体研究会シンポジウム、2016.4.16 於文京学院大学）
＊　笠木丈「ガブリエル・タルドにおける信念と欲望――メーヌ・ド・ビランの解釈を手掛かりとして」（日仏哲学会 2016 年秋期研究大会、2016.9.10　於学習院大学）
＊　北垣徹「ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第２回全体研究会シンポジウム、2016.4.16　於文京学院大学）
＊　白鳥義彦「学問の制度化と大学におけるデュルケームの講座」（第 68 回日本教育社会学会、2016.9.17 於名古屋大学）
＊　白鳥義彦「テクストから見るデュルケーム受容」（第 89 回日本社会学会、2016.10.8　於九州大学）

＊　杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論――『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」（2016 年度日仏社会学会大会、2016.11.19　於関西大学）
＊　林大造・中倉智徳「韓国調査について」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第３回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について――スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22　於奈良女子大学）
＊　速水(小島)奈名子「台湾調査について」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第３回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について――スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22　於奈良女子大学）
＊　藤吉圭二「日程・概要など」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第３回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について――スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22　於奈良女子大学）
＊　村田賀依子「ハビトゥスと潜在性（potentialité）――実践と状況の関係をめぐる考察」（2016 年度日仏社会学会大会テーマセッション報告、2016.11.19　於関西大学）
＊　吉本惣一・川本彩花「スペイン調査について」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第３回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について――スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22　於奈良女子大学）

●国際学会

＊　Ayako Ozeki, “Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology”, 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.12 University of Vienna
＊　Yoshihiko Shiratori, “Morality and Individualism ― Suggestion form Durkheim's Theory”, 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.13 University of Vienna

お知らせ・今後の活動

●国際シンポジウム

◆東京開催◆

社会の境界と社会学の境界――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
Limites de la société / Frontières de la sociologie—Quels renouvellements pour la discipline sociologique ?

日　　時：　2017 年 9 月 18 日（月・祝）13:30～18:00
場　　所：　日仏会館 1 階ホール

第一部　司会：白鳥義彦（神戸大学）
13:30 - 13:40　趣旨説明　：中島道男（奈良女子大学）
講演者紹介：白鳥義彦（神戸大学）
13:40 - 14:40　講　演
イヴ・デロワ（ボルドー政治学院、エミール・デュルケーム研究センター）
La sociologie durkheimienne de la citoyenneté : apports et limites.
市民性をめぐるデュルケーム社会学――寄与と限界

14:40 - 15:00　コメント：小川伸彦（奈良女子大学）　古市太郎（文京学院大学）
15:00 - 15:30　イヴ・デロワからのリプライとフロアからの質疑

第二部　司会：北垣徹（西南学院大学）
15:40 - 16:40　報　告
岡崎宏樹（神戸学院大学）
非合理性と流動性――社会学の境界で考える
Irrationalité et liquidité.
荻野昌弘（関西学院大学）
不可視の他者――社会学的伝統の埒外にあるもの
La presence invisible d'autrui : ce qui echappe au cadre classique de la sociologie.

16:40 - 17:00　コメント：イヴ・デロワ
17:00 - 18:00　全体討論

◆京都開催◆

古典から現代へ――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か

日　　時：　2017 年 9 月 21 日（木）13:00～18:30
場　　所：　コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）２階第一会議室
内　　容：
イブ・デロワ
La sociologie durkheimienne et l'histoire : Durkheim peut-il être considéré comme un précurseur de la sociologie historique?
デュルケーム社会学と歴史学：デュルケームは歴史社会学の先駆者ととらえられ得るか？
Ａ班　池田　祥英　　エスピナス、タルドからデュルケムへ（仮題）
Ｂ班　江頭　大蔵　　個人と社会の異質性とディシプリンの変容
Ｃ班　中倉　智徳　　デュルケーム受容の国際比較――東アジアを中心として
Ｄ班　横山寿世理　　デュルケーム社会学の受け継がれ方――教科書分析を通じて

お知らせ・今後の活動

◆奈良開催◆
ラウンド・テーブル　イヴ・デロワ氏を囲んで

日　　時：　2017 年 9 月 22 日（金）11:00～14:00
場　　所：　奈良女子大学文学系 N 棟 339 教室（大学正門を入りすぐ右の建物）

クロニクル　2017 年 1 月～2017 年 7 月

- 1 月 7 日（土）　解釈史検討班 2016 年度第 3 回班別研究会（京都市）参加者 10 名
- 1 月 12 日（木）　部内報第 20 号配信
- 1 月 15 日（日）　ニュースレター第 4 号発行
- 2 月 2 日（木）　部内報第 21 号配信
- 3 月 2 日（木）　部内報第 22 号配信
- 4 月 13 日（木）　部内報第 23 号配信
- 4 月 15 日（土）　解釈史検討班 2017 年度第 1 回班別研究会（東京都文京区）参加者 7 名
- 4 月 15 日（土）　第 4 回全体研究会（東京都文京区）　参加者 25 名
- 4 月 16 日（日）　2017 年度第 1 回全体会議（東京都文京区）　参加者 16 名
- 4 月 16 日（日）　2017 年度第 1 回編集会議（東京都文京区）　参加者 15 名
- 5 月 11 日（木）　部内報第 24 号配信
- 6 月 1 日（木）　部内報第 25 号配信
- 6 月 10 日（土）　解釈史検討班 2017 年度第 2 回班別研究会（奈良市）参加者 8 名
- 6 月 16 日（金）　社会学教育班 2017 年度第 1 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名
- 7 月 6 日（木）　部内報第 26 号配信

編集後記

「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第 5 号をお届けします。本科研費研究も 3 年目を迎え、折り返し地点を過ぎました。今号では、2016 年度と今年 6 月までの研究活動の報告や、2017 年度の研究計画を掲載しました。

次号では、9 月の国際シンポジウムの模様などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第５号

発行日　：2017 年 7 月 15 日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

臨時増刊　ボルドー国際コロック特集号

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.6
2017.11

6

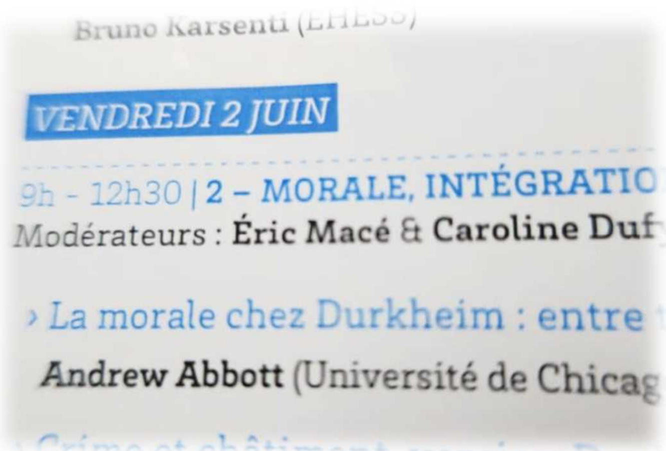
目次

●はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●プログラム紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
●コロックの雰囲気・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
●政治・哲学・宗教―５つの報告にみるデュルケーム社会学の現在―［参加記録１］・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
●学校教育と宗教―デュベとカルサンティが読み解くデュルケーム―［参加記録２］・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
●コロック開催がめざしたもの・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
●エミール・デュルケームセンターの活動・・・・・・・・・・・ 20
●ボルドー時代のデュルケーム・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
●デュルケーム旧宅訪問記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

はじめに

去る 2017 年 6 月 1 日～3 日、エミール・デュルケームセンター（Centre Emile Durkheim）主催で、デュルケーム没後 100 年を記念する国際コロック「100 年後、デュルケーム作品の後継者たち」（La postérité de l'œuvre d'Émile Durkheim (1858-1917) cent ans après）がボルドー大学およびボルドー政治学院で開催された。本科研からは赤羽悠・中倉智徳の二名が派遣され、今号はその参加記録を基にした特集号である。



デュルケームを記念し、その影響の深さと広さをさまざまな角度から測ろうとする本コロックの基調には、社会科学の現状に対する危機感があった。社会学のディシプリン再生を掲げる本科研とも通底するものであろう。9 月には本科研の国際シンポジウムのためにボルドー政治学院学院長のイヴ・デロワ氏が来日された。今後もさらなる研究交流が進むことを願っている。（中倉智徳）

プログラム紹介

La postérité de l'œuvre d'Émile Durkheim (1858-1917) cent ans après

LIEUX DU COLLOQUE : **Université de Bordeaux - Faculté de sociologie-amphi Denigès** et **Sciences Po Bordeaux - amphi Veil** (après-midi du 2 juin)

■Jeudi 1er juin

13h45 - 14h00 | Accueil des participants

14h00 - 14h30 | Allocutions de bienvenue Présentation : **Charles-Henry CUIN** & **Ronan HERVOUET**

◆14h30 - 18h30 | 1 – LES OBJETS CLASSIQUES
Modérateurs : **Sandrine RUI & Antoine ROGER**

« Durkheim et les questions scolaires. Hier et aujourd'hui. » **François DUBET** (Université de Bordeaux / EHESS)
« La sociologie française du crime doit-elle quelque chose à Durkheim ? » **Laurent MUCCHIELLI** (CNRS/LAMES) (absent)
« De Durkheim à la sociologie du travail : distances et héritages. » **Michel LALLEMENT** (CNAM)
« Solidarité et institutions : deux apports fondamentaux de Durkheim à la sociologie économique. » **Philippe STEINER** (Université Paris IV – Sorbonne)
« À propos de quoi les religions luttent-elles ? Un point de vue durkheimien. » **Bruno KARSENTI** (EHESS)

■Vendredi 2 juin

◆9h00 - 12h30 | 2 – MORALE, INTÉGRATION, RÉGULATION
Modérateurs : **Éric MACÉ** & **Caroline DUFY**

« La morale chez Durkheim : entre théorie et pratique. » **Andrew ABBOTT** (Université de Chicago)
« Crime et châtiment, version Durkheim. » **Didier FASSIN** (Institute for Advanced Study, Princeton/ EHESS)
« Excès de contacts et défaut de régulation ? Les transformations des sociétés mondiales contemporaines. » **Florence WEBER** (ENS)
« Durkheim et l'attachement aux groupes. Une théorie sociale inachevée. » **Serge PAUGAM** (CNRS/EHESS)

◆14h30 - 18h00 | 3 – LE POLITIQUE
Modérateurs : **Claire SCHIFF** & **Andy SMITH**

« L'enseignement de Durkheim : les paradoxes de l'articulation individuation/socialisation comme base de la démocratie moderne. » **Cynthia FLEURY** (American University of Paris)
« La question de l'État aujourd'hui. » **Pierre BIRNBAUM** (Université Paris I – Panthéon-Sorbonne et Sciences Po)
« Penser la citoyenneté avec Durkheim : force et faiblesse d'une approche sociologique fondatrice. » **Yves DÉLOYE** (Sciences Po Bordeaux)
« Durkheim et l'avènement d'une sociologiedes relations internationales. » **Bertrand BADIE** (Sciences Po)

■Samedi 3 juin

◆9h00 - 12h30 | 4 – LECTURES, RÉCEPTIONS ET CONTROVERSES
Modérateurs : **Pascal RAGOUET & Cécile VIGOUR**

« De quoi l'Incertitude est-elle le nom ? » **Eva ILLOUZ** (Université hébraïque de Jérusalem / EHESS)
« L'apport de Durkheim et des durkheimiens aux études de genre : un héritage à redécouvrir.» **Irène THÉRY** (EHESS)
« Les voies divergentes de la réception de Durkheim et de Weber : deux parcours contrastés de l'accession au statut de 'classique' » **François CHAZEL** (Université Paris IV – Sorbonne)
« Les études durkheimiennes aujourd'hui : thèmes et controverses. » **Marcel FOURNIER** (Université de Montréal)
◆13h00 | Fermeture du Colloque.

プログラム紹介

100 年後、デュルケーム作品の後継者たち

場所：　ボルドー大学（ヴィクトワールキャンパス）
　　ボルドー政治学院（ペサックキャンパス）

●6月1日（木）　於：ボルドー大学

13h45-14h｜ 参加者受付

14h-14h30｜ 歓迎のあいさつ

シャルル＝アンリ・キュワン、ロナン・エルヴエ

14h30-18h30｜ 第一部　古典的主題

司会：サンドリーヌ・ルイ、アントワーヌ・ロジェ

デュルケームと学校教育の諸問題：その過去と現在

フランソワ・デュベ（ボルドー大学／社会科学高等研究院）

フランスの犯罪社会学にデュルケームは何らかの貢献をしていると考えるべきだろうか？

ロラン・ムキエリ（フランス国立科学研究センター／LAMES）（欠席）

デュルケームから労働社会学へ：その隔たりと遺産

ミシェル・ラルマン（フランス国立工芸院）

連帯と制度：経済社会学へのデュルケームの二つの根本的貢献

フィリップ・スタイナー（パリ第4大学〔ソルボンヌ〕）

宗教は何について闘っているのか：デュルケーム的なある観点

ブリュノ・カルサンティ（社会科学高等研究院）

●6月2日（金）　於：ボルドー大学

9h-12h30｜ 第二部　道徳・統合・規制

司会：エリック・マセ、カロリーヌ・デュフィ

デュルケームにおける道徳：理論と実践のあいだで

アンドリュー・アボット（シカゴ大学）

デュルケーム版の罪と罰

ディディエ・ファサン（Institute for Advanced Study〔プリンストン〕／社会科学高等研究院）

接触の過剰と規制の不在？ 現代グローバル社会の変容

フロランス・ウェーバー（高等師範学校）

デュルケームと集団への愛着：未完成の社会理論

セルジュ・ポーガム（フランス国立科学研究センター／社会科学高等研究院）

14h30-18h｜ 第三部　政治的なもの

於：ボルドー政治学院

司会：クレール・シフ、アンディ・スミス

デュルケームの教え：近代民主主義の基礎としての個人化／社会化の分節化をめぐるパラドックス

サンティア・フルリー（American University of Paris）

今日の国家の問題

ピエール・ビルンボーム（パリ第1大学〔パンテオン＝ソルボンヌ〕／パリ政治学院）

デュルケームから市民権について考える：創設期社会学のアプローチにみられる長所と短所

イヴ・デロワ（ボルドー政治学院）

デュルケームと国際関係の社会学の登場

ベルトラン・バディ（パリ政治学院）

●6月3日（土）　於：ボルドー大学

9h-12h30｜ 第四部　読解・受容・論争

司会：パスカル・ラグエ、セシル・ヴィグール

不確定性とは何の名前なのか？

エヴァ・イルーズ（エルサレム・ヘブライ大学／社会科学高等研究院）

ジェンダー論に対するデュルケームとデュルケーム学派の寄与：再発見するべき遺産

イレーヌ・テリー（社会科学高等研究院）

デュルケーム受容とウェーバー受容がたどった別々の道：「古典」の地位につくまでの対照的な二つの行程

フランソワ・シャゼル（パリ第4大学〔ソルボンヌ〕）

今日のデュルケーム研究：主題と論争

マルセル・フルニエ（モントリオール大学）

（赤羽悠　訳）

コロックの雰囲気

ボルドー国際コロックの雰囲気をおつたえします。先ず会場ですが、1 日目、2 日目午前、3 日目はボルドー大のヴィクトリア広場にあるキャンパスで行われました。ここはもともと医学部のあった歴史あるキャンパスで、現在では社会学部やデュルケームセンターがあります。デュルケームの名を冠した階段教室もあるのですが、会場は別の、しかし同じく年季のはいった急勾配の階段教室でした。2 日目午後はボルドー政治学院(Sciences Po Bordeaux)に移動。こちらは近代的な建物で、同様に活発な質疑応答・交流が行われました。本科研の国際シンポジウム（9 月 18 日ー22 日）のため来日されたデロワ氏はここの学院長で、報告もされました（写真 5 枚目）。３日間とも和やかな雰囲気のなかで真剣な議論が進められ、コーヒーブレイクでは、参加者同士の活発な交流や書籍の販売も行なわれていました。私（中倉）は、アボット氏やフルニエ氏らと会話する機会を持てました。フルニエ氏からは「私の大著『エミール・デュルケーム』は日本語訳されないのか」と訊かれ、返答に窮しましたが、なかなかあの著作の翻訳は難しいであろうと応じておきました（汗）。日本からは赤羽氏と中倉のほか、小川伸彦、白鳥義彦、池田祥英、溝口大助各氏が来ており、本科研のボルドー部会の様相を呈していました。とくに池田氏はボルドー時代の指導教員である Cuin 氏と旧交を温められていたほか、白鳥氏、溝口氏の活発な交流に、私たちは大変助けられました。

質疑も活発で、小川氏が質問する一幕もありました。もっとも印象的だったのは、最後の部会で、フルニエ氏が報告時間を大幅にオーバーしたときのことです。司会者が腕時計や身振りで伝えても、フルニエ氏はいっこうに気にする気配がありません。それに業を煮やした参加者の数名が入り口にたって腕組みしてプレッシャーをかけはじめました。それを好機とした司会者が、まだ明らかにフルニエ氏は喋り終わっていなかったのですが、ありがとう、マルセル！と拍手し、会場もそれにならって拍手することで終わらせてしまいました。フランスの社会学者たちの気さくな仲間関係を感じさせる一幕でした。

（中倉智徳　以下の写真も）

ボルドー大学ヴィクトワールキャンパスの門。コロックの横断幕が掲げられていた。

コロックの雰囲気

ボルドー大での受付風景 ：100 名を超える参加者で賑わった

中庭でコーヒーブレイク

コロックの雰囲気

一日目午後の部会：左からフィリップ・スタイナー氏、アントワーヌ・ロジェ氏、サンドリーヌ・ルイ氏、ブリュノ・カルサンティ氏［於：ボルドー大］

二日目午後の部会：左から、ベルトラン・バディ氏、アンディ・スミス氏、クレール・シフ氏、イヴ・デロワ氏［於：**Sciences Po Bordeaux**］

参加記録１

政治・哲学・宗教―５つの報告にみるデュルケーム社会学の現在 ―

赤羽悠

三日にわたって行われたコロックで取り扱われた主題は多岐にわたっている。ここでその全体を示すことはできないが、私自身の関心をふまえ、そのいくつかの報告の内容を要約し、また考察を加えることで、このコロックから浮かび上がる今日のデュルケーム社会学の一端を示したい。まずは政治的な主題を扱った報告と哲学的射程をもった報告をそれぞれ二つずつ、要約する。さらに、政治、哲学、宗教に関わる一つの報告に関して、掘り下げて検討したい。

＊

哲学者・精神分析家であり、民主主義に関する著作を複数公刊している**サンティア・フルリー氏の報告（「デュルケームの教え：近代民主主義の基礎としての個人化／社会化の分節化をめぐるパラドックス」）**では、デュルケームの近代民主主義の観念が再検討された。デュルケームは、民主主義を、社会が自己意識をもった状態として定義する。フルリー氏は、それが二つの事実、すなわち「統治意識の拡大」と、この集合的な統治意識と個人意識のあいだのコミュニケーションの発達を含んでいる点を強調する。すなわち、民主主義の概念には、経済的自由主義に見られるような個人、個別性を欠き相互に交換可能な個人とは異なる、自律的・反省的な個人の析出としての「個人化（individuation）」が折り込まれている。デュルケームにおける民主主義には、そのような市民としての個人主体が不可欠なのである。フルリー氏のこの報告は、さらに国家の概念なども検討しながら、たしかに一方では保守的あるいはエリート主義的傾向も孕んだデュルケームの議論が、単に社会的権威に服するのではない政治的主体としての個人の発展の重要性をみており、それゆえ共和主義的民主主義の理論の側面をもっていた、という点を明るみに出すものであったといえる。

政治社会学を専門とする**ピエール・ビルンボーム氏の報告（「今日の国家の問題」）**は、国家の失墜が叫ばれる現在、しばしば時代遅れのものとみなされ、また忘却されているデュルケームの国家理論の意義を、改めて問い直すものであった。デュルケームは分業の進展とともに国家の役割も増大すると考える。そしてそれは、反ユダヤ主義やナショナリズムが蔓延る当時のフランスの状況において、非合理主義に対する防壁としての意味をもつものでもあった。フルリー氏も強調していたように、このような国家の発展は、個人の発展と補完関係にある。ビルンボーム氏は、こうした国家概念が、フランス的例外の視点に貫かれている点に注目する。すなわち、デュルケームにとって国家は、文化的、民族的あるいは宗教的といった特殊な帰属から個人を解放するものであるが、それはまさにフランスにおいてこそ成り立っているというのである。ビルンボーム氏は、このようなデュルケームの観点に、普遍的に通用する国家論を見るのではない。そうではなく、それが今日のフランスの状況を考える手助けになるのではないかと問う。すなわちそれが、フランス的な普遍主義のなかで地域的・民族的・宗教的なものが今日置かれている位置を考えるのに（たとえばスカーフ問題を考える際に）役立つのではないか、あるいはフランス的枠組みの中でのポピュリズムの隆盛、国家役人の意味等々を考えるうえで有益なのではないか、と問うのである。

以上二つが、政治的主題を扱った報告である。

参加記録１

以下は、より哲学的な文脈でデュルケームを扱った報告である。人類学者・社会学者として、医療問題あるいは監獄や警察の問題に取り組んでいる**ディディエ・ファサン氏の報告（「デュルケーム版の罪と罰」）**では、自身のフィールドワークの成果も交えつつ、三つの観点から、現代の罪と罰をめぐる議論にとって、デュルケーム思想が果たしうる役割が示された。三つの観点とはすなわち、デュルケームが①通常考えられる罪と罰の関係を逆転させ、むしろ集合意識に由来する罰が罪を決定するという観点を示したこと、②罰を情念に由来する反応とみなすことで、違反と制裁に対応関係をみるカント的、功利主義的な立場と異なる視点を提示したこと、③進化主義的な観点を放棄するなかで、比較の観点を強調し、方法論的な多元主義を導入したこと、である。たしかに、デュルケームの考察には限界もあり、その点では、罰のうちに権力作用や社会に存する不平等の表れをみたフーコーや、苦しみを与えることに快楽を見いだす人間の傾向をつきつめて考えたニーチェの観点を導入する必要がある。しかし、そのような限界を認めるとしても、罪と罰をめぐる常識的な観念を問いに付す観点を提示したデュルケームの意義は大きい、というのが報告の主旨であった。冒頭で述べられていたように、この報告は、フーコー的理論の隆盛のなかであまり省みられることがなくなっているデュルケームの罪と罰の理論にもう一度光を当てようとするものであった。

社会学・人類学の成果をふまえてジェンダー論再考の試みを行っている哲学者**イレーヌ・テリー氏の報告（「ジェンダー論に対するデュルケームとデュルケーム学派の寄与：再発見するべき遺産」）**では、ジェンダー論の歴史のなかでのデュルケームの位置づけが論じられた。そこでは、性を自然的な「差異（différence）」とみるコントの思想から、性の区別を、分業の発展と並行して歴史的に生成してゆくものとみるデュルケームの「性の分割（division des sexes）」の思想へ、そしてさらに、その進化主義的観点を乗り越え、性の区別をあらゆる社会においてみられる象徴的区分と捉えるモースの「性による分割（division par sexes）」の思想へ、という流れが示された。テリー氏自身は、誰よりもモースをジェンダー論の先駆者と位置付けているようであるが、この報告は、モースへと続いてゆくデュルケームの思想に、いかなる点で性差の自然的理解からの解放の第一歩が見いだされるかを示すもので、その観点は非常にユニークなものであった。

マルセル・モースの研究に始まり、デュルケームやデュルケーム学派全般、さらにはオーギュスト・コントなど、社会科学の著作の哲学的射程を主に探究している哲学者**ブリュノ・カルサンティ氏の報告（「宗教は何について闘っているのか？デュルケーム的なある観点」）**では、『宗教生活の基本形態』におけるデュルケームの議論が、ある独特な哲学的かつ政治的角度から解釈されている。私自身が最も注目したものとして、この報告について少し詳細に検討したい。

この報告の中心的テーマは、ひとことで言えば、『宗教生活の基本形態』の議論を援用しつつ、世俗化したと言われる近代社会のなかでの宗教の意味を再考することである。カルサンティ氏は、ここ数年、所属の社会科学高等研究院でのセミネールや、その他のコロック等でもこの問題を扱っているが、その核心にあるのは、近代社会を、個人の私的な領域においては信仰が保証され、他方、公的な領域からは宗教が切り離された社会と捉えるリベラルな観点を問いに付し、それとは別様に近代社会を把握する、という課題である。このような課題に取り組んでいる背景には、リベラルな近代社会理解では、シャルリ・エブド襲撃事件を通じて明らかになったようなフランス現代社会の困難を理解できず、そこに走る宗教をめぐる

緊張状態を解決する糸口を見いだせないとみるカルサンティ氏の考え方があるように思われる。今回の報告でも冒頭で、この報告のテーマが「世俗的とされる近代社会における宗教的暴力」の問題と関わっているということが示唆されている。

とはいえ、報告それ自体は、デュルケームのテキスト読解に基づく抽象度の高い哲学的考察である。以下では、単に発言を追うのではなく、そこから読み取りうると私に思われたことも適宜補足として加えつつ、その議論を再現してみたい。

カルサンティ氏は、まず近代社会においても宗教の必要性はなくならない、というデュルケームの主張を確認するところから始める。たしかに、知識の一形態としての宗教は、科学に取って代わられるかもしれない。しかし、宗教は知識の形態に還元されるものではなく、何より祭祀と結びついた実践的なものであって、われわれを行為に導き、われわれの生存を助けるものとしてある。それは、常に「救済」を目指す。そのようなものだからこそ、宗教は近代社会においても存続する。ところで、この「救済」は、必然的に集合性を帯びる。純粋な宗教的観念は個人のうちに閉じたものだが、それが「救済」をもたらすことはない。祭祀と結びつくような信仰の集合的実践こそが、個人が単独でなすこと以上のことをなすのであり、「救済」をなすのである。

では、もし宗教の本質がこのような「救済」にあるのだとすれば、この宗教的な「救済」の考えとはどこから来るものなのだろうか。何によって、それは思考の一カテゴリーとは別のものとなるのだろうか。これこそデュルケームが明かしてくれる問題なのだと、カルサンティ氏は言う。

基本的な点から始めるならば、「救済」とは、不正義に溢れた現在の社会よりもよい社会を志向することである。ただし、ここで重要なのは、ある理想の社会が、現実を悪として斥けることと一対となった、ある固定された観念としてあるわけではない、ということである。デュルケームにおいて「救済」の本質は、現実の社会を脱出し、理想の社会へと至ることにあるのではない。「救済」は、現実的な力のなかで今まさになされつつある「理想化（idéalisation）」という運動そのものを指し示す。カルサンティ氏の議論で強調されるのは、理想が、観念として予め提示されるのではなく、あくまで現実の諸実践のなかから立ち上がってくるということである。したがって、不正義の蔓延る現実社会が、善なる理想社会に対置されるわけではない。そうではなく、理想に関わる善悪の闘争が現実という場そのもののなかでなされるのである。ここで参照されるのは、闘争は理想と現実との間ではなく、異なる理想のあいだで、過去の理想と現在の理想の間で生じる、という『宗教生活の基本形態』結論部の一節である（*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, PUF, 2005, p. 604.）。したがって、「救済」を志向する宗教は、現実を悪として退けつつ固定化された唯一の理想へと邁進するものではない。それは、理想のあいだの闘争に住まわれている。報告のなかで、この点はとりわけ重要であると思われる。というのも、宗教をこのようなものとして捉えることによって、一般的な宗教のイメージを形作っているような教条主義的な宗教の側面を、むしろ病理とみなす観点が導き出されるからである。つまり、ここでの宗教の理解にしたがえば、宗教は本質的に、現実の実践を通じてその目指す理想をたえず更新してゆくようなダイナミズムとして捉えられる。こうした宗教への視線こそ、『宗教生活の基本形態』の、とりわけ結論部からカルサンティ氏が引き出したものであった。

ところで、理想をめぐる闘争は、ある時間、あるいは歴史の考え方を導入することによって成り立っている。それは、過去の理想と現在の理想とのあいだの闘争として、つまり現在からの伝統の批判という形で表れてくる。この点が、報告の

後半部で詳しく論じられるのだが、ここでは、『宗教生活の基本形態』から引き出された宗教の定義が、近代社会における宗教的なもののあり方と重ね合わされているように思われる。というのも、伝統の批判は、すぐれて近代的なものだからである。それゆえ、報告のなかでカルサンティ氏は明確には述べていないが、デュルケームが指摘した理想のあいだの闘争は、実のところ現在から過去を批判するという視点をそなえた近代においてこそ現れてくるものだと言えるかもしれない。あるいは、デュルケームの提示した宗教概念は、それ自体、近代的視線によるものだ、と言えるかもしれない。いずれにせよ、宗教は、近代的枠組みにおいては理想化という集合的ダイナミズムそれ自体のうちで、批判されうるものとして浮かび上がってくる、ということになるだろう（ゆえにそれは、世俗化した個人が、宗教的理想をその外部から自由に検討するのを許容する、ということではないだろう）。こうして、批判を受け付けない教条主義化した宗教という病理的形態に対置される形で、批判の契機をそのうちに孕んだ、近代におけるいわば「正常な」宗教の姿が炙り出されてくることになる。

以上、多少踏み込んだ解釈も加えつつ、報告を再現してきたが、結局のところ、ここで主張されているのは、宗教が、純粋な観念あるいは知識の領域に還元されえない実践の領域に位置づけられているということ、すなわちそれが集合的な理想化のダイナミズムであるということであろう。さらには、そのようなダイナミズムは、現実に根拠づけられた理想のあいだの闘争を孕んでいるということ、したがって内在的に批判の契機を抱えているということであろう。ここで、最初の課題に戻りたい。もし宗教の本質がそのような理想化と、それに基づく救済の運動の内にあるとすれば、近代社会においても宗教が消滅しない理由もまた、そのような理想化の不可避性に求められる。このような観点からすれば、宗教は内面の信仰に還元できないということになり、したがってそれはリベラルな近代社会の図式の難点を浮き彫りにするものとなろう。他方、それは宗教それ自体に批判の契機を認めることで、その教義の内部に固く閉じこもった宗教、というイメージを問いに付すことになろう。

だがここで、いくつかの疑問も生ずる。それは第一に、このような宗教の定義づけは、多様な宗教に、例えばイスラーム教に適用しうるのか、という点である。カルサンティ氏は、どの宗教も近代の枠組みのなかでは批判的・反省的なダイナミズムを有する、ということを想定するわけであるが、それぞれの宗教の専門家でないかぎり、想定以上のことは不可能である。カルサンティ氏自身は、あくまで近代という枠組みのなかで議論を展開している点を強調するのであるが、しかしはたして現代において、近代的なものは多かれ少なかれ全世界的に、宗教それ自体に対しても浸透していると考えるべきなのか（これは、質疑応答のなかでも問題になった点である）、あるいは今日の世界において「近代」の外部は存在しないのかどうか、といった点を考えるならば、そこには議論の余地があろう。一言で言えば、それは近代というシェーマの限界という問題である。そうした意味では、この議論は、デュルケームの人類学的考察を発展させる形で組み立てられているとはいえ、必ずしも人類学的な普遍性を帯びたものではなく、ヨーロッパ的、ユダヤ＝キリスト教的な、あるいはフランス的な社会の考察に属するものである、と考える必要も出てくるかもしれない。それに加えて、理想のあいだの闘争において賭けられている「正義」の概念についても、結局のところそれがどこから導き出されるのか、という問題は依然として残っているように思われる。たしかに、近代社会は歴史性を導入することで、正義の根拠を現在に求めることになった。しかしなが

ら、だとすれば現在の理想、現在の正義はどのように見出されるのか、という点については、議論を深めていく余地がありそうである。

とはいえ、この議論が、ライシテのあり方について、そして近代社会における宗教のあり方について、独特な視点を提示している点はたしかなように思われる。今日の宗教的暴力の問題に直接的な答えを提示するものではないしても、それはこの問題を考える何らかの示唆を与えてくれるのではないか。さらにこの議論は、デュルケームの現代的な再評価、という観点からしてもまた興味深い。デュルケームにおいて近代社会と宗教の問題といえば、人格崇拝をめぐる議論や純粋に世俗的な道徳をどう考えるかといった『道徳教育論』の議論が思い浮かぶが、この報告は、そのような世俗的道徳の問題あるいは、近代における既存の宗教の代替物の問題に向かうのではない。それは、『宗教生活の基本形態』を手がかりに、デュルケーム思想に含み込まれた理想化の集合的ダイナミズムとしての宗教、という観点を取り出そうとしており、私見では、それは近代社会そのものを、何らかの道徳をうち立てることによって埋めるべき宗教の空白を抱えた場としてではなく、理想化が常に発動しているという意味で、それ自体すでに宗教的な運動として捉えているのである。この点を指摘したいのは、それによってこの報告が、既存の宗教が失墜した近代社会における宗教の代替物を考える道具を提供する、つまり近代の社会統合について何らかの示唆を与えるというよりもむしろ、理想化に関して既存の宗教とその近代的・世俗的な形態が混在するような社会の状況――今日見られるように思われる社会の状況――を理解するための道具を提供してくれるように思われるからである。このような指摘はまだ私の直観の域を出ないが、そこからは、第三共和政の思想家としてのデュルケームとはまた異なる、デュルケームの可能性が浮かび上がってくるとは言えないだろうか。

＊

以上、いくつかの報告をとりあげたが、これらを含め、このボルドーの３日間では、社会科学という枠組みをはるかに超えた議論がなされていた。この点でそれは、デュルケームの著作が、狭義の社会学に縛られず、様々な分野、観点にまたがって関心を呼び起こすものであることが改めて示された場であったといえる。デュルケームは、当時社会学という新たな学問をうち立てることで知の新たな秩序をつくり出そうと試みていた。このコロックは、そのようにして成立した社会学を単に守るのではなく、デュルケームが生み出した知の再編の運動それ自体をさらに発展させ、社会学を起点にしながらも、政治学、哲学等を巻き込む形でまた新たな知のあり方を探っていこうとしていたようにも思われる。もちろん、そうした試みは、社会学あるいは社会科学という枠組みを失効させるわけではないだろう。むしろ、このような知の新たな展開のなかで、社会学というディシプリンの意義も、また新たに浮かび上がってくるのではないだろうか。結局のところ、他のディシプリンに開かれ、そしてそれらと分かちがたく結びついたディシプリンとして社会学が構築されたとき、その特殊性は浮かび上がってくるのではないか、そしてそもそもデュルケーム社会学とは、そのようなものでなかったか。３日間を通じて考えさせられたのは、そのようなことであった。

参加記録２

学校教育と宗教―デュベとカルサンティが読み解くデュルケーム―

溝口大助

デュルケームと学校教育の諸問題：その過去と現在

フランソワ・デュベ（ボルドー大学、社会科学高等研究院）

フランソワ・デュベ氏が、「デュルケームと学校教育の諸課題：その過去と現在 」と題して、デュルケーム没後 100 周年記念会合の先陣を切って、デュルケームにおけるモラルと学校教育を主題とした発表を行った。以下、デュベ氏の発表に基づいて手短に概括する。

デュベ氏によると、デュルケーム学派論文の多くがデュルケームの著作を引用してきたが、こと学校教育における「不平等」のテーマについてはさほど興味を示してこなかった。デュルケームもしくはデュルケーム学派における「不平等」という主題が、他の多様な社会学の諸議論とともに突き詰めて検討されなければ、私たちの議論自体を歪めることになりかねない。なるほど、近年のデュルケーム研究者たちは、教育（enseignement）概念に代表されるようなデュルケーム教育学に比べると、「社会的なもの」の存在論（ontologie du social）、社会的連帯概念、聖性観念について精度の高い議論を展開はした。たとえば、学校教育以外の主題については多くのデュルケーム論文を引用している Jean-Michel Berthelot が典型的であり、ことデュルケーム教育学についてはほとんど触れることがなかった。しかし、この状況は異様なものである。教育とは、本来「社会的なもの」であって若年世代の社会化でもある。退廃した腑抜けの貴族主義者をはじめとした当時の人文主義者（humanistes）たちに対して厄介な敵意を抱いていたデュルケームが、フランス革命をひどく表面的なものだと確信していたため、とりわけルソー教育論には閉口していた事実は特筆に値する。当時デュルケームは、歴史学者における影響力があり共和制期を代表していた。

1960 年代、再びパーソンズが、制度化された個人主義の主題について検討を加えることでデュルケームの視点に新たな光を当てた。当時、教育の大衆化や学校教育の不平等などの課題が中心的難題として立ちはだかっていたからである。だがパーソンズのデュルケーム教育論への関心の向け方は、社会統合の問題へと向かったのだった。デュルケームは、20 世紀転換期の知的関心の的であったとはいえ、学校教育における平等・不平等問題を検討することはなったし、むしろ社会統合の問題、すなわち「市民」および「レピュブリカン」を創出する課題に焦点化していたことがパーソンズの社会統合問題への布石を打ったのだった。教育の／による不平等と社会統合の二つの問題を検討すべきもう一つの理由は、当時、労働組合関連の論者がデュルケームと同様の主張を展開し、その多くが『社会分業論』の論旨に同意していたが、他方デュルケームは、むしろ欲望の無規制状態を引き起こさぬよう、生徒の願望を抑制する教師の役割と必要性を主張していたという点にある。こうしてデュルケームによる学校教育についての主題は、職業教育にではなく学校教育や高等教育の教師に差し向けられた訳である。

デュルケームの学校教育における不平等問題を考える上で、ブルデューの理論的貢献も軽く注意を向けるだけでは足りないだろう。デュルケーム教育論を援用することで再生産についての議論を展開したブルデューの教育論をここでより念入りに吟味する必要がある。マルクス、ウェーバーと同様にデュルケームを積極的に用いて実

践理論を確立したブルデューは、さらに進んで『社会学的方法の基準』などの理路を駆使し、社会規範を身体的に構造化する作法によってアクターを定義した。別の言い方をすれば、デュルケーム理論は、ブルデュー社会学の対象そのものとなったのだ。ブルデューが、支配メカニズムを隠蔽する制度についての信念として教育学自体を客体化して捉え、その幻想を具現化する学者としてデュルケームを把握した貢献については、現在押し並べて見解は一致しているように思える。この隠蔽の幻想とは、たとえば、職業的悟性についてのカテゴリー（catégorie de l'entendement professionnel）、文化の普遍性（universalité de la culture）、学校教育による解放（émancipation par l'école）などについてのデュルケーム思想そのものである。このように、ブルデューが、デュルケーム思想を組織する価値体系が回帰してきている点、つまり、デュルケームが科学の客観性、たとえば教育学における諸事実などの客観性を社会学的に確立した点を隠蔽構造の幻想として批判したことについては、ほとんどの研究者が折しも意見を同じくしているようだ。すでにほのめかしたように、その理由は、ブルデューにとって、デュルケームが確立した教育学における科学的客観性こそが支配の恣意性を強化・隠蔽する道具だったからであり、ひいては教育学の有用性についての信念をもっていたデュルケームこそが、教育学の幻想を再生産していたことによる。よく知られているように、ブルデューは、デュルケームが教育学的な効果として必要と考えた権威（autorité）こそが再生産を支える象徴的暴力（violence symbolique）を構成すると考えた。だからこそ共和制において教育学を基軸としてモラルを醸成することこそが道徳社会学（sociologie morale）におけるデュルケームのプロジェクトであったわけだが、そこでブルデューが批判したかったのは、デュルケームが『社会分業論』で述べた調和的な社会分業（division harmonieuse du travail）についての言説創出・強化、すなわち階級支配を隠蔽してしまうイデオロギー効果についてであった。このことから、一歩すすめて、科学や教育学を踏まえた学校教育を通じてモラルを創出し国家や社会の統合も目指して尽力したまさしくこのデュルケーム思想こそが、教育における不平等や階級を隠蔽する再生産構造を生み出すとブルデューは結論したのだった。元来、デュルケームは、習俗の具現化（cristallisation des moeurs）や組織化ではない、主体性（subjectivité）やアクターを作りだす象徴体系、制度化する仕組みである教育制度構築を目指すことで、共和国の国民意識を構築することを目指していたからである。

上記の点について、Guy Vincent は次のように論じているとデュベ氏は言う。

デュルケームの命題がより宗教的であった理由は、霊魂（âme）、回心（conversion）、召命（vocation）など宗教に根差す語彙を多用することで教会に対抗する狙いがあったためである。デュルケームは、教会に取って代わった共和制の学校教育が象徴経済（économie symbolique）に呼応して機能すると予測し、それを共和制のモラルを主要に構成する理想の制度とみなしていた。この主張から、デュルケームは、出来うるならば、『カトリックの倫理と共和制教育制度の精神（l'éthique catholique et l'esprit de l'école républicaine）』と題した著作、すなわち神聖なる神父によって導かれていた学校教育の倫理が共和制教育制度に変容していく複雑な経緯をあとづける著作を書くべきだったろう。このように Guy Vincent は指摘した。

当時ジュール・フェリーは、限定的であるとはいえ神父が古き良きモラルを教えれば十分であると主張し、モラルを醸成し啓発する役割を学校教育に期待し注目した。だが、フェリーは、実際

には近代教育制度の教室の奥に静かに同座している神父は相変わらず何もできずに不快な気持ちを抱いて手をこまねいているだけだと批判した。このジュール・フェリーの姿勢を不徹底であると批判したデュルケームは、ライシテのモラルをひたすら案出しようとしたため、普遍性を宿す確固たるモラル、つまりキリスト教とライシテを継ぎ合わせるまったき連続性（continuité totale）を内包したモラルを確立する必要があると論じたのだった。デュルケームは、そもそもフランス革命による歴史的断絶を信じておらず、共同体が神に取って代わり、神を設定しない宗教、あるいは非宗教的宗教、詰まる所ライシテのモラルを創出することが学校教育の一つの役割だと想定していたのだった。たしかに、デュルケームが道徳教育論で指摘したように、教師の権威とは、制度化されたカリスマであり、聖性を帯びた学校教育制度に生徒が恭順するように促す威信の源泉となる必要があった。　デュルケームは、学校教育におけるモラルと犯罪について、学校で罪を犯した者が罰を受けないままにしておくよりは、罪のない生徒の誰かを罰したほうがはるかによいと論じ、教師における重みのある威厳を維持し、規則や処罰がモラルを醸成するのに必須の手段であると主張した。

当時、学校教育の規律（la discipline scolaire）について、規律への服従が各個人の自由を作りだすとしたデュルケーム教育論は、しかし、批判理論、経済学、労働市場論などから批判を浴びていた。というのも、共和制国家の教育制度によるモラル創出を目指すデュルケームの教育理論とは対照的に、民主制国家の教育制度によるモラル構築を志向するデューイが教育学モデルを提示していたため、教育理論上の論争においてもデュルケーム理論は品定めされていたからでもあった。

フィンケルクロートやマルセル・ゴーシェらは、なぜデュルケームを敬遠し引用しないのだろうか。なぜデュルケームが横暴な共和主義者の偶像に成り下がったのだろうか。なぜシャルル・ペギーやアランのように哲学者とみなされることすらもあるのだろうか。というのも、ライシテの保守主義が教会と共和制学校教育との断絶を過剰なほど主張していたのだが、他方、デュルケームは、その宗教と教育とのある種の連続性をむしろ活用し維持しようとしていたからだし、そもそもこの宗教と教育との連続性が、啓蒙思想のレトリックとしては認めがたいからである。

デュルケームの時代には、年齢集団の 2%しかリセに通っていなかった。教育活動が制度を維持する象徴構造を支える必要があるのは確かだ。しかし果たして現代のフランス教育でこの制度維持のための象徴構造を教育活動が引き受けているのだろうか。デュルケームのモラルと宗教と教育の連続性を断ち切ることが最善の道なのだろうか。それが今のフランス教育で賭けられているのではないだろうか。

以上が、デュベ氏の発表内容であった。紙幅の関係上、デュベ氏の発表内容について詳細に検討することは、この参加記録の紙幅では不可能である。次の機会を得て、更にデュベ氏の発表の可能性と限界を指摘したい。

＊

宗教は何について闘っているのか：デュルケーム的なある観点

ブリュノ・カルサンティ（社会科学高等研究院）

社会科学高等研究院のカルサンティ氏は、「宗教は何について闘っているのか：デュルケーム的なある視点」と題して、宗教に内在する現実と理想の現代的葛藤について発表を行った。以下、カルサンティ氏の発表に基づいて手短に概括する。

カルサンティ氏は、世俗的な近代社会のうちに

現れる宗教の暴力についての主題を発表で取り扱った。というのも、ライシテの帰結であるにせよ、世俗社会で頻繁に起こっている宗教を通じた暴力の動機付けを探求する必要があるからである。カルサンティ氏によると、その探求のためには、「理想」という固有の力（puissance）を宿した行為の動機付けとして宗教を捉える必要があるという。カルサンティ氏は、デュルケームの後期宗教論およびプラグマティズム論を積極的に援用することで、集合的沸騰に由来する非人格的宗教力に内在する「理想化」の新たな可能性を探求した。カルサンティ氏は、上記の理想をめぐる信と行の体系を拠り所とした聖俗交流の動態性把握を目的として、デュルケームの宗教論に秘められた可能性を最大限に活用していると報告者には感じられた。以下、カルサンティ氏による発表の詳細である。

もとより宗教自体がより強力に信念を定着させる動機付けとなっており、これ以上に強力な力はない。ここで思い起こすべきは、いかなる社会も宗教を通じた力の発現を回避することは不可能だという点である。私たちヨーロッパ人にとっての問いは、宗教がいかなる行為の動機付けの形式（forme）に相当するのかというものだ。

ここでデュルケームの最後の著作『宗教生活の基本形態』（以下、『基本形態』）を取り上げておこう。『基本形態』の定義によると、宗教とは、教会（と呼ばれる道徳的共同社会）の人々を結合させる聖なるもの（les choses sacrées）をめぐる信と行の総体である。同書は、社会統合に関するオーストラリアのトーテミズム体系の分析を施すことで、社会が構成する社会的経験の活用の分析を同時に実行した。同書の結論は、悟性の諸範疇（des catégories d'entendement）の基盤とその論理的思考の展開を通じて宗教が果たす各役割が存在するにも関わらず、宗教自身は、本質的には単なる認識の形式（une forme de connaissance）ではないというものであった。なぜなら、その真の役割である社会的機能は、理論的でも純粋理性的でもなく実践的なものだからである。デュルケームが論じているように、宗教は、本質的に「われわれを突き動かし、我々を生かす力となる（nous fait agir, nous aider à vivre）」機能をもっている。帰する所、宗教の目的は救済である。教条主義的で潜在的な複雑性の程度がどうあれ、また宗教を維持する信念加工の程度がどうあれ、あるいは宗教が、共同体のメンバーにとって必要とされている行為のタイプがどうあれ、その目的は依然として救済である。

この救済とは、現在の私たちのものとは異なる存在の見取り図（plan）への接近方法であり、現実的なものの条件からの分離（extraction）であり、悪の根絶（extirpation）である。宗教は、単に制度の実践に帰するのではなく、出来事に関わりつつ信念と表象を伴う。実践システムである宗教はまた、世界を表現する思考のシステムでもある。ここでいう世界を表現することとは、ただたんにあるがままの事実を表すのでは無くして、諸思考がそれを通じて後押しされる精神的道具なのである。この精神的道具を鍛錬する宗教は、論理的思考と宗教的思考の二つの起源の本質をなす。後者の宗教性を帯びた独自の思考は、行為欲求の実践に応じて、実際の行為に転換できるように、行為が必要とする助けから生じる。このシステムの性質を理解しないならば、宗教の思考を理解することはできないだろう。その行為とは、全ての行為という訳では無く、私たちを救済し、悪と闘う行為、すなわち私たちに生きる力を与えてくれる行為、別の言い方をすれば実存が無気力に襲われないように、生活が生きるに値しないというような状態に陥らないようにする行為である。

ここでまずはその内的論理を検討しよう。救済の観念を媒介にして、宗教は、明確な方法で、祭祀（culte）と信念（croyance）を関連づける。

宗教は、基本となる救済をめざす実践作業として祭祀を位置づけ、これを基盤として宗教が含む思考の諸形式を通じて信念を植え込んでいく。だからこそ救済の観念は独自のものである。単に思弁的なだけの観念であれば、救済のような積極的な力（puissance active）をもちえないだろう。救済に基づいた信仰（foi）は、私たちを助けてくれる。というのも、信仰は、物質的なもの（matériel）だからである。こうして、我々は、聖なる諸物をめぐる行為の領域、つまり祭祀の諸物をめぐる行為の領域のうちで行動の推進力を探求することが出来る訳である。精神的変質（altération mentale）は、その独自の産物を通じて信仰というモノを作りだすのだった。お望みとあらば、デュルケームの言葉を借りると、他の単純な観念群と比べれば、それを譫妄（délire）といってもいいだろう。問題の核心は、この救済の観念はどこから生まれているのかという点である。信仰は、思考や概念の純粋で単純な範疇ではない。ではどうやってそれらを見分けるといのか。デュルケームの徹底的な再読を通じて、独自の宗教的行為の動機付けはどこから生まれているのか、あるいは、もし、救済の観念に効果や意味の力があるとしたら、その独自の力とは何かという問いに答えたいと思う。そもそも人間が悪を取り除きたいとしたら、人間は何を目指すというのか。

『基本形態』の結論を少し許り考察することでこれらの問題へ応答してみよう。救済は、より善き生活、詰まる所より善き社会生活についての観念である。何と比べてより善いのだろうか。可視的でつねに触れることの出来るはっきりとした不正義を宿す現実の社会と比べてである。決定的なポイントは、救済観念についての独自のジャンルの決定的な基準があるということである。現実の社会は、部分的には悪と不正義の経験として生きられている。救済はその悪と不正義の根絶を目的とする。だが、現実社会からから抜け出させようとする救済は、現実社会の外部にある理想社会についての観念のおかげで成立している訳ではない。純粋な観念はこの種の力を持ち合わせてはおらず、私たちを救済することは出来ない。救済とは、むしろそれ通して現実の悪から解き放たれる種類の運動そのものなのであり、そこから解放されようとしている確かな体験なのだ。

デュルケームの鋭い指摘によると、この救済の実践そのものは、プラグマティズムに最も接近したものである。デュルケームは、この体験を記述するための的確な概念を用いて、プラグマティズムの視点を通じてアプローチしたのだった。それによると、救済とは、現実の諸力のなかで機能している理想化（idéalisation）である。ここでは完璧な社会、たとえば、善が完全に統治しているような社会や、あるいは悪が完全に排除されているような社会は、救済の観念とは無関係である。デュルケームによると、理想の社会は、宗教を前提とするのであって、社会が宗教を創出するのではないのだ。理想の社会の観念は、救済のような他のジャンルの観念から、言い換えれば宗教性を帯びた理想化の実践から生まれているのだ。ところが、この理想化の実践は、内在的な悪を潜在させながら現実的なもの、現実の社会に根を下ろしている。このような種類の悪を根絶しようとする試みが理想化なのだ。重要なことは、理想の社会の観念は、宗教と同じく救済するという点である。というのもこの観念は、善がそれによって解放されるような運動から生まれるからである。単に理論的に仮定される観念ではないのだ。より正確に言えば、聖なる諸物をめぐる行為領域を支える力の駆け引きを通じた、現実的なものの変貌（transfiguration）であり、現実的なものの填補化（supplémentation）なのである。この聖なる諸物は、個人の行為に新たな力を与えるものとし

て、操作され機能し継承されていく。それは、私たちを祭祀へと差し向ける力である。そして人は、「救済観念」の興味深い構造のうちに引き戻されるのである。この観念は、理想的なもの（idéalité）と現実の悪の対立観念のうちにはない。というのも、現実の社会は世俗的であるとはいえ、完全な悪ではないからだ。そもそも現実の社会とは、善と悪が相互に火花を散らす戦場だからである。現実の社会は、もとより不完全な訳だから、完全な悪という訳でもないのだ。この現実の社会とは、ねっからの不正義の社会ではなく、若干正義ではない部分を有するということであり、正義と不正義の入り交じる社会なのであった。

理想化の様式の病理学（une pathologie de leur mode d'idéalisation）は、善と悪の闘争を激化させることにより、理想の社会と現実の社会の関係性を反転させ、理想の社会を苦しめるのだ。確かに、この善悪の闘争は、現実的なものと鍔迫り合いを演じている理想的なものという訳ではない。というよりも、現実のなかに内在化している理想化の闘争なのだ。よって理想化されたものと対立した現実的な諸力に内在的な効果（un jeu interne aux forces réelles）としての闘争である。現実と理想との対立は、宗教の本質的構成要素である。反対に言えば、宗教はこのコンフリクトのうちにこそ宿っているのだ。

宗教が明確に示すコンフリクト、しかも、必ず宗教自身の様々な緊張のうちで内側から産出されてしまうこのコンフリクトはこの世界の内側に内旋化している。結果的に、宗教は、現実の社会のただなかに生まれるということになる。更に言えば、コンフリクトは、理想的な各状態のあいだのコンフリクトとしても現れる。すなわち、現実的なものを変貌させる方法（理想化）の間の、つまり理想的なものたち（諸価値）の間の闘争である。救済は、他の理想に張り合う理想化を目的とする。この理想は、ある観念よりもより善いものを表しているという意味でより善いと判断されているだけであり、決して実在することはなく、無力なモデルでしかない理想の社会についての固着したイメージでもある。それはより善い行為にまつわる考え方でしかない。

くり返すが、救済の観念は、純粋な観念ではない。というのも、その観念は、会衆にとって不正義根絶についての経験を内在的に生み出すことで、諸理想間のコンフリクトの表明（formulation d'un conflit d'idéaux）となるからである。デュルケームによると、このような場合、社会は対立した方向に引き裂かれていると感じる。他方、これらのコンフリクトが現れたときに、ここでは理想と現実との間で生じるのではなくして、異なった理想の間で対立が生じるのであった。過去の理想と現在の理想の間でコンフリクトが生じているという訳だ。ある理想にとっての伝統の権威とその権威になろうと努めているものとの間で、諸理想を追究する理由があるのだ。それでも理想の中で全てが起こっていることには変わりがない。諸理想が進化し、それらと闘争するということによって、一つ一つの理想が解決法を引き出すのである。救済の実践を有する宗教は、私たちに理想化の適切な感覚を与えてくれる。宗教は、こうして矛盾する理想の社会と現実の社会への同時帰属を可能にしてくれている。この文化的構造は独自の思考である。以上のように、この独自の思考は、純粋理性的ではないある種の思考、すなわちふるまいと生命の救済を強化する実践的思考なのであり、生命が死活に関わる最低限の物質性によって救済され補完されるのであった。

しかし、このことが、問題を解決するのではない。伝統的で文化的な基盤の上で、運動が推進されるということをどのように理解すればいいのか。ここで示されているのは、諸理想のコンフリ

クトの構造であり、一時的な運動である。目的としてコンフリクト自体が（理想化の）プロセスであるという点で運動は一時的なものなのである。むしろ、コンフリクトそれ自体が各理想の一時的な性質を示している。過去の諸理想と現在の諸理想がある。現在の諸理想は、それ自体未来への展望を現していて、その未来の展望は、さらに過去の諸理想を意味している。未来の実践が救済されるためには、過去の実践が批判されるべきである。批判は、つねに後付け的な分析である。畢竟、その批判とは、もはや諸理想として実際にもう実践的ではない役に立たない諸観念についての伝統の批判である。これは、私たちの社会、批判的と呼ぶことが出来る社会、言い換えると世俗社会の条件であり、ここでは宗教が批判される側にまわるのである。こうして正義が進化する中での必然的な批判であり、最終的には、近代社会における諸理想の継続を生み出す批判である。デュルケームによれば、最初の偉業である社会分業論の定義の中で、古代人は、なによりも生き残るために共通の信念を必要としていた（機械的連帯の条件）。近代社会では、この欲求は複雑となりさらに要求の多いものとなるのである（有機的連帯の条件）。この種の診断は、『基本形態』おいても有効である。だが、この点でことはより複雑になる。正義についての理想が現代的な理想であるというのならば、その理想は、宗教の領域で主要な力を帯びた理想化の形式を常に内的に保っている。『基本形態』で力説されたように、理想的なものの世界のうちで全てが起こるなら、あるいは何が起ころうと、そして理想的なものが規範的な規則にとどまるのであれば、宗教は、取り返しのつかないほど可逆的な共通の信仰として歴史性を蔑ろにして維持される訳だ。私たちの宗教との関係をどのように規定するのか、あるいは歴史的に生きる私たちをどのように規定すればいいのだろうか。すなわち、過去の諸理想と現在の諸理想のあいだで絶え間なく生じている緊張の中にライシテ問題とともに私たちは生きているのだ。「過去の諸理想」という表現は、曖昧なところを含んでいる。おそらく言えることは、救済の興味深い観念をその中心に戻すべきところの宗教的諸理想が、過去の諸理想なのである。

歴史的観点からみれば、伝統として伝統を扱うために伝統から分離されるべきである。普遍主義と個人主義の二つの次元での批判精神の進歩の産物である解放（affranchissement）は、以上のように思考の進化に関係している。批判的精神とその精神に関わる認識を全く否定せずに、観念（idée）と理想化（idéalisation）を常に分ける必要がある。というのも、理想化の力をもたない社会は存在しないからである。これこそが問題をとく鍵を提供するのだ。近代における宗教、批判精神を有するような歴史的な社会における宗教にはどのような意義があるのか。批判精神に肯定された諸理想から抜け出ることで、諸観念が構築されるのである。この批判は、真理の基準ではなく、正義の基準を理性のうちでくみ出すのである。批判が理性の思考というのならば、出発点の問題、つまり救済の問題に戻ることになる。私たちの行為の動機付けとなりうる諸観念が産出される。だが、その行為の動機付けとなる観念は、単なる観念ではないし、純粋な知的構築物（construction intellectuelle）ではなく、我々をより活動的にするような知識である。上記で指摘したように、宗教は、永遠であり、集団本位的なものである。宗教のうちでは、その進化を通じてですら不変的な何ものかが存在するはずだ。この不変的なものこそが救済なのだ。救済なき社会はない。救済は、必然的に理想化の実践に関わるという点で祭祀に関係するのである。宗教が進展するとなると、祭祀を創出するのが宗教ではなくなるのだろう。

以上が、カルサンティ氏の発表内容である。カルサンティ氏の発表内容はあまりに込み入った

問題を存分に含んでいるためここで詳細にわたって取り扱うことは出来ない。とりわけ、デュルケームの「価値判断と現実判断（Jugements de valeur et jugements de realité）」（1911）の集合沸騰論、「宗教問題と人間性の二元性（Le problème religieux et la dualité de la nature humaine）」(1913)、「個人表象と集合表象（Représentations individuelles et représentations collectives）」(1898)、そしてデュルケームのプラグマティズム論の読解を合わせて検討する必要がある。とくに、理想化の主題は、明らかに「価値判断と現実判断」の結構に完全に一致しているため、評者は、プラグマティズム論に連なる上記の議論を十分に検討する必要を感じている。

とくに「価値判断と現実判断」のデュルケームの論は、カルサンティ氏の救済と理想化の上記議論と著しい類似性を示しているため、その異同も含めて検討課題になるだろう。デュルケームの議論との連続性において、次のような観点はより重要であるように思われる。つまり、聖なるもの（あるいは理想的なもの）が動物、植物やモノ、身体の内部に潜在しておらず、実質的に経験に基づく性質に根差さないのだから、聖なるものは所与の事物や経験とは別にその起源を有しているという観点である。というのもデュルケームの論に基づけば、事物の真価が問われるのは、聖なるものの多面的な性質の一部がこの事物において立ち顕れるからである。デュルケームの説明を借りれば、モノが表している聖性を拠りどころに、事物の価値が決まるものの、聖なるものは事物そのものとは全く異質な存在である。聖なるものは実際に存在していることを人は実感している筈なのに、経験を超越し凌駕するものなのである。それこそが、カルサンティ氏が注目した理想化の力であり、救済の方法論なのである。デュルケームはここで再度立ち止まって問いをたてる。では、聖なるものが何に由来し、経験的事物を踏まえる事無く、その感覚与件にうったえる条件を超越している場合、どのように経験とよりあわせられているのか、と。以上の議論を踏まえて、カルサンティ氏が課題としている理想化と救済の議論が、デュルケームのプラグマティズム論や「価値判断と現実判断」の議論とどこまで関係しているのかを指摘する必要があるだろう。この異同については少なからぬ重要性を帯びた刺激的な主題ともつながるように思われるが、あまりに込み入った問題であるので本稿で詳細にわたって取り扱うことは出来ない。ただ最後に付け加えるならば、プラグマティズム論を実証的な民族誌に適用したロベール・エルツの未開社会における「贖罪論（Le péché et l'expiation dans les sociétés primitives）」(1922)および「死の集合表象論（La Représentation collective de la mort）」(1907)、そしてマルセル・モースの一連の論考群、すなわち「宗教と刑法の起源論　（La religion et les origines du droit pénal d'après un livre récent(1er article) ）」(1896)、「供犠論（Essai sur la nature et la fonction du sacrifice）」(1899)、「呪術論（Esquisse d'une théorie générale de la magie）」(1902)、「死の身体的効果論（Effet physique chez l'individu de l'idée de mort suggérée par la collectivité (Australie,Nouvelle-Zélande)）」(1926）の試みとの相互検討により、カルサンティ氏の議論について更に深い洞察をもたらすことが出来るように思われる。

デュベ氏

カルサンティ氏（左）
アボット氏（右）

コロック開催がめざしたもの

デュルケーム没後 100 年を記念して、デュルケームゆかりの地で開かれたこのコロックは、「デュルケーム作品の後継者たち」と題されていることからも推察されるとおり、近年のデュルケーム研究の成果を共有しその深化を図るというよりもむしろ、デュルケームがもたらしたインパクトそのものを、つまりデュルケーム社会学のその後の広がりを測ろうとするものであった。コロックのパンフレットに書かれているように、デュルケーム作品それ自体の正統的な理解、というアカデミックな課題をいったん離れ、社会科学にとって、さらにその外部にとってデュルケームが及ぼしうる、あるいは実際に及ぼした影響を見積ろうというのが、このコロックのねらいであった。報告者として狭義のデュルケーム研究者・社会学史家だけではなく、デュルケームと何らかの形で結びついた多様な分野の研究者が集まったのはそのためである。とりわけ、ボルドー政治学院とボルドー大学の共催という形をとったこのコロックは、政治科学と社会学との交流の場という側面をもっていた。主催者によれば、デュルケーム作品の深化ではなく広がりに焦点を当てたこのようなコロックが開かれたのには、今日のフランスの教育・研究において社会科学が置かれた厳しい状況がある。単にデュルケーム社会学あるいはデュルケーム思想それ自体の射程と意義だけでなく、危機に瀕する社会科学そのものの射程と意義を、デュルケームを通して再考しようというねらいが、そこにはあったのである。

（赤羽悠）

エミール・デュルケームセンターの活動

エミール・デュルケームセンターについて、ウェブサイト（https://durkheim.u-bordeaux.fr/）の情報を掲載しておく。同センターは、「社会科学における比較法の主導者の名を冠した、政治科学と比較社会学」のセンターであるとされる。拠点はボルドー大学ヴィクトワールキャンパスと、ボルドー政治学院のペサックキャンパスにある。ボルドー政治学院や CNRS、ボルドー大学の政治学者および社会学者が参加している。その研究は多様だが、5 つの軸、つまり、同一化、傷つきやすさ・不平等・その経歴 、正統性・組織・代表、知、国際関係の社会学を置いている。

同センターウェブサイトでは、今回の国際コロックの情報も公開されており、各報告の動画と要旨をみることができる。詳しくは下記リンクをご覧いただきたい。

https://durkheim.u-bordeaux.fr/Qui-sommes-nous/Centenaire-de-la-mort-d-Emile-Durkheim

（中倉智徳）

ボルドー時代のデュルケーム

デュルケームが大学において教鞭を取った時期は、ボルドーで講師に任命された 1887 年から亡くなる 1917 年までであり、ソルボンヌに異動するのが 1902 年であるから、ちょうど 15 年ずつで前半のボルドー時代と後半のパリ時代に分けられることになる。このボルドー時代は、デュルケームが今日まで社会学史上の重要人物としてみなされるための多くの業績を生み出した時期にあたる。まず、フランス国内において「社会科学」（science sociale）という名称の講義が設置されたのは、デュルケームがボルドーで担当した講義がはじめてであったし、デュルケームが生前に出版した主要著作のうち、『社会分業論』（1893 年）、『社会学的方法の規準』（1895 年）、『自殺論』（1897 年）はこの時期に刊行されたものである。さらに『社会学年報』を創刊したのもボルドーであり、鉄道で 12 時間を要したという当時のパリ＝ボルドー間の交通手段や、主として書簡に拠っていた通信手段を考えると、パリをはじめ各地に散在していた協力者たちをまとめるのは途方もなく大変なことであっただろう。

また、社会学という学問のあり方をめぐって展開されたタルドとの論争も、ほぼボルドー時代に行われている。タルドに対する批判的なコメントは 1893 年の『社会分業論』に見られるが、このときはタルドもまた、ボルドーと同じアキテーヌ地方のサルラの裁判所勤務であった。1894 年 2 月にタルドは司法省司法統計局長に任命されてパリに上京し、デュルケームが 1902 年にパリに来るまでは、パリとボルドーという距離を隔てた論争となっていた。

私生活の面においても、ボルドー時代はデュルケームにとってさまざまなライフコース上の変化が見られた。この時期に二人の子供が生まれ（1888 年に娘のマリー、1892 年に息子のアンドレ）、両親が相次いで亡くなっている（1896 年に父親、1901 年に母親）。また、甥のマルセル・モースが文学部の学生として 1890 年から 1895 年にかけてボルドーに居住し（同居はしなかったようである）、数少ない身近な近親者として接することになる。

（池田祥英）

デュルケーム旧宅訪問記

コロックの２日目が終わってから、シンポジウムに参加したメンバーとともに、デュルケームがボルドー時代に暮らした旧宅を訪問しました。旧タレンス大通り、現在ではフランクリン・ルーズベルト大通りと呼ばれている通りに面しています。そこは市街からは少し離れた、よりのんびりとした地域かもしれません。そしてじつはデュルケームの旧宅とされる家は２つあり、おそらくはよく知られている９番地の家と、92 番地の家です。どちらの家にもプレートが掲げられていますが、その内容が異なっていました。９番地の家には「旧タレンス大通り 179 番地で、1887 年から 1897 年までこの家に暮らした」こと、そしてこの家で、『社会分業論』、『社会学的方法の基準』、『自殺論』の主著三作を書き上げたことが記されています。92 番地のプレートには、「この家に社会学の創設者エミール･デュルケームが 1887 年-1902 年まで暮らした」と書かれていました。デュルケーム一家は 1897 年４月 11 日にタレンス大通りの 179 番地から 218 番地へと転居していますので、もしかしたらこのプレートは 1897 年-1902 年の誤りかもしれません。さらに池田祥英氏に教示いただいたことですが、近年の調査の結果によれば、タレンス通りの番地はデュルケームの時代のあとでなんどか起点変更がなされているそうです。それを考慮にいれると、タレンス大通り 179 番地はたしかに現在の９番地で間違いないけれども、転居先の 218 番地は、現在の 92 番地ではなく、60 番地だったのではないかとも言われているそうです。

さて、ボルドー大学とデュルケーム旧宅の位置関係を確認しておくと、国際コロックの会場でもあった現在の同大学の社会学部はヴィクトワール広場にあります。ですがここはもともと医学部であり、デュルケームの勤めていた文学部はより市街中心地に近い、現在ではアキテーヌ博物館として利用されている建物に入っていました。そこからデュルケームの旧宅までは２キロほど、歩いて 30 分弱の距離です。よく散歩をしていたとされるデュルケームが自宅から大学まで歩いて通勤していたのであれば、ほどよい運動となったことでしょう。モースは散歩しているデュルケームをみかけると、この尊敬すべき、しかしすこしばかりパターナリスティックな叔父を避けて見つからないように隠れたといわれています。きっと力強く歩いていたであろうデュルケーム、そしてそれをみつけて姿を隠したモース、ボルドーの街並みに残る 100 年前の社会学の偉人たちの記憶を辿り、我が身に重ねることのできた贅沢な時間でした。

（中倉智徳　次頁以下の写真も）

デュルケーム旧宅訪問記

フランクリン・ルーズベルト大通り 9 番地（旧タレンス通り 179 番地）。デュルケームはここで 1887 年から 97 年まで暮らしたとされる。

フランクリン・ルーズベルト大通り 9 番地に掲げられているプレート。デュルケームがここで『社会分業論』、『社会学的方法の基準』、『自殺論』を書き上げたことが記されている。

デュルケーム旧宅訪問記

フランクリン・ルーズベルト大通り 92 番地（旧タレンス通り 218 番地？）とプレート

＊本号掲載写真のうち縁にぼかしがあるものは小川撮影

編集後記

本号では、デュルケーム没後 100 年を記念したボルドー国際コロックの特集号として、コロックへの参加報告を中心に、その雰囲気やデュルケームのボルドーでの足跡をたどり紹介した。デュルケームは 1917 年 11 月 15 日に没したと言われている。まさに没後 100 年を迎えようとするこの時期に、本号をお届けすることができ、安堵している。

本号の編集は中倉智徳、赤羽悠の 2 名が主に担当した。改めて、中倉・赤羽の 2 名が科研費を利用して派遣されたことに感謝申し上げる。また、現地でも協力頂いた小川伸彦、白鳥義彦、溝口大助、池田祥英各氏（以上科研研究メンバー）及びさまざまにお世話いただいた柵瀬宏平氏（ボルドー大在籍）にも、感謝したい。

最後になるが、9 月にはイヴ・デロワ氏をお迎えした東京・京都・奈良での国際シンポジウム等も終え、本科研の研究が着実に成果として形となりつつある。ボルドーでのコロックでも、社会科学の危機的状況のなかで古典をどう活用できるかという問題意識が語られていた。これは本科研とも共通するものであろう。本号が本科研の成果の結実へむけた弾みとなれば幸いである。（中倉・赤羽）

科学研究費補助金基盤研究（B）
「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第６号

発行日　：2017 年 11 月 15 日
編　集　：中倉智徳・赤羽悠
発　行　：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部 中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

News Letter
vol.7
2018.1

7

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●本科研主催　国際シンポジウムの報告・・・・・・・・・・・・ 3
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 6 回・・・・・・ 12
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　14 名　　●連携研究者　3 名　　●研究協力者　13 名（平成 30 年 1 月現在）
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

本科研の概要

●４つの班とメンバー

Ａ班（起源解明チーム）

【研究分担者】太田健児［班長］（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）
【連携研究者】池田祥英（北海道教育大学函館校特任准教授）
【研究協力者】赤羽悠（フランス社会科学高等研究院博士課程）／荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

Ｂ班（解釈史検討チーム）

【研究分担者】岡崎宏樹［班長］（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学研究院人文科学系教授）［研究代表者］／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）
【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（東京工学院専門学校公務員科・航空学科専任教員）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビセンター　センター長）／村田賀依子（奈良女子大学非常勤講師）／吉本惣一（横浜国立大学成長戦略研究センター研究員）

Ｃ班（国際比較チーム）

【研究分担者】藤吉圭二［班長］（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（立命館大学先端総合学術研究科非常勤講師）／林大造（追手門学院大学社会学部准教授）
【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

Ｄ班（社会学教育チーム）

【研究分担者】白鳥義彦［班長］（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学研究院人文科学系教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）
【連携研究者】梅村麦生（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学））／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）
【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／川本彩花（関西大学非常勤講師）

本科研主催　国際シンポジウムの報告

2017

2017 年 9 月に、フランスよりボルドー政治学院院長イヴ・デロワ氏を招き、本科研主催の国際シンポジウムとラウンド・テーブルを開催しました。イヴ・デロワ氏の紹介と、シンポジウムの開催趣旨、プログラムなどを掲載します。

●イヴ・デロワ氏の紹介

イヴ・デロワ氏はボルドー政治学院教授で、フランス大学学院の名誉会員（正会員は 2000 年 - 2005 年）である。政治的なものの歴史社会学を専門とする同氏には、とりわけ以下の著書がある。『学校と市民性。ジュール・フェリーからヴィシー政権までの共和主義的個人主義。――論争』（1994 年）、『神の声。もう一つの選挙投票の歴史のために。フランスにおけるカトリック聖職者と投票、19 - 20 世紀』（2006 年）、『投票行動』（2008 年）。最近、ラルシエ社から『選挙分析』についての概論を共著で、またラ・デクーヴェルト社から『政治的なものの歴史社会学』（邦訳『国民国家　構築と正統化――政治的なものの歴史社会学のために』中野裕二［監訳］、稲永祐介、小山晶子［訳］、吉田書店、2013 年）の新版を刊行している。また、ストラスブール政治学院、パリ政治学院、ソルボンヌ（パリ第一大学）でも教鞭をとってきている。現在ボルドー政治学院院長であり、『フランス政治学評論』誌の編集委員長でもある。邦訳論文として、「失われた時間性を求めて――政治的なものの標定に対する歴史社会学の貢献」、『社会学雑誌』第 20 号、「移民、エスニシティーの問題に関する、フランスにおける研究についての視点――ある政治社会史学者の観点」、『社会学雑誌』第 22 号、もある。

Yves Déloye est professeur de science politique à Sciences Po Bordeaux et membre honoraire de l'Institut universitaire de France (2000-2005). Spécialiste de sociologie historique du politique, il est notamment l'auteur des livres suivants : *Ecole et citoyenneté. L'individualisme républicain de Jules Ferry à Vichy : Controverses* (1994), *Les voix de Dieu. Pour une autre histoire du suffrage électoral. Le clergé catholique et le vote en Fance, XIXe-XXe siècles* (2006), *L'acte de vote* (2008). Il vient récemment de publier, aux éditions Larcier, en co-direction un traité consacré aux *Analyses électorales* et, aux éditions de La Découverte, une nouvelle édition de *Sociologie historique du politique* disponible en japonais. Il a également enseigné à Sciences Po Strasbourg, Sciences Po Paris et à la Sorbonne (Université Paris I). Il est actuellement directeur de Sciences Po Bordeaux et dirige le comité de rédaction de la *Revue française de science politique (RFSP).* Ses articles suivants sont traduits et publiés en japonais : 《A la recherche de la temporalité perdue. La contribution de la sociologie historique au repérage du politique》, *Sociological Review of Kobe University*, No.20 ; 《Un point de vue sur les recherches françaises sur la question de l'immigration, de l'ethnicité : le regard d'un socio-historien du politique》, *Sociological Review of Kobe University*, No.22.

デロワ氏（京都会場にて　2017 年 9 月 21 日）

国際シンポジウムの報告

●東京会場

社会の境界と社会学の境界―社会学のディシプリン再生はいかにして可能か―

Limites de la société / Frontières de la sociologie. Quels renouvellements pour la discipline sociologique ?

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」（15H03409）、日仏社会学会、デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：（公財）日仏会館、日仏会館フランス事務所

＊日　　時：2017 年 9 月 18 日（月・祝）　13:30 – 18:00

＊場　　所：日仏会館　１階ホール

＊参加者数：９４名

社会の境界／社会学の境界――シンポジウム開催趣旨――

現代の社会を理解しようとするとき、私たちはこれをひとつのまとまりをもった有機的なシステムとして思い描くことはできない。地域も国家も、もはや明確な境界をもったひとつの自律的な単位ではない。そこには、地域や国家の境界を越えて展開するグローバル化の諸力と、地域や国家の境界を際立たせようとする諸力が対抗し、打ち消しあいつつも、結びあい、互いを変化させつつある、複雑な諸過程の複合がある。社会の境界は不確定で不透明であり、たえざる再構成のプロセスにある。だからこそ、社会の境界が問題となる。

たとえば、EU 諸国が直面する難民問題。難民は私たちの同胞でありうるのか。どこまでが私たちの仲間で、どこからが違法の者であるのか、その線引きの根拠は何なのか。

社会学は社会を研究する学問であるといわれる。対象である社会の境界が不確定化している以上、社会のまとまりを前提とした社会学の語りは通用しなくなる。社会学の境界も不確定化する。社会とは何かが不明確となれば、社会学とは何かということも自明ではなくなる。諸力の複合である現代の社会現象を理解するためには、諸学問の寄せ集めではない、新たな社会学の原理を考える必要があるだろう。そのためには、社会学が社会学として成立した原点に目を向ける作業も必要となるだろう。

われわれがこの作業を進めるにあたって注目するのは、社会学に学問的市民権を得させるべく奮闘した、「世紀の転換期」の社会学者エミール・デュルケームおよび彼の学派である。デュルケーム没後 100 年を迎えた今、こうした作業は、現代において古典を読むことの方法および意義を問うことでもある。

このシンポジウムは、社会の境界で生起する諸現象に注目するとともに、境界的現象を把握するための社会学の理論と方法を多角的に考察し、ディシプリンとしての社会学を考える、きわめてアクチュアルな試みとなろう。

このシンポジウムは、日本学術振興会の支援を受けている私どもの科研グループと日仏社会学会およびデュルケーム／デュルケーム学派研究会が、日仏会館および日仏会館フランス事務所との共催で開催するものである。関係各機関のご支援ご尽力に感謝したい。

Avant-propos du colloque international à Tokyo « Limites de la société / Frontières de la sociologie »

Lorsque nous essayons de comprendre la société contemporaine, nous ne pouvons plus envisager celle-ci comme un système organique et cohérent. Ni la communauté ni l'État ne sont plus des unités autonomes aux contours définis. La société constitue l'espace de confrontation entre les forces de mondialisation et les forces de démarcation régionale ou nationale. Les premières se développent en dépassant les limites régionales et nationales, tandis que les secondes visent au contraire à renforcer ces limites. Ces forces s'affrontent, s'annihilent puis s'associent en suscitant des transformations réciproques au long d'un ensemble de processus complexes. De ce fait, les limites de la société contemporaine sont incertaines, opaques et inscrites dans un processus incessant de reconstruction. En ces termes, le problème se pose actuellement.

Ainsi la question des réfugiés et les problèmes migratoires auxquels les pays de l'Union européenne sont confrontés questionnent les limites de la société. Les migrants appartiennent-ils à notre communauté ? Jusqu'à quel point, et quelle est la légitimité de la ligne de démarcation entre eux et nous ?

Dès lors, qu'advient-il de la sociologie quand son objet devient ainsi mouvant et incertain ? On pourrait être tenté de penser que les discours sociologiques, qui supposent une cohérence de la société, perdent de leur efficacité, que les limites de la sociologie deviennent elles aussi incertaines. Pour appréhender les phénomènes sociaux contemporains dans toute leur complexité, il est nécessaire de repenser la sociologie en tant que discipline, de construire de nouveaux paradigmes ou au moins d'élaborer de nouvelles méthodes. À cette fin, il est aussi indispensable de réexaminer ses fondements historiques

Pour commencer cette ligne de recherche, nous nous intéressons de nouveau à Émile Durkheim et son École, qui ont tâché laborieusement, au tournant du siècle, de donner à la sociologie naissante son statut scientifique. À l'heure de célébrer le centenaire de la disparition de Durkheim, notre recherche s'inscrit d'ailleurs à la réflexion sur la méthode et la valeur de la lecture contemporaine des œuvres sociologiques dits « classiques ».

Tout en visant le renouvellement de la discipline sociologique, ce colloque est un essai d'actualisation en vue non seulement d'observer les phénomènes qui se produisent aux frontières de la société d'aujourd'hui, mais également d'examiner sous plusieurs angles les différentes théories et méthodes qui permettent de les comprendre.

Ce colloque est organisé à l'initiative du Groupe de recherche subventionné par la Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), de la Société japono-française de Sociologie, et de la Japanese Association for Durkheimian Studies. Il est également organisé en partenariat avec la Maison franco-japonaise et le Bureau français de la Maison franco-japonaise. Nous tenons à remercier sincèrement à la collaboration de toutes ces institutions concernées.

国際シンポジウムの報告

＊東京シンポジウム　プログラム

第一部　Première partie

司会：白鳥義彦（神戸大学）　Modérateur：SHIRATORI Yoshihiko (Université de Kôbe)

13:30 - 13:40　趣旨説明：中島道男（奈良女子大学）
Présentation du colloque：NAKAJIMA Michio (Université de jeunes filles de Nara)
講演者紹介：白鳥義彦（神戸大学）
Présentation du conférencier：SHIRATORI Yoshihiko (Université de Kôbe)

13:40 - 14:40　講　演　Intervention
Yves DÉLOYE (Institut d'études politiques de Bordeaux, Centre Émile Durkheim)
La sociologie durkheimienne de la citoyenneté : apports et limites.
イヴ・デロワ
市民性をめぐるデュルケーム社会学――寄与と限界

14 :40 - 15:00　コメント　：小川伸彦（奈良女子大学）　OGAWA Nobuhiko (Université de jeunes filles de Nara)
Discussion
古市太郎（文京学院大学）　FURUICHI Tarô (Université Bunkyô Gakuin)

15 :00 - 15 :30　イヴ・デロワからのリプライとフロアからの質疑
Réponse d'Yves DÉLOYE et questions-réponses avec le public

休憩　Pause

第二部　Deuxième partie

司会：北垣徹（西南学院大学）　Modérateur：KITAGAKI Tôru (Université Seinan Gakuin)

15:40 - 16:40　報　告　Intervention
岡崎宏樹（神戸学院大学）　OKAZAKI Hiroki (Université Kôbe Gakuin)
非合理性と流動性――社会学の境界で考える
Irrationalité et liquidité.
荻野昌弘（関西学院大学）　OGINO Masahiro (Université Kwansei Gakuin)
不可視の他者――社会学的伝統の埒外にあるもの
La présence invisible d'autrui : ce qui échappe au cadre classique de la sociologie.

16:40 - 17:00　コメント　：イヴ・デロワ　Yves DÉLOYE
Discussion

17:00 - 18 :00　全体討論　Discussion générale

国際シンポジウムの報告

●京都会場

古典から現代へ―社会学のディシプリン再生はいかにして可能か―

Lire l'actualité à travers les œuvres classiques. Quels renouvellements pour la discipline sociologique ?

主催：基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）、デュルケーム／デュルケーム学派研究会、立命館大学生存学研究センター

＊日　　時：2017 年 9 月 21 日（木）　13:00 – 18:30

＊場　　所：コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）２階第一会議室

＊参加者数：２７名

シンポジウム「古典から現代へ」の開催にあたって

中島道男（奈良女子大学）

現代社会は大きな過渡期である。学問のあり方のみならず、人間の生き方も問われている。社会学に焦点をあてて、この大きな問題の一端を考えるのがこのシンポジウムの狙いである。

社会学は、前近代と近代との差異を考えるなかで、西欧近代の自己反省の学として始まった。現代のわれわれにとっての課題は、近代社会と現代社会の落差を考えながら、新たな社会学のあり方、人間の生き方を考えることである。

本シンポジウムでとりわけ焦点をあてたいのは、デュルケームおよび彼の学派である。デュルケームは、ひとつ前の世紀の転換期に、ディシプリンとしての社会学を確立させるために奮闘した。社会学確立の作業を振り返るとともにその試みがいかに継承・批判されてきたかをたどることは、われわれの課題にとって大きな意味があろう。

デュルケームは社会学の古典である。古典を現代に活かすことは、デュルケームと現代のわれわれとのあいだの 100 年の距離を飛び越えることではない。この距離を大事にしつつ、デュルケームを活かさなければならない。現代における古典の読み方がまさに問われているということでもある。

このシンポジウムは、科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」（15H03409）の研究グループとデュルケーム／デュルケーム学派研究会、そして現代の人びとのこれからの生き方を構想し、あるべき世界を実現する手立てを示し、そのために諸学問のあり方を再構築することを目標としている立命館大学生存学研究センターがともに開催するものである。ご支援ご協力いただいた関係各位に感謝したい。

A propos du colloque « Lire l'actualité à travers les œuvres classiques »

La société contemporaine se trouve dans une phase de grande transition. On est maintenant obligé de s'interroger non seulement sur la manière de penser scientifique, mais aussi sur la manière de vivre elle-même pour l'être humain.

Ce colloque a pour but d'essayer de réfléchir, du point de vue sociologique, sur cette grande question que se pose l'état actuel.

Originairement, la sociologie est un savoir auto-réflectif que la modernité occidentale a construit, à travers le XIXe siècle, en déchiffrant des différences entre l'époque avant-moderne et l'époque moderne.

De notre part, nous sommes obligés actuellement, au début du XXIe siècle, de déchiffrer des transformations qui bouleversent la société contemporaine, afin d'envisager la possibilité d'une nouvelle manière de penser sociologique, et éventuellement la possibilité d'une nouvelle manière de vivre pour l'être humain.

Plus particulièrement, ce colloque a pour objectif de faire remarquer Emile Durkheim et son Ecole. Au tournant des siècles du XIXe au XXe, le sociologue a fait de grands efforts, pour établir le savoir sociologique comme discipline scientifique indépendante.

En examinant rétrospectivement l'œuvre de l'établissement de la sociologie, et en suivant simultanément son destin ultérieur, nous pourrons obtenir une nouvelle perspective qui aide à éclaircir des questions que se pose la société contemporaine.

Les œuvres de Durkheim sont déjà des « classiques » sociologiques.

Lire actuellement des « classiques », ce n'est pas de sauter brusquement ces cent ans qui nous séparent du fondateur de la sociologie.

En examinant soigneusement cet écart historique, nous sommes obligés d'actualiser la sociologie durkheimienne.

Plus généralement, nous sommes obligés de s'interroger sur la nouvelle manière d'actualiser des œuvres classiques sociologiques.

Ce colloque est organisé à l'initiative du Groupe de recherche « Comment la renaissance de la sociologie comme discipline peut se faire? – à partir de la réflexion sur la sociologie durkheimienne » (JSPS KAKENHI Grant Number 15H03409), et de la Japanese Association for Durkheimian Studies. Il est également organisé en partenariat avec le Centre de recherches « Ars Vivendi » (Université Ritsumeikan), qui a pour but d'envisager la manière de vivre pour le peuple futur, présenter des moyens pour réaliser la société idéale, et reconstruire la nouvelle méthode pour les sciences. Nous tenons à remercier sincèrement à la collaboration de toutes ces institutions concernées.

国際シンポジウムの報告

＊京都シンポジウム　プログラム

司会：白鳥義彦（神戸大学）　Modérateur：SHIRATORI Yoshihiko (Université de Kôbe)

第一部　Première partie

13:00 - 13:05　趣旨説明：中島道男（奈良女子大学）
Présentation du colloque：NAKAJIMA Michio (Université de jeunes filles de Nara)
講演者紹介：白鳥義彦（神戸大学）
Présentation du conférencier：SHIRATORI Yoshihiko (Université de Kôbe)

13:05 - 14:25　講　演　Intervention
Yves DÉLOYE (Institut d'études politiques de Bordeaux, Centre Émile Durkheim)
La sociologie durkheimienne et l'histoire : Durkheim peut-il être considéré comme un précurseur de la sociologie historique ?
イヴ・デロワ
デュルケーム社会学と歴史学
――デュルケームは歴史社会学の先駆者ととらえられ得るか？

14:25 - 14:40　休憩　Pause

14:40 - 15:00　討論　Discussion

第二部　Deuxième partie

報　告　Intervention

15:00 - 15:40　**池田祥英**（北海道教育大学函館校）IKEDA Yoshifusa (Hokkaido University of Education, Hakodate)
「社会学」の境界画定――エスピナス、タルドからデュルケムへ
La démarcation de la « sociologie » : d'Espinas et Tarde à Durkheim

15:40 - 16:20　**江頭大蔵**（広島大学）　EGASHIRA Daizo (Hiroshima University)
個人と社会の異質性とディシプリンの変容
Heterogeneity between the Individual and the Social and Transformation of Discipline

16:20 - 16:35　休憩　Pause

16:35 - 17:15　**中倉智徳**（立命館大学）　NAKAKURA Tomonori (Ritsumeikan University)
デュルケーム受容の国際比較――東アジアを中心として
The Reception of Durkheimian Sociology in East Asia

17:15 - 17:55　**横山寿世理**（聖学院大学）　YOKOYAMA Suzeri (Université Seigakuin)
デュルケム社会学の受け継がれ方――教科書分析を通じて
Comment hériter la théorie durkheimienne?: une analyse des manuels de sociologie

17:55 - 18:30　全体討論　Discussion générale

●奈良会場

ラウンド・テーブル　「イヴ・デロワ氏を囲んで」

主催：基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）、デュルケーム／デュルケーム学派研究会

＊日　　時：2017 年 9 月 22 日（金）　11:00 - 14:00

＊場　　所：奈良女子大学　文学系Ｎ棟３３９教室（奈良市）

＊参加者数：１３名

＊内　　容：ボルドーでのデュルケーム没後 100 周年シンポジウム開催の経緯や、フランスにおけるデュルケーム社会学の現在の位置づけなどについてお伺いしました。

国際シンポジウムの報告

＊国際シンポジウム　ポスター

国際シンポジウム

社会の境界と社会学の境界

—社会学のディシプリン再生はいかにして可能か—

Colloque

Limites de la société / Frontières de la sociologie. Quels renouvellements pour la discipline sociologique ?

日仏会館フランス事務所

Maison Franco-Japonaise

東京会場

参加無料
要オンライン申込
Inscription

2017年
9月18日（月・祝）　**13:30 - 18:00**

日仏会館 1階ホール
〒150-0013　東京都渋谷区恵比寿3-9-25
ＪＲ山手線：恵比寿駅東口徒歩10分
東京メトロ日比谷線：恵比寿駅１番出口徒歩12分

言語：日本語・フランス語（同時通訳あり）

日仏会館フランス事務所Web siteより参加申込みをお願いします。
http://www.mfj.gr.jp/agenda/2017/09/18/20170918_yves_deloye/index_ja.php

第一部　司会：白鳥義彦（神戸大学）

13:30 - 13:40　趣旨説明　：中島道男（奈良女子大学）
講演者紹介：白鳥義彦（神戸大学）

13:40 - 14:40　講　演
イヴ・デロワ
La sociologie durkheimienne de la citoyenneté : apports et limites.
市民性をめぐるデュルケーム社会学——寄与と限界

14 :40 - 15:00　コメント：　小川伸彦（奈良女子大学）
古市太郎（文京学院大学）

15 :00 - 15 :30　イヴ・デロワからのリプライとフロアからの質疑

第二部　司会：北垣徹（西南学院大学）

15:40 - 16:40　報　告
岡崎宏樹（神戸学院大学）
非合理性と流動性——社会学の境界で考える
Irrationalité et liquidité.
荻野昌弘（関西学院大学）
不可視の他者——社会学的伝統の埒外にあるもの
La présence invisible d'autrui : ce qui échappe au cadre classique de la sociologie.

16:40 - 17:00　コメント：　イヴ・デロワ

17:00 - 18 :00　全体討論

デュルケーム没後100年の節目にあたり、市民性・非合理性・他者等の概念を手がかりに、社会学と現代社会双方の境界のゆらぎを分析し、ディシプリンとしての社会学の可能性を問う。

京都会場

参加無料
申込不要

奈良会場

国際シンポジウム
古典から現代へ
—社会学のディシプリン再生はいかにして可能か—
2017年 9月 21日(木)　13:00 – 18:30
コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）２階第一会議室
〒600-8216　京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町939
京都市営地下鉄烏丸線、近鉄京都線、JR各線京都駅 徒歩5分
言　語：日本語・フランス語・英語（講演については逐次通訳あり）
登壇者：イヴ・デロワ
La sociologie durkheimienne et l'histoire : Durkheim peut-il être considéré comme un précurseur de la sociologie historique?
デュルケーム社会学と歴史学
——デュルケームは歴史社会学の先駆者ととらえられ得るか？
池田祥英（北海道教育大学函館校）
江頭大蔵（広島大学）
中倉智徳（立命館大学）
横山寿世理（理学院大学）

主　催　・基盤研究（B）社会学のディシプリン再生はいかにして可能か（15H03409）
・デュルケーム／デュルケーム学派研究会
・立命館大学生存学研究センター

ラウンド・テーブル　イヴ・デロワ氏を囲んで
2017年 9月 22日(金)　11:00 – 14:00
奈良女子大学文学系N棟339教室（大学正門を入りすぐ右の建物）　〒630-8506 奈良市北魚屋西町
主　催　・基盤研究（B）社会学のディシプリン再生はいかにして可能か（15H03409）
・デュルケーム／デュルケーム学派研究会

イヴ・デロワ　Yves DÉLOYE
フランスの社会学者。1963年生まれ。ボルドー政治学院（Sciences Po Bordeaux）院長、エミール・デュルケーム研究センター員。*École et citoyenneté — L'individualisme républicain de Jules Ferry à Vichy : controverses*（Presses de Sciences Po, 1994）、*Sociologie historique du poltique*（Découverte, 2007 第3版；邦訳『国民国家　構築と正統化——政治的なものの歴史社会学のために』（監訳）中野裕二、（訳）稲永祐介、小山晶子、2013年、吉田書店）、*L'acte de vote*（Presses de Sciences Po, 2008 共著）など、著書・論文多数。関心領域は、政治の歴史社会学・政治社会学・EUの政治理論・宗教と政治・科学的知識の社会学など。

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」（15H03409）
日仏社会学会、デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：（公財）日仏会館、日仏会館フランス事務所

※本科研の研究活動の詳細はWeb siteをご覧ください。
ディシプリン再生とデュルケーム

連絡先(全会場)：デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

科研費 KAKENHI

活動報告　※2017 年７月から現在まで（白ヌキは年度）

2017 Ｄ班（社会学教育チーム）2017 年度第２回班別研究会

日　時：2017 年 8 月 8 日（火）14:00～19:30
場　所：神戸大学大学院人文学研究科・文学部Ｃ棟 4 階Ｃ462 共同談話室
出席者：５名
内　容：小川伸彦「ゴッホとデュルケーム―古典化論への示唆を N.エニックの著作に求めて（１）」
梅村麦生「古典としてのデュルケーム―ドイツの社会学理論教科書の事例より」
川本彩花「分析対象とする社会学教科書のサンプリング・選定基準について」
横山寿世理「デュルケーム社会学の受け継がれ方―教科書分析を通じて」
白鳥義彦「国際シンポジウム開催に向けて」

2017 Ｂ班（解釈史検討チーム）2017 年度第３回班別研究会

日　時：2017 年 9 月 2 日（土）13:30～18:00
場　所：奈良女子大学文学系 N 棟 339 室（奈良市）
出席者：13 名
内　容：「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」という科研のメインテーマをめぐって、研究者 10 名が各 20 分の報告をおこない、理論・学説研究からのアプローチによって何が明らかになるかについて討議しました。

2017 『命題集（仮題）』に関する相談会

日　時：2017 年 9 月 2 日（土）18:00～19:30
場　所：奈良女子大学文学系 N 棟 339 室（奈良市）
出席者：12 名
内　容：『命題集（仮題）』出版企画についての検討を行ないました。

2017 Ｄ班（社会学教育チーム）2017 年度第３回班別研究会

日　時：2017 年 10 月 7 日（土）14:00～18:00
場　所：神戸大学大学院人文学研究科・文学部Ｃ棟 4 階Ｃ462 共同談話室
出席者：３名
内　容：横山寿世理「社会学教科書におけるデュルケーム社会学の伝えられ方
―ディシプリン再生と社会学教育（１）―」
梅村麦生「社会学教育とデュルケーム―今後の報告案検討―」
白鳥義彦「『社会学教科書の社会学』の可能性」

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第６回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号では、モースとタルドも登場します。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.15●

様々な学部の間の孤立状態を取り除くには、それらを同じ名称の下に再び集めたり、一つの共通の会議の指導の下におくことでは十分ではない。とくにいっそう必要なことは、自ら絶えず、お互いを結びつける諸関係を意識することである。そうでなければいかに隣り合っていようと、それらはお互いに見ず知らずのままであろう。

<< Pour arracher les différentes Facultés à leur isolement il ne suffit ni de les réunir sous une même rubrique ni de les soumettre à la direction d'une assemblée commune. Il faut encore et surtout qu'elles aient elles-mêmes et d'une manière continue le sentiment des relations qui les unissent. Autrement, quoique voisines, elles resteront étrangères les unes aux autres. >>

【ミニ解説】

デュルケームは「社会学者」となる前に、哲学という枠組みの中で教育を受け、アグレガシオン、博士号を取得するというその正統的なコースを歩んでいる。哲学の博士論文としてソルボンヌに提出された『社会分業論』には、「個人がますます自立的になりつつあるのに、いよいよ密接に社会に依存するようになるのは、一体どうしてなのか、個人は、なぜいよいよ個人的になると同時にますます連帯的になりうるのか」という、個人と社会との関係をめぐる社会学的な問題関心が提示されているが、それと同時に、同書の目的は「何よりもまず、道徳生活の諸事実を、実証諸科学の方法によってとりあつかおうとする、ひとつの試み」として定義されている。デュルケームの出発点には「道徳の科学」が存在しているのである。

またデュルケームは、28 歳から 29 歳という若い時期にあたる 1886 年から 1887 年にかけてドイツに留学し、それを踏まえて執筆した「ドイツにおける道徳の実証的科学」[« La science positive de la morale en Allemagne », dans *Revue philosophique* 24(2), pp.33-58, 113-142, 275-284. [*Textes 1: Éléments d'une théorie sociale*, Présentation de Victor Karady, 1975, Minuit, pp.267-343.]＝『デュルケーム　ドイツ論集』行路社、小関藤一郎・山下雅之訳、1993 年、81-162 頁]、「ドイツの大学における哲学教育の現状」の二つの論文が認められて、ボルドーの文科ファキュルテに大学人としての最初のポストを得た。前者の論文では、道徳の科学への関心がそのタイトルにも明示的に示されていて、内容においてもこれに関わる議論が展開されている。後者の論文では、ドイツにおける哲学の状況がより広く検討されており、道徳学についての論述とともに、心理学の位置づけ、カント主義の影響など、デュルケームの関心の所在を示す興味深

い論点が取り上げられている。

ここに引用したことばは、後者の論文からのものであるが、これは、当時の高等教育改革を牽引した高等教育協会の機関誌にあたる『国際教育評論』に掲載されている。そうした背景もあって、この論文では、ドイツにおける哲学の状況という学問的な内容だけでなく、フランスとの比較の視点を踏まえながら、ドイツにおける制度としての大学のあり方や日々の大学生活の様子などについても論じられている。普仏戦争敗北後の当時のフランスにおけるドイツへのライバル意識も反映してか、ドイツの大学では重複した講義が多いこと、受講生が多い講義は試験審査会のメンバーの教授のものであり、それ以外の講義は受講生が少ないこと、私講師の身分の不安定さ、中等教育と高等教育の教員職が完全に区別されていること（対してフランスではリセの教員から大学の教員へというルートが存在している）、講義は 45 分しかなく、掲示された時刻よりいつも 15 分遅れて始まるが、終わるのは定刻通りである、受講する授業数に応じて授業料が定められていることなど、ドイツの大学を称揚するばかりではない観察も端々に見受けられる。

社会学は第三共和政の下で進められた大学改革の中で制度化されていったが、この時期以降のフランスの大学改革は、ばらばらに存在する単科大学としてのファキュルテを結集して総合大学としてのユニヴェルシテを創設することが一貫したテーマとなる。引用したことばは、そうした方向性を示していて、当時の大学改革に沿った考えを若きデュルケームがこの段階ですでに有していたことがわかる。同時に、社会学的な主題としてとらえるならば、異なる要素の間での分業による「有機的連帯」を求めるものとしても読むことができる。同論文の後段には、「もしドイツの大学が生きているとすれば、それは生命の諸条件を満たしているからであり、数多くの要素が集まって全体をなしているからである」[p. 482＝205 頁] という記述も見られるが、これも「有機的連帯」に通ずる見方としてとらえることができ、大学の問題を考察するに際しても、デュルケームの社会学的な視点が生かされていることがわかる。そして、哲学、心理学、道徳学といった諸学問間、あるいは各学部といった諸学部間の関係の中から、ディシプリンの確立という問題も浮かび上がってくるのである。

（白鳥義彦　記）

【キーワード】

大学、ドイツ、道徳の科学、ディシプリン

【出典】« La philosophie dans les universités allemandes », dans *Revue internationale de l'enseignement* 13, 1887（pp.313-338 et 423-440）[引用は *Textes 3: Fonctions sociales et institutions*, Présentation de Victor Karady, 1975（Minuit p.468）]

（邦訳）「ドイツの大学における哲学教育の現状」、『デュルケーム　ドイツ論集』行路社、小関藤一郎・山下雅之訳、1993 年、193 頁

●ことばんごう no.16●

デュルケームとモースのことば

社会集団がその成員の一人一人に及ぼす圧力は個人をして、社会が自らについてつくりあげた観念や社会がその特性の何ほどかをそこに投入している観念を自由に批判させることを許さない。

<< La pression exercée par le groupe social sur chacun de ses membres ne permet pas aux individus de juger en liberté de notions que la société a élaborée elle-même et où elle a mis quelque chose de sa personnalité. >>

【ミニ解説】

人間は成長の過程で社会の観念を受け入れる。受け入れるための回路は基本的には身近な大人である。身近な大人が大きな個人差なく一様な観念を備えていれば、受け入れられる観念も一様であると想定できる。すでに大人が一様でないというだけでなく、受け入れのための、しかも相互に齟齬のあるような回路が多様に存在する現代だからこそ、フェイクニュースが話題になり、ポスト真実の時代が論じられる。同じ空間を生きる人々にどれほどのことが共有されているか。この言葉はそれをあらためて考えさせる。

（藤吉圭二　記）

【キーワード】

社会集団による圧力、社会集団の作り上げた観念、個人の自由な判断

【出典】Emile Durkheim et Marcel Mauss. « De quelques formes primitives de classification : contribution à l'étude des représentations collectives », dans *L'année sociologique* 6, 1903（Félix Alcan pp.71-72）

（邦訳）『分類の未開形態』法政大学出版局（叢書・ウニベルシタス）、小関藤一郎訳、1980 年、95 頁

デュルケームが暮らしたとされる、
ボルドーのフランクリン･ルーズベルト大通り 92 番地とプレート。
ニュースレター６号（ボルドー国際コロック特集号）より転載

●ことばんごう no.17●タルドのことば

文明化された世界がまさにひとつの広大な工房となり、そしてこの工房が、ひとつの途方もなく巨大なサロン、万人に開かれた――それを破壊しよう、さらには侵略しようとする野蛮な人びとにさえも開かれた――18 世紀の明るく自由なサロンとなるとき、そのときこそ、各人は生の喜びを真に知るだろう。

<< Et alors chacun connaîtra vraiment la joie de vivre, quand la terre civilisée ne sera plus qu'un vaste atelier et cet atelier qu'un salon immense, un clair et libéral salon du XVIIIe siècle ouvert à tous, -- même au barbare qui va le détruire, ou plutôt l'envahir. >>

【ミニ解説】

デュルケームとガブリエル・タルドの論争は、1893 年の『社会分業論』でのタルド模倣説批判によってはじまった。この著作でデュルケームが分業という経済現象に対する社会学的考察によって最初の大きな研究成果をあげたように、タルドも 1880 年の最初の論文「信念と欲望」から 1902 年の最後の主著『経済心理学』に至るまで、経済現象における社会的な領域の重要性を異なる視角から訴え続けていた。この意味でも両者は好敵手であり、争わざるを得なかったのであろう。

今回引用したのは、タルドの二本目の刊行論文である、1881 年の「経済学における心理学」からの一節である。タルドのいう「心理学」とは、個人の心理ではなく個人間のコミュニケーションによる相互作用を対象とする点でまさに社会学そのものであり、ジンメルとともにミクロ社会学の源流のひとつとして理解されうるだろう。とくにこの論文は、価値や効用を取扱う経済学にとってコミュニケーションがいかに重要かを、発明ー模倣説としてはじめて展開している点で重要である。タルドによれば、人が商品をなぜ欲するのかを考察するときには流行や慣習のような他者からの影響を無視することができない。だからこそ、経済学の基礎として相互作用を分析する社会学が置かれるべきなのである。

さらに、個人間の相互作用はタルドにとってもう一つの重要な意味をもっていた。デュルケームは分業による機能分化が人びとのあいだに連帯を生み出すことを強調した。対してタルドは、分業の相互扶助性にくわえて、分業によってひきおこされる会話、社交による「喜び」に注目する。タルドといえば「社会とは模倣である」という模倣説が有名である。しかし、「生の喜び」という表現に現れているように、彼の社会概念の根本はコミュニケーションの喜び、「社会は喜びである」という点にある。この意味での社会は、「ともにあり、ともに作業すること」の喜びであり、「社交性が自然に咲かせる花」である。引用文では、グローバルに分業する各人が生の喜びを知る社会の到来が、タルドの理想として掲げられているのである。

（中倉智徳　記）

【キーワード】

分業、社交、連帯、喜び

【出典】Gabriel Tarde, « La psychologie en économie politique », dans *Revue philosophique de la France et de l'étranger* 12, 1881 (p.418)

お知らせ・今後の活動

●第 5 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催）

日　　時：　2018 年 4 月 14 日（土）午後
場　　所：　文京学院大学（本郷キャンパス）
内　　容：　本科研費研究関連としては、『社会学的方法の規準』に関する報告が予定されています。
詳細が決定しましたら本科研のウェブページに掲載いたします。
備　　考：　参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。
デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

※　研究会の内容は一部変更される場合もあります。

クロニクル　2017 年 7 月～2018 年 1 月

- 7 月 15 日（土）　ニュースレター第 5 号発行
- 8 月 3 日（木）　部内報第 27 号配信
- 8 月 8 日（火）　社会学教育班 2017 年度第 2 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名
- 9 月 2 日（土）　解釈史検討班 2017 年度第 3 回班別研究会（奈良市）参加者 13 名
  『命題集（仮題）』に関する相談会（奈良市）参加者 12 名
- 9 月 7 日（木）　部内報第 28 号配信
- 9 月 18 日（月・祝）　国際シンポジウム「社会の境界と社会学の境界――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（東京都渋谷区）参加者 94 名
- 9 月 21 日（木）　国際シンポジウム「古典から現代へ――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（京都市）参加者 27 名
- 9 月 22 日（金）　ラウンド・テーブル「イヴ・デロワ氏を囲んで」（奈良市）参加者 13 名
- 10 月 5 日（木）　部内報第 29 号配信
- 10 月 7 日（土）　社会学教育班 2017 年度第 3 回班別研究会（神戸市）参加者 3 名
- 11 月 2 日（木）　部内報第 30 号配信
- 11 月 15 日（水）　ニュースレター臨時増刊（ボルドー国際コロック特集号）発行
- 12 月 7 日（木）　部内報第 31 号配信
- 1 月 8 日（月・祝）　起源解明班 2017 年度第 1 回班別研究会（詳細は次号）
- 1 月 11 日（木）　部内報第 32 号配信

編集後記

今号では、9月に開催した国際シンポジウムの報告や研究活動の報告を掲載しています。シンポジウムについては、東京会場での報告内容が『日仏社会学会年報』に、東京・京都会場の予稿集が本科研ウェブサイトに掲載予定です。次号では、4月に開催する第5回全体研究会の模様や、2017 年度の研究報告などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）
「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第７号

発行日　：2018 年 1 月 15 日
編集発行：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●2017 年度研究報告・2018 年度研究計画・・・・・・・・・・ 3
●第 5 回全体研究会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 7 回・・・・・・・ 10
●2017 年度成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
●お知らせ・今後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

News Letter
vol.8
2018.7
8

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　15 名　　●研究協力者　15 名（平成 30 年 7 月現在）
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

本科研の概要

●４つの班とメンバー

Ａ班（起源解明チーム）

【研究分担者】太田健児［班長］（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）
【研究協力者】赤羽悠（早稲田大学）／池田祥英（岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授）／荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

Ｂ班（解釈史検討チーム）

【研究分担者】岡崎宏樹［班長］（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学研究院人文科学系教授）［研究代表者］／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）
【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（東京工学院専門学校公務員科・航空学科専任教員）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビセンター センター長）／村田賀依子（奈良女子大学非常勤講師）／吉本惣一（横浜国立大学非常勤講師）

Ｃ班（国際比較チーム）

【研究分担者】藤吉圭二［班長］（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（千葉商科大学人間社会学部専任講師）／林大造（追手門学院大学社会学部准教授）
【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

Ｄ班（社会学教育チーム）

【研究分担者】白鳥義彦［班長］（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学研究院人文科学系教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）
【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／梅村麦生（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学））／川本彩花（関西大学非常勤講師）

2017 年度研究報告・2018 年度研究計画

◆2017 年度研究報告

◇A 班（起源解明チーム）

1 月 8 日に一橋大学で行われた班別研究会において、デュルケームの「社会」概念の出自、フランス経済学説史からのデュルケーム社会学の捉え直しの可能性、デュルケームのプラグマティズム論からの政治・社会哲学志向の読み取り可能性、『社会的方法の規準』新訳から見えたデュルケーム社会学理論再構成の可能性、社会学分野の問題設定と哲学分野の問題設定との齟齬問題、新しいデュルケーム研究の新動向からの再解釈、以上の各観点からの報告がなされ、社会実践論としてのデュルケーム社会学の独自性とそのための論拠としてのデュルケーム理論の「再構成」の貴重な手がかりが得られた。また、本科研の国際シンポジウムでの報告などを通じ、研究成果の発信をおこなった。

◇B 班（解釈史検討チーム）

計 3 回の班別研究会を開催した。4 月 16 日（文京学院大学）と 9 月 2 日（奈良女子大学）には、各参加者が「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」をめぐって報告をおこない、理論・学説研究からのアプローチによって何が明らかになるかについて討議した。6 月 10 日（奈良女子大学）には、「非人格的／人格的な力の熱狂：ベルクソン『二源泉』とデュルケム『原初形態』の比較考察」、「個人と社会の相互浸透性と異質性」という二つの研究発表がなされ、デュルケーム学派の批判的継承に関する研究が深められた。また、本科研の国際シンポジウムでの報告や、日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」の企画・研究報告などをおこない、本科研の成果を広く発信した。

◇C 班（国際比較チーム）

2017 年度の主たる研究計画は、デュルケーム受容についての本科研での調査結果とアジア諸国との比較を行うことであり、メールによる情報共有を行いつつ、2016 年度までの調査結果を学会や本科研国際シンポジウムで発表するとともに、当初計画に沿って東アジア圏におけるデュルケーム受容に関する調査を進めた。国（地域）ごとの古典への注目度の差異は、社会学の紹介経路が影響しているという知見が得られた。

◇D 班（社会学教育チーム）

2017 年度は、デュルケームを中心とした社会学史・社会学理論の位置づけの解明を目指し、ディシプリンが枠づけられて教えられるものとしての教科書の分析およびデュルケーム社会学の「古典化」のプロセス解明等を推進した。6 月 16 日（金）、8 月 8 日（水）、10 月 7 日（土）に班の研究会を行い、日本、フランス、ドイツ、英米を中心として、シラバス、教科書等に見られる、特に教育の面からの社会学のディシプリンのあり方を明らかにした。また、日本社会学会、本科研国際シンポジウム等での報告、諸論文の公刊等を通じて、研究成果の発信に努めつつ、『デュルケーム命題集』（仮題）の刊行準備も進めている。

◆2018 年度研究計画

◇A班（起源解明チーム）

社会学的方法の規準成立とその周辺の解明に関する研究成果をまとめ、A班として一定の完成形を作る。具体的には、①『社会学的方法の規準』新訳から見えてきたもの、②『社会分業論』を中心としたデュルケームのテキストの内在的理解とフランスにおけるデュルケーム研究の最前線の掌握、③デュルケーム社会学の可能性と他領域との接点（哲学・倫理学分野、経済学分野、マルクス主義・社会運動論）、という３つの観点を組み込むことにより、デュルケーム社会学の起源解明を目指す。

◇B班（解釈史検討チーム）

2018 年度は、班別研究会を通じて、日本のデュルケーム研究を欧米の研究とも比較しつつ解釈史的に考察する。その一方で、「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」をめぐる理論・学説研究からのアプローチについても、班別研究会等において 4 年間の研究を総括し、各自の最終的な報告論文に結実させる。

◇C班（国際比較チーム）

2018 年度は、前年度までの成果をとりまとめ、必要に応じて補足的な調査等を進める。これまでにヨーロッパ（スペイン）、韓国、台湾を対象に実施した調査を踏まえ、主に東アジアにおけるデュルケーム社会学受容のあり方を比較する。年内に数回の班別研究会を実施し、成果を取りまとめる。

◇D班（社会学教育チーム）

2018 年度も引き続き、日、仏、英米、独等における社会学テキストやシラバスの検討を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程を検討する。また、『デュルケーム命題集』（仮題）の刊行の準備にも取り組む。年 3～4 回程度班別研究会を開催し、年度末には研究成果を取りまとめる。

第５回全体研究会の報告

2018

本科研の第 5 回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第 35 回研究会と共催）を下記のとおり実施しました。第 2 部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時：2018 年 4 月 14 日（土）13:00～18:00
- 場所：文京学院大学　本郷キャンパス　Ｂ館 411 教室（東京都文京区）
- 参加者：29 名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
- プログラム：

第 1 部　自由報告

「デュルケーム社会的連帯論における道徳的原理――「ユダヤの本質」に注目して」

平田文子（早稲田大学）

コメンテーター：川本彩花（関西大学）

司会：江頭大蔵（広島大学）

第 2 部　科研関連報告ミニシンポジウム

テーマ「デュルケーム社会学の形成・成立とその独自性――『社会学的方法の規準』成立の諸相」

・「Ａ班のこれまでの研究成果と展望」　太田健児（尚絅学院大学）

・「"Histoire de l'économie sociale"講義の創設（1894）をめぐって」　吉本惣一（横浜国立大学）

・「社会学的方法とプラグマティズム」　赤羽 悠（早稲田大学）

・「再訪『社会学的方法の規準』――新訳上梓にあたって」　菊谷和宏（一橋大学）

全体討議　司会：太田健児（尚絅学院大学）

● 第 2 部ミニシンポジウム各報告の要旨 ●

"Histoire de l'économie sociale"※講義の創設（1894）をめぐって

吉本惣一（横浜国立大学）

『社会学年報』を創刊し、フランス社会学の一大勢力としてデュルケーム学派を築き上げるなど、デュルケームは社会学者として大きな成功を収めたといえる。しかし、1887 年ボルドー大学就任から 1902 年ソルボンヌの教育科学講座着任に至るまでの間に、少なくとも 2 回、デュルケームはアカデミック・キャリアにおける挫折を味わっている。

1 つは、1894 年ソルボンヌに創設される"Histoire de l'économie sociale"の講義をめぐるものである。この講義の担当をデュルケームは切望していたが、結局その願いは叶わなかった。もう 1 つは、1897 年コレージュ・ド・フランスに創設されたポストをめぐるものである。社会哲学講座として創設されたこのポストに任命されたのはジャン・イズーレであった。イズーレの任命は、アカデミック・キャリアを志向するデュルケームに、その夢を諦めねばならないと、そして、もう教育に身を捧げるしか道がないと思わせた。

2 つの挫折のうち、本報告では報告時間の制約もあり、"Histoire de l'économie sociale"の講義担当に焦点を絞り、本講義創設に至る流れについて検討した。

1890 年代初頭、社会科学に対する関心の高まりにも関わらず社会科学の定期的プログラムがないことが問題視されるようになり、社会研究の必要性が認識されるようになる。このような中、ラヴィスやディック・メイらが社会科学に関する講座開設に向けて動き出し、シャンブラン伯爵がソルボンヌに"Histoire de l'économie sociale"創設を決意する。この講義の担当を誰にするかは、二人の候補者が考えられた。デュルケームとエスピナスである。社会経済学を社会理論ととらえるならば、デュルケームのようなものがふさわしいと考えられた。それに対し、理論史に重点を置くならば、エスピナスが理想的な候補者であった。最終的に、エスピナスのみがこの講義担当の候補者となり、文学部において満場一致で可決された。

デュルケームによる"Histoire de l'économie sociale"は結局のところ幻となったわけであるが、この周辺を検討することによって、デュルケームの経済学に対する考え、あるいは彼の「社会経済学」というものの一端を明らかにすることができるのではないだろうか。そして、当時の「社会経済学」がどのように認識されていたのかについても理解が深まるであろう。

※"Histoire de l'économie sociale"の訳語について

エスピナスが担当することになったこの講義については、田原音和著『歴史のなかの社会学』等にもあるように、「社会経済史講義」と訳されるべきものであろう。ただ、実際にエスピナスが行った講義内容は「社会経済学史講義」と訳しうる面もないではない。ラヴィスが、革命史→経済史、社会史といった内容を求めたのに対し、エスピナスは、古代→ボダン・カンパネラのような思想家たちへの流れをやりたいと返答しており、「開講の辞」の内容も社会経済史よりは学史に近いからである。そこで報告要旨を本誌に掲載するにあたってはあえて訳語を充てず、講義名を原語のままとした。

社会学的方法とプラグマティズム

赤羽悠（早稲田大学）

デュルケームは、『社会学的方法の規準』において、社会の科学を確立したとされる。だが、その科学が提示する「真理」とはいったい何なのだろうか。社会の「真理」をめぐるこのような問いを通じて、単に客観的真理を明らかにする学にとどまらない、デュルケーム社会学の一側面が浮かび上がってくるように思われる。

そもそも、『規準』における社会的事実の定義それ自体が、社会の「真理」をめぐる一つのディレンマを孕んでいる、という点にまずは注目したい。この定義を検討するならば、そこには、観察対象としての社会から距離を取った社会学者の視線と、社会の構成員自身の視線が同時に含まれていることがわかる。ここで社会は、一方では客観的事実としての真理とされるが、他方では、社会の成員にこそ現れてくる「真理」である。科学としての社会学の確立を課題とし、社会学者が獲得しうる真理を「一般人」のもつ「予断」から切り離そうとする『規準』であるが、実際には、二重性をもっているのである。

このような観点から興味深いのは、後のプラグマティズム講義において、デュルケームが、集合表象としての真理という観点を明確に提示していることである。その議論によれば、「科学的真理」は「神話的真理」と同様に集合表象であり、それが真理としての意味をもつのは、まさにそれが共有されるという性質をもつことによってであるとされる。ここから帰結するのは、社会学が明らかにするとされる社会の「真理」それ自体が、科学が登場した近代において人々に共有されうるような一個の社会的事実だ、ということである。そのことは同時に、社会の客観的把握によって科学的真理を得ようとする社会学が、近代に特殊で、それ自体社会的な実践とみなされうることも意味している。ここでは、もはや社会学者と一般人のあいだに断絶はなく、社会学はむしろ、近代において社会の成員が社会の成員としてもちうる、真理に対する一つの態度と考えられることになる。

デュルケームは、たしかに『規準』において、客観的真理を捉える科学としての社会学を確立しようとした。しかし、以上の点を考慮すれば、デュルケームにとって社会学とは、真理に対するある特殊な態度のあり方を指すものでもあるとも言えよう。そして、デュルケーム自身が、社会学者に現れてくる社会的事実の不透明な性格を強調している点に鑑みれば、その態度とは、集合表象としての真理に、その不透明性を認識しつつ向き合う独特な実践的態度であるといえるのではないだろうか。ここには、社会の実証科学というだけにはとどまらない、デュルケーム社会学の一側面が見出されるように思われる。

再訪『社会学的方法の規準』――新訳上梓にあたって

菊谷和宏（一橋大学）

拙訳『社会学的方法の規準』（講談社学術文庫）上梓を間近に控え、訳語選択など翻訳作業の詳細を報告しつつ、「訳者解説」の当初原稿を元にして、この古典書を今日改めてひもとく意味を考察し、「社会」なるものの実在性（リアリティ）／現実性（テイ）について再考した。

イギリス元首相マーガレット・サッチャーの、個人のそれを肯定しつつ社会の存在を否定した有名な発言が端的に示すとおり、社会の実在は自明ではない。個人は否定し難く存在するとしても、その事実から直ちに社会が存在するとは言いえない。一体、社会学が対象としてもつとされる「社会」とは、どのようなリアリティをもつ、どのような「事実」なのか。

本書の意義は、まずもって、このとらえどころのない社会なるものを、独特の「客観的な(objectif)事実」として把持することによって、社会学という新しい学問の礎を築いた点にある。すなわち、「物としての社会的事実」なる概念を提示し、社会の客観的な実在性を主張したこと、この「事実としてのプロブレマティーク」の提起こそが、本書の数ある現代的意義の要だ。

しかし、客観的で実証的な近代社会学の成立を画する本書は、意外にも前時代的な社会有機体説を色濃く受け継いでいる。個人が社会を構築するのではなく、両者は表裏一体・不即不離のものと把握されている。そして、この一種形而上学的な社会観は、現代に生きる我々にも実は引き継がれている。

このことを翻訳作業に即して示せば、例えば、次のようになる。individu の語は必ずしも「個人」を指してはいない。それは「個別性」をも意味している。このことは、individu が、区分(division)という視角からとらえられた全体であって、あくまで「諸個」であるということを意味する。つまりここには、既にして、個人というものの本源的な社会性が現れている。

そして、諸個たる人間が現実に社会を有らしめるということは、他者を自分と同じ意味における人間であると対象化する(objectiver)ことであり、この意味においてこそ、「諸個人が共に生きる場」としての社会は、把握可能な一対象(objet)として我々に現れ、すなわち客観的な(objective)実在たりうる。かくして、本書が主張する社会的事実の客観性＝対象性(objectivité)の根拠は、究極的にはここに存することになる。それは実のところ日常的な実践そのものであり、我々が社会的存在として生きること＝社会的生を営むことと同義である。

したがって、サッチャーは、彼女自身の意図に反しつつ、いやむしろ反するがゆえに、正しい。社会は、常に練成中の「諸個（人）」として、「objective に」存在する。社会のリアリティが問われる現代にあって、本書の意義は、まさにここに、すなわち「個人たりうるかぎりでの社会／社会たりうるかぎりでの個人」という認識の「objective な」提示に存するのだ。

活動報告　※2018 年 1 月から 6 月末日まで（白ヌキは年度）

2017　A 班（起源解明チーム）2017 年度班別研究会

日　時：2018 年 1 月 8 日（月・祝）13:30～17:30

場　所：一橋大学　社会学研究科 社会学共同研究室会議室（国立市）

出席者：6 名

内　容：テーマ「『社会学的方法の規準』成立とその周辺」

太田健児「『社会学的方法の規準』成立以前――デュルケームの「社会」概念の出自とその基礎づけに使用されたエピステモロジー」

北垣　徹「『社会学的方法の規準』成立の周辺(1)――Nicolas Mariot, *Histoire d'un sacrifice: Robert, Alice et la guerre*, Seuil, 2017 から」

小関彩子「『社会学的方法の規準』成立の周辺(2)――認識を可能にする言語と認識を記述する言語：変化の主体としての個人と社会」

赤羽　悠「『社会学的方法の規準』成立の周辺(3)――デュルケーム社会学における真理と実践」

吉本惣一「『社会学的方法の規準』成立の周辺(4)――フランス経済学史の中のデュルケーム社会学」

菊谷和宏「『社会学的方法の規準』の成立――*Les Règles de la méthode sociologique* 新訳における訳語の変更に関して」

2018　D 班（社会学教育チーム）2018 年度第 1 回班別研究会

日　時：2018 年 4 月 14 日（土）・15 日（日）両日

場　所：文京学院大学　本郷キャンパス　（東京都文京区）

出席者：4 月 14 日：6 名　　4 月 15 日：7 名

内　容：＜4 月 14 日＞

梅村麦生「ドイツの社会学史テキストにおけるデュルケーム――ルネ・ケーニヒの場合」

川本彩花「第 90 回日本社会学会大会における報告のふりかえり」

＜4 月 15 日＞

横山寿世理「社会学教科書におけるデュルケームの歴史観」

山田陽子「自殺論の中のデュルケーム」

小川伸彦「最終報告論文『古典化現象とディシプリン――デュルケームとその著作をめぐって』（仮題）作成のために」

白鳥義彦「『社会学教科書の社会学』に向けて――フランス社会学初期の教科書研究を手がかりに」

2018　2018 年度第 1 回全体会議

日　時：2018 年 4 月 15 日（日）11:00～16:00

場　所：文京学院大学　本郷キャンパス　B 館 411 教室　（東京都文京区）

出席者：19 名

内　容：各班から、2017 年度の活動内容、これまで三箇年度の研究を通して見えてきた具体的な知見、最終年度の研究計画についての報告と、国際シンポジウムを振り返る研究会が行われました。

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第７回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号のように、デュルケームをめぐる言葉も取り上げることがあります。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.18●デュルケームのことば

古い神々は老い、あるいは死に、他の神々は生まれていない

<< Les anciens dieux vieillissent ou meurent, et d'autres ne sont pas nés. >>

【ミニ解説】

デュルケームはフランス第三共和制の申し子である。1881 年 6 月 16 日法(La Loi Ferry)で「公立小学校の無償化」、1882 年 3 月 28 日法(La Loi Ferry)で「就学義務と教育課程から宗教教育科目の排除」、1886 年 10 月 30 日法(La Loi Goblet)で「教職から聖職者の追放」が行われ「教育のライシテ」が実現した。次に 1901 年の結社法による修道会結成制限の合法化、1905 年の政教分離法に至り「国家のライシテ」が実現した。しかし、それぞれの立法過程は政争そのものであり、道徳的ヘゲモニーの争奪戦であった。C. ルヌヴィエ(Charles Renouvier,1815-1903)が命名した「二つのフランス」問題である。それほどライシテは第三共和制期の懸案事項であって、デュルケームその人もこの渦中にあった。それゆえデュルケームの『道徳教育論』(1902-1903,パリ第一大学での講義)はモラルサイエンスに基づくライックな道徳教育論(moral laïque)の金字塔として位置づけられる。しかし、上記三つの政教分離関連法以降、デュルケームの道徳教育論の講義までほぼ 20 年、さらに、著作刊行年は諸説あり、1922 年、1923 年、1925 年(太田が確認できたのはこの 1925 年版)とされ、この刊行時まで、デュルケームの道徳教育論は人口に膾炙していたわけでもなく、パリ第一大学の学徒たちに口頭伝承されたようなものであった。実際この間、「小粒な」道徳教育論が多数輩出していた。それらの中でデュルケームの道徳教育論は、宗教という衣を剥ぎ取り、宗教の内奥にある「道徳的実在」を探り当て、理性に準拠すると同時に経験主義との両立も目指され、日常の(世俗の)経験から裏付けられる意味づけや言語使用によって語られた稀有の存在であった。ライシテという特殊な文脈の中、ある意味制約された中での「規律の精神」「社会集団への愛着」「意思の自律」という道徳の三要素の提示は、倫理学上の「メタポジション」からの宗教的世界観の分析及び批判的検討から導出された「脱宗教としての道徳的実在」であった。当然これら三要素を徳目として解釈することはデュルケームを全く誤読することになる。

では、そのようなデュルケームの野望は達成されたのか？ はたまた彼は理論上の無神論者だったのか？ 教権主義・カトリックによる道徳教育支配は否定するものの、その結論は出にくい。

実際デュルケームはこの点を、理論においてではなく、時代に対する診断を直接語っている。「道徳的事実の決定」(1906 年)では「今日伝統的道徳は動揺し、その代役となる他のいかなるものも形作られていない。かつての義務は支配力を失い、私たちは新しい義務がいかなるものかを未だ明確に確信していない。…私たちは一つの危機の時代を経過している」。『宗教生活の原初形態』(1912 年)の結論部では「私たちは過渡期にあり、陳腐な道徳の段階を経過しつつある」。「宗教の未来」(1914

年)では「道徳の冬の時代である…」。以上のような時代診断が下されている。ここからは、ライシテというミッションを受けて立ち「神なき時代のモラルサイエンスの創始者」たらんとしたデュルケームが、「神に闘いを挑んで勝利できていない」ことを自ら吐露しているようにも解釈し得る。この辺の微妙な事情を端的に言い表しているのが『宗教生活の原初形態』における「古い神々は老い、あるいは死に、他の神々は生まれていない」という一句なのである。

（太田健児　記）

【キーワード】

Dieu , laïcité , la science morale

【出典】E.Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, [1912]1960 (Presses Universitaires de France 版 pp.610-611).

（邦訳）『宗教生活の原初形態』岩波書店、古野清人訳、1975 年、342 頁

【参考文献】

E.Durkheim, *L' éducation morale*, Presses Universitaires de France, [1925]1992, pp.15-105.

E.Durkheim, "Détermination du fait moral"(1906), dans *Sociologie et Philosophie*, Presses Universitaires de France, [1924]1996, p.100.

デュルケーム「宗教の未来」、J.C.フィユー(編)、佐々木交賢・中嶋明勲(訳)『社会科学と行動』恒星社厚生閣、1988 年、248-249 頁

太田健児『フランス第三共和制期の政教分離(ライシテ)とモラルサイエンス問題』科研費基盤研究(C)報告書［課題番号 23531019］、2014 年、全 110 頁

●ことばんごう no.19●ベルクソンのことば

そこで経験に訴えかけて、一つの心理的状態から後続の状態への移行は、常に何らかの単純な理由によって説明され、後者はいわば前者の呼びかけに従うものであることを証明するように、経験に求めることになる。（中略）しかし移行を説明するこの関係は、果たして移行の原因なのであろうか。

<< On s'adresse alors à l'expérience, et on lui demande de montrer que le passage d'un état psychologique au suivant s'explique toujours par quelque raison simple, le second obéissant en quelque sort à l'appel du premier. ...Mais cette relation, qui explique le passage, en est-elle la cause? >>

●ことばんごう no.20●デュケームのことば

因果法則は、他の自然の諸領域では検証済みなのであり、その支配権を物理-化学的世界から生物学的世界へ、さらに心理学的世界へと徐々に拡大してきたのであるから、社会的世界にも等しく妥当すると認められる。

<<Puisque la loi de causalité a été vérifiée dans les autres règnes de la nature, que, progressivement, elle a étendu son empire du monde physico-chimique au monde biologique, de celui-ci au monde psychologique, on est en droit d'admettre qu'elle est également vrai du monde social ; >>

【ミニ解説】

ベルクソンとデュルケム、周知のように 1 学年違いのこの二人は、高等師範学校で同じく観念論的な哲学の風潮に辟易し、「実証的」に明らかにされた知を探求しようと志していた。1881、82 年に相次いでアグレガシオンを取得してから数年、1889 年にはベルクソンが『意識に直接与えられたものについての試論』で博士号を、次いで 1893 年にはデュルケムが『社会分業論』で博士号を取得して、学界にデビューする。デュルケムが自らの方法論を宣言した『社会学的方法の規準』刊行が 1895 年である。

両者はともに、観念的に要請された永遠不変の原理を分析するのではなく、現実の事象そのものに即して人間存在を理解しようとしていた。しかしながら、何が真に「実証的」であるのか、経験によって実証される、その「経験」とは何か、という点で、二人は大きく袂を分かつこととなる。

ベルクソンは、「意識に直接与えられて」いるがままの具体的な事象を、あるがままに記述することを標榜する。その結果、物理的決定論は認めた上で、物質的状態が我々の心理状態を決定することも、意識状態間における心理的決定論も、我々の自我の複雑で繊細で自由なありようを描き出してはいない、粗雑で人為的な一般化にすぎないと考える。これに対して、デュルケムは先行する諸科学において因果律が経験的に有効であったことから、これを人間にも適用しようとする。

両者の方法論的対立は、科学・技術が力を持つようになった当時の社会において、自然科学の方法を人間・社会に敷衍することの可能性、ひいては、そもそも学問的方法とは何なのかという問いを巡る、等しく切実で根源的な答えの試みなのである。

（小関彩子　記）

【キーワード】
決定論、因果律、実証性、経験

No.19
【出典】Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, [1889]1993 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.117)
（邦訳）『意識に直接与えられたものについての試論――時間と自由』ちくま学芸文庫、合田正人・平井靖史訳、2002 年、175-176 頁
No.20
【出典】Émile Durkheim, *Les Règles de la méthode sociologique*, [1895]1997 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 pp.139-140)
（邦訳）『社会学的方法の規準』講談社学術文庫、菊谷和宏訳、2018 年、231 頁

●ことばんごう no.21●ベルクソンのことば

道徳的な圧力と渇望の決定的説明が、単なる事実と考えられた社会生活のうちに見いだされる、と信ずるところに誤りがあろう。〔……〕だが、社会が存在するためには、まず、個人が生まれながらの性向全体を持ち寄る、ということがなければならない。それゆえ、社会そのものは説明されない。したがって、社会的獲得物の下を探り、生命にまで達することが必要である。人間の社会は、人間という種と同様に、生命の表現にほかならない。

<< L'erreur serait de croire que pression et aspiration morales trouvent leur explication définitive dans la vie sociale considérée comme un simple fait. [...] Mais d'abord, pour que la société existe, il faut que l'individu apporte tout un ensemble de dispositions innées ; la société ne s'explique donc pas elle-même ; on doit par conséquent chercher au-dessous des acquisitions sociales, arriver à la vie, dont les sociétés humaines ne sont, comme l'espèce humaine d'ailleurs, que des manifestations. >>

【ミニ解説】

ベルクソンの晩年の主著『道徳と宗教の二源泉』において、デュルケーム批判が行われる一節である。同時代の諸学との批判的対話を通して思想を形成してきたベルクソンは、同著では、主要な批判対象としてデュルケーム社会学を念頭に置いている。

社会的事実に照準を定めるデュルケーム社会学に対して、ベルクソンは社会的事実そのものを成り立たせている「生」の次元からの考察が必要だと主張する。ただし、ここで言われる「生」に立つ視座とは、実証科学の一部門としての生物学というよりも――ちょうど、このすぐ後の箇所で説かれるように――「非常に包括的な意味での生物学」、すなわち、ベルクソンによる生命の哲学を意味している。それゆえ、ここに見られるベルクソンによるデュルケーム批判において賭けられているのは、哲学と社会学のあいだの優位性をめぐる問いでもあるのだ。

ベルクソンは『二源泉』において、一方ではデュルケームの説くような義務を根幹に据える社会概念を「閉じた社会」と重ねあわせたうえで、「生」の観点からの再定義を試みる。また、他方ではデュルケーム社会学が描きえなかった「開かれた社会」の可能性を見出そうとする。『二源泉』におけるこうした議論は、ベルクソンの依拠する生命の哲学という視座によってこそ可能となるのである。

もちろん、ベルクソンによるデュルケーム批判は、デュルケーム読解の当否そのものも含めた綿密な検討が必要である。あるいは――とりわけ『宗教的生活の基本形態』を踏まえた――デュルケームの側からの反論も大いにありうるだろう。だが、いずれにせよ、ベルクソンによるデュルケーム批判には、この二人の思想家それぞれの豊かさを際立たせるような喚起力が宿されているように思われる。

（笠木丈　記）

【キーワード】 ベルクソン、社会的事実、生

【出典】*Les deux sources de la morale et de la religion,* 1932, (Presses Universitaires de France 版 pp.102-103)

（邦訳）『道徳と宗教の二源泉』（ベルグソン全集; 6）、中村雄二郎訳、1965 年、119-120 頁

2017 年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●全体

本科研主催の国際シンポジウムを開催しました（詳細は本誌前号を参照）。

＊　「社会の境界と社会学の境界――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」
（Limites de la société / Frontières de la sociologie. Quels renouvellements pour la discipline sociologique?）2017.9.18　於日仏会館
また、このシンポジウムでは下記の報告が行われました。
・岡崎宏樹「非合理性と流動性――社会学の境界で考える」（Irrationalité et liquidité.）
・荻野昌弘「不可視の他者――社会学的伝統の埒外にあるもの」
（La présence invisible d'autrui : ce qui échappe au cadre classique de la sociologie.）

＊　「古典から現代へ――社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」
（Lire l'actualité à travers les œuvres classiques. Quels renouvellements pour la discipline sociologique?）
2017.9.21　於コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）
また、このシンポジウムでは下記の報告が行われました。
・池田祥英「「社会学」の境界画定――エスピナス、タルドからデュルケムへ」
（La démarcation de la « sociologie » : d'Espinas et Tarde à Durkheim.）
・江頭大蔵「個人と社会の異質性とディシプリンの変容」
（Heterogeneity between the Individual and the Social and Transformation of Discipline）
・中倉智徳「デュルケーム受容の国際比較――東アジアを中心として」
（The Reception of Durkheimian Sociology in East Asia.）
・横山寿世理「デュルケム社会学の受け継がれ方――教科書分析を通じて」
（Comment hériter la théorie durkheimienne? : une analyse des manuels de sociologie.）

＊　ラウンド・テーブル「イヴ・デロワ氏を囲んで」2017.9.22　於奈良女子大学

●論文・図書

＊　江頭大蔵、2018、「個人と社会の異質性とディシプリンの変容」『広島法学』41(3): 256-274
＊　岡崎宏樹、2017、「知と権威／権力」日本社会学会社会学理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版: 564-565
＊　小川伸彦、2017、「内側と外側の関係を探求する教科としての公民科――社会学との関連性をめぐって」『教育システム研究』（奈良女子大学教育システム研究開発センター）別冊: 57-67
＊　小川伸彦、2018、「論文作成のエッセンス（上）――社会学教育の“痒いところ”に手を伸ばす」『奈良女子大学社会学教育研究論集』2: 12-16

＊　Ozeki, Ayako、2017、“L'individualisme est-il un égoïsme? : L'énergie vivante s'incarnant dans la personnalité chez Bergson et Durkheim”, Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura, *Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*, GEORG OLMS VERLAG: 247-266

＊　白鳥義彦、2017、「機械的連帯から有機的連帯へ」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力――最重要概念・命題集 Sociology : Concepts and Propositions』有斐閣: 218-221

＊　白鳥義彦、2018、「近代化・産業化と教育社会学」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版: 44-47

＊　白鳥義彦、2018、「学問の制度化と大学におけるデュルケームの講座の位置――前任者たちおよび後任者たちの検討を通じて」『紀要』（神戸大学文学部）45: 65-76

＊　林大造、2018、「家庭教育支援法案の問題点と課題」『こどもの権利研究』29: 142-149

＊　三上剛史、2018、「「贈る」行為の両義性――『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマンを経由して」『追手門学院大学社会学部紀要』12: 1-18

＊　村田賀依子、2017、「ハビトゥス・状況・行為――「ポテンシャリティ」に着目してブルデューを読む」『日仏社会学会年報』28: 35-54

＊　横山寿世理、2017、「アルヴァックスに対するデュルケームの影響」『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』27(1): 16-21

＊　横山寿世理、2018 年、“How Can the Heritage and Legacy of Durkheimian Sociology Be Revived? : An Analysis of Sociological Textbooks”, 『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』27(2): 40-44

●国内学会・研究会

＊　梅村麦生「ドイツの大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム――シラバスと教科書から」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第 4 回全体研究会シンポジウム「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」、2017.4.15　於文京学院大学）

＊　江頭大蔵「個人と社会の相互浸透性と社会の非個人性――デュルケームの視点から」（西日本社会学会第 75 回大会自由報告、2017.5.14　於松山大学）

＊　小川伸彦「索引の中のデュルケーム――装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第 4 回全体研究会シンポジウム「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」、2017.4.15　於文京学院大学）

＊　川本彩花「知識社会学的メディアとしての社会学教科書――ディシプリン再生と社会学教育②」（第 90 回日本社会学会大会一般研究報告、2017.11.4　於東京大学）

2017 年度成果報告

＊　川本彩花「日本の社会学教科書における理論・学説の教授法」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第 4 回全体研究会シンポジウム「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」、2017.4.15　於文京学院大学）

＊　白鳥義彦「日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケーム」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第 4 回全体研究会シンポジウム「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」、2017.4.15 於文京学院大学）

＊　林大造「被災者の生活再建格差によりそった関係性維持のためのボランティア――神戸大学東北ボランティアバスの活動」（日本心理学会第 81 回大会公開シンポジウム「災害復興と心理学」、2017.9.21 於久留米シティプラザ）

＊　林大造「文脈と依存から贈与を捉え返す――アドヴォカシーと連帯の視角から」（2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28　於一橋大学）

＊　藤吉圭二「贈与の葛藤を調停する――義務的であり自発的であることの意味」（2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28　於一橋大学）

＊　古市太郎「「制度の狭間」で考える――MAUSS の「贈与論」解釈を通じて」（2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28　於一橋大学）

＊　横山寿世理「デュルケーム社会学の語られ方――日本の社会学教科書分析を通して」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」第 4 回全体研究会シンポジウム「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派――日仏英米独の事例から」、2017.4.15　於文京学院大学）

＊　横山寿世理・梅村麦生「社会学教科書におけるデュルケム社会学の伝えられ方――ディシプリン再生と社会学教育①」（第 90 回日本社会学会大会一般研究報告、2017.11.4　於東京大学）

●2016 年度以前の成果報告（未掲載分）

＊　江頭大蔵「デュルケーム社会学理論の継承とディシプリンの変容」（西日本社会学会第 74 回大会自由報告、2016. 5.21　於保健医療経営大学）

＊　日髙謙一・岡崎宏樹・清原桂子、2017、「地域連携型アクティブラーニングの研究(2)――《神河プロジェクト 2016》を事例として」『現代社会研究』（神戸学院大学現代社会学会）3: 21-46

＊　横井敏秀、2017、「トルコ中等教育における社会学の制度化とデュルケーミアン・ズィヤ-ギョカルプ」『追手門学院大学社会学部紀要；Bulletin of the Faculty of Sociology, Otemon Gakuin University』11: 81-103

＊　吉本惣一、2016、『蘇る『社会分業論』――デュルケームの「経済学」』創風社

お知らせ・今後の活動

●新刊案内

デュルケームの『社会学的方法の規準』の新訳（菊谷和宏訳、2018 年、講談社学術文庫）が、6 月 11 日に発行されました（本誌 3～8 頁も参照）。

●国際シンポジウム

今年度末に本科研主催の国際シンポジウムを開催予定です。詳細が決定しましたら、本科研のウェブサイトに掲載いたします。

本科研ウェブサイト：http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

クロニクル　2018 年 1 月～2018 年 7 月

- 1 月 8 日（月・祝）　起源解明班 2017 年度班別研究会（国立市）参加者 6 名
- 1 月 11 日（木）　部内報第 32 号配信
- 1 月 15 日（月）　ニュースレター第 7 号発行
- 2 月 1 日（木）　部内報第 33 号配信
- 3 月 1 日（木）　部内報第 34 号配信
- 4 月 5 日（木）　部内報第 35 号配信
- 4 月 14 日（土）　社会学教育班 2018 年度第 1 回班別研究会・前半（東京都文京区）参加者 6 名
- 4 月 14 日（土）　第 5 回全体研究会（東京都文京区）参加者 29 名
- 4 月 15 日（日）　2018 年度第 1 回全体会議（東京都文京区）参加者 19 名
- 4 月 15 日（日）　社会学教育班 2018 年度第 1 回班別研究会・後半（東京都文京区）参加者 7 名
- 5 月 17 日（木）　部内報第 36 号配信
- 6 月 7 日（木）　部内報第 37 号配信
- 7 月 5 日（木）　部内報第 38 号配信
- 7 月 7 日（土）　社会学教育班 2018 年度第 2 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名

編集後記

「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第 8 号をお届けします。本科研費研究も最終年度となりました。今号では、2017 年度と今年 6 月までの研究活動の報告や、2018 年度の研究計画を掲載しました。次号は、2019 年 3 月発行予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第 8 号

発行日　：2018 年 7 月 15 日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局
〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

基盤研究（B）

社会学のディシプリン再生とデュルケーム

目次

●本科研の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
●研究報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
●本科研主催　国際シンポジウムの報告・・・・・・・・・・・・ 7
●活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
●連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 8 回・・・・・・・ 13
●2018 年度成果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
●成果報告書　目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
●クロニクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

News Letter
vol.9
2019.3

9

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名　社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として
●研究代表者　中島道男（奈良女子大学）
●研究分担者　15 名　　●研究協力者　15 名
●研究種目と期間　基盤研究（B）（15H03409）
平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである（各班の 4 年間の研究概要は p.3 以降を参照）。

本科研の概要

●４つの班とメンバー

Ａ班（起源解明チーム）

【研究分担者】太田健児［班長］（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）
【研究協力者】赤羽悠（早稲田大学非常勤講師）／池田祥英（岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授）／荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

Ｂ班（解釈史検討チーム）

【研究分担者】岡崎宏樹［班長］（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学研究院人文科学系教授）［研究代表者］／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）
【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（東京工学院専門学校公務員科・航空学科専任教員）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター長）／村田賀依子（奈良女子大学非常勤講師）／吉本惣一（横浜国立大学非常勤講師）

Ｃ班（国際比較チーム）

【研究分担者】藤吉圭二［班長］（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（千葉商科大学人間社会学部専任講師）／林大造（追手門学院大学社会学部准教授）
【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

Ｄ班（社会学教育チーム）

【研究分担者】白鳥義彦［班長］（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学研究院人文科学系教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）
【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／梅村麦生（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学））／川本彩花（関西大学非常勤講師）

研究報告

◆全体

本科研は本年度 3 月末をもって終了します。4 つの班の研究成果は以下に記しました。各研究メンバーが執筆した論文は、出版助成に応募のうえ刊行する予定です。成果報告書の目次は 17 頁をご覧ください。国際シンポジウムも、2017 年度に東京と京都、2018 年度には東京と奈良で、計 4 回開催しました。

また、教育的な媒体として、デュルケームの命題を紹介する『デュルケームの論点』を 2019 年度中にハーベスト社より出版する予定です。

なお 4 年間の詳しい歩みは本科研のニュースレターvol.1～8 までをご覧ください。

◇A 班（起源解明チーム）

＜2018 年度の研究報告＞

当初の A 班の目標「社会学的方法の規準成立とその周辺の解明」は最終年度に至り大きく前進した。待望の『社会学的方法の規準』の新訳(菊谷和宏訳)など各研究は順調に遂行され、2018 年 4 月のデュルケーム研究会のミニシンポジウムでその成果の一端を報告した。これらを最終報告書論文に組み込むため、メンバー内での連絡や情報交換が必須であり、これを緊密に行うことをもって 2018 年度の A 班研究会に代替することにした。

＜4 年間の研究報告＞

「社会学的方法の規準成立とその周辺の解明」という A 班のテーマ設定の下、この 4 年間 A 班研究会では『社会学的方法の規準』の翻訳作業状況の報告が逐次なされ、それを軸に各メンバーの研究をそれに重ね合わせ議論が展開できた点は非常に有意義であった。一つ一つの訳語を吟味しながらこれまでの邦訳を凌駕する日本語訳完成への訳者の努力に他のメンバーの研究が鼓舞されたといっても過言ではない。A 班としては、デュルケームのテキストの内在的理解とコンテキストの理解、フランスにおけるデュルケーム研究の最前線の掌握、他分野(哲学、経済学)との接点の解明などを 4 年間継続して行ってきた。具体的にはテキスト理解の前提となるコンテキスト理解の問題として、フランス第三共和制期の独自性、特にライシテ(laïcité)との絡みからデュルケームの「社会」概念の出自を探った研究及び実証概念とエピステモロジーとの相関問題の研究(太田)、哲学分野との接点としてデュルケーム以前の思想家でフランスのニーチェともいえる G.M.ギュイヨー(Jean-Marie Guyau,1854-1888)あるいは A.フイエ(Alfred Fouillée,1838-1912)に焦点を当てた研究(北垣)、ベルクソンとデュルケームとの共通点の方に着目し、そこから逆照射して言語問題を考察した研究(小関)、タルド像の厳密な再構成から改めてデュルケームと比較した研究(池田)、デュルケームの政治哲学とそこから「実践」の問題を剔抉した研究(赤羽)、フランス経済史からみたデュルケーム社会学研究(吉本)、以上の各研究が遂行された。ちなみに G.M.ギュイヨーの思想はライックな道徳の構築の際、プロテスタントでありながら極限まで自由を尊重し、ライシテによる文教政策の推進者であった F.ビュイッソン(Ferdinand Buisson,1841-1932)に大きな影響を

与えていたことが最近判明した。またベルクソン研究、哲学研究の立場から、デュルケーム社会学研究のあり方に対して、その結果としての生産物(社会学理論)に焦点を当てる研究以外に、その結果を生産する手前にあるデュルケームの発想や仕掛けの方を研究する重要性が問題提起された点も付記しておきたい。

◇B班（解釈史検討チーム）

＜2018 年度の研究報告＞

日本と欧米の学説研究の差異を検討し、4 年間の研究を総括しつつ、各メンバーがディシプリンの変容過程に関する研究成果を報告書にまとめる作業に取り組んだ。中島道男が『丸山眞男――課題としての「近代」』を発表した。また、溝口大助が論文「沸騰、贖罪、死――デュルケム学派宗教社会学における『聖なるもの』」を発表。国際シンポジウム「メディアと公共空間――メディアは誰のものか」（2/27：日仏会館）では、金瑛が「『ポスト真実』の時代における『記憶』と『記録』の関係」と題する報告をおこなった。

＜4 年間の研究報告＞

2015 年度と 2016 年度は、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。重点を置いたのは、デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、〈社会の生成〉の理論化に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、批判的継承の中で失われたものや非明示的に継承されたものに着目し、後代の研究をとらえかえすことである。この作業を通じ社会学の固有性を次のように命題化した。(1)「社会学は非合理的なものと合理的なものの関係を探求する」、(2)「社会学は抽象的な人間理解からはこぼれ落ちる人間や現象の具体性・具象性に注目する」、(3)「社会学は理解不可能に見える他者の理解を志向する」。論文としては中島道男「デュルケムの『国家 - 中間集団 - 個人』プロブレマティーク」（2016）などが発表された。

2017 年度は研究成果の発信に力を入れた。本科研主催の国際シンポジウムでは、岡崎宏樹が「非合理性と流動性――社会学の境界で考える」（9/18：日仏会館）、江頭大蔵が「個人と社会の相互浸透性と異質性」（9/21：キャンパスプラザ京都）を報告した。班長が企画した日仏社会学会大会シンポジウム（10/28：一橋大学）「マルセル・モースと現代」では、古市太郎が「『制度の狭間』で考える――MAUSS の『贈与論』解釈を通じて」を報告した（次年度に論文として発表）。また、三上剛史が「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話」（2017）に続き、「『贈る』行為の両義性――『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマンを経由して」（2018）を発表。村田賀依子「ハビトゥス・状況・行為――『ポテンシャリティ』に着目してブルデューを読む」（2017）、江頭大蔵「個人と社会の異質性とディシプリン変容」（2018）も発表された。最終年度の 2018 年度は、上記のとおり 4 年間の研究を総括しつつ、各メンバーが研究成果を報告書にまとめる作業に取り組んだ。

研究報告

◇C班（国際比較チーム）

＜2018 年度の研究報告＞

これまでの調査研究の成果を研究班メンバーそれぞれで報告書原稿等にまとめた。また、2 月に開催された国際シンポジウムでの発表を行なった。

＜4 年間の研究報告＞

本研究班は研究期間中に、それぞれ調査チームを組んで韓国、スペインにおいて聴き取りを含む現地調査を実施した。また国内でのインタビュー、外国文献などを通じて台湾、トルコという非ヨーロッパ語圏においてデュルケームをはじめとする古典的社会学がどのように受容されているかについて調査・研究を進めた。

スペイン調査においてはバルセロナの複数の大学で聴取りと意見交換を実施した。デュルケームに限らず古典的な社会学は現在の基本的な文献として尊重されているが、教育とりわけ初学者向けの教育にあたっては古典を学ぶというよりも現代社会を考えるうえでどのように「使える」のかを中心に触れられることが多いとのことであった。

韓国調査においてはソウルの大学でデュルケーム理論を中心に研究する研究者の協力を得て聴取りと意見交換を実施した。デュルケームの理論は現代社会の問題を解明するツールになりうるとの所見を得た。

台湾については来日中の台湾人研究者の協力を得て聴取り調査を実施した。台湾ではアメリカに留学して帰国した研究者を中心にして社会学の研究が始まったという事情もあり、どちらかといえば 20 世紀のアメリカ社会学がベースとなって今は台湾社会を対象とする研究が重視されているとのことであった。

トルコについては文献研究を通じてトルコの社会学教育においてデュルケミアン的な発想がどのように生かされたかを中心に検討を進めた。

◇D班（社会学教育チーム）

＜2018 年度の研究報告＞

D 班（社会学教育チーム）は、年 3 回（7 月・9 月・11 月）の班別研究会を定期的に開催しながら、日本、フランス、英米、ドイツ等における社会学テキストやシラバス、また学術雑誌に掲載されたデュルケームに関わる論文の検討等を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程、社会学の理論の背景をなす社会学者の伝記的な側面についての記述のあり方などに着目しながら研究を進めてきた。また、本科研全体のプロジェクトである『デュルケーム命題集』（仮題）の刊行の準備についても、本班から編集のコアメンバーを出し、また班別研究会でも編集に関わる議論を行うことによって、これに積極的に協力した。国際シンポジウム開催に向けた準備の中心的な役割も担った。

研究報告

＜4 年間の研究報告＞

D 班（社会学教育チーム）は、毎年およそ 3～4 回程度の班別研究会を定期的に開催しながら、日本、フランス、英米、ドイツ等における社会学テキストやシラバス、また学術雑誌に掲載されたデュルケームに関わる論文の検討等を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程、社会学の理論の背景をなす社会学者の伝記的な側面についての記述のあり方などに着目しながら研究を進めてきた。研究の成果は、学術論文、日本社会学会をはじめとする諸学会での報告、本科研全体研究会での報告、D 班班別研究会などを通じて積極的に発表してきた。

4 年間の研究を通じて、最終的に、以下のようないくつかの点を明らかにすることができた。まず、教科書というものはそもそも、通常は学問分野の主要な刊行物に含まれるとは見なされにくいが、しかし、すべての学生が社会学に関して有するべき基礎的な知識と見なされるもの、同時代の普通の社会学者の間で当然の事柄と見なされるもの、どのような著作や著者が例示的あるいは重要なものであると扱われているか、といったことを示すものとしてとらえることができる。それゆえ、ディシプリンに関する考察を教科書に着目して行うことの正当性が主張される。次に、日本のいくつかの教科書の検討を通じて、没後百年を迎えたデュルケームの社会学が、「連帯」「自殺」などの具体的な概念とともに、他の学問とは異なるオリジナリティを問いながら継承されているということがあらためて確認された。また、フランスと日本との教科書の比較によって、これら両国におけるデュルケームの取り扱われ方には、それほど大きな違いはないことも明らかにされた。さらに、ドイツの社会学史と社会学理論の教科書の中では、デュルケームがフランスにおける社会学の制度的確立に寄与したこと、社会的事実に関する社会学の方法論的なカノンと、社会統合の問題という今日に至る問いを提起し、社会理論の構成要素として分業の型を位置づけたこと、近代的な道徳学および道徳教育の基礎に社会学を据えたこと、などが示されていた。こうした視点も、日仏の教科書と通じるものである。さらに、社会学の理論・学説をその内容のみならず、それを主張した人の伝記的背景と結びつけて学ぶ／教えることは、「その理論・学説はどのような内容か」を理解することに加えて、「なぜその理論・学説があるのか」という理論・学説の存在に関する理解を深める行為と考えられる。理論・学説そのものの理解に加えて、こうした伝記的背景にも考慮することは、社会学理論・学説の教授法の有効な手がかりのひとつになると考えられる。また、学術雑誌でのデュルケームの扱われ方の検討を通じて、デュルケーム社会学の「古典化」のプロセスの一端についても明らかにすることができた。

本科研主催　国際シンポジウムの報告

2018

2019 年 2 月・3 月に、フランスより社会科学高等研究院（EHESS）教授シリル・ルミュー氏を招き、本科研主催の国際シンポジウムとラウンド・テーブルを開催しました。シリル・ルミュー氏の紹介と、シンポジウムのプログラムなどを掲載します。

●シリル・ルミュー氏の紹介

シリル・ルミュー氏は社会学者で、社会科学高等研究院（EHESS-パリ）の教授であり、「反省性に関する学際研究室：ヤン・トマ文庫」（Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT)）の所長をつとめている。研究の第一の側面は、メディアと公共空間の社会学を対象としたものである。この分野において氏はとりわけ、『悪い報道』（*Mauvaise presse* (2000)）、『耐スキャンダル性』（D・ド・ブリックとの共著）*A l'épreuve du scandale* (avec D. de Blic, 2005) 、『ジャーナリスト的主観性』*La subjectivité journalistique* (2010)を刊行している。研究の第二の側面は、社会学理論に関わるものである。この分野において氏は、プラグマティズムの伝統に関心を寄せ（『プラグマティック社会学』(*La sociologie pragmatique*, 2018)）、これをデュルケーム主義との対話の中に招き入れようと試みている（『義務と恩寵』(*Le Devoir et la grâce*, 2009)）。氏はまた、社会学と政治との関係（『社会主義と社会学』B・カルサンティとの共著(*Socialisme et sociologie*, avec B. Karsenti, 2017)）や、社会科学の歴史（『社会科学のために』編著(*Pour les sciences sociales*, dir., 2017)）、その方法論（『社会科学を行う――批判する』P・アーグとの共著(*Faire des sciences sociales : critiquer*, avec P. Haag, 2012)）、さらに一般読者に対するその普及（『現場の社会学』(*La sociologie sur le vif*, 2010)）にも関心を寄せている。

Cyril Lemieux est sociologue, directeur d'études à l'Ecole des hautes études en sciences sociales (EHESS - Paris) et directeur du Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT). Un premier volet de ses recherches est consacré à la sociologie des médias et de l'espace public. Dans ce domaine, il a notamment publié *Mauvaise presse* (2000), *A l'épreuve du scandale* (avec D. de Blic, 2005) et *La subjectivité journalistique* (2010). Un second volet de son travail concerne la théorie sociologique. Dans ce domaine, il s'est intéressé à la tradition pragmatique (*La sociologie pragmatique*, 2018) en essayant de la faire entrer en dialogue avec le durkheimisme (*Le Devoir et la grâce*, 2009). Il s'intéresse également aux rapports entre sociologie et politique (*Socialisme et sociologie*, avec B. Karsenti, 2017) ainsi qu'à l'histoire des sciences sociales (*Pour les sciences sociales*, dir., 2017), à leur méthodologie (*Faire des sciences sociales : critiquer*, avec P. Haag, 2012) et à leur vulgarisation auprès du grand public (*La sociologie sur le vif*, 2010).

国際シンポジウムの報告

●東京会場

メディアと公共空間：メディアは誰のものか
Medias et espace public : à qui appartiennent les medias ?

誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：日仏会館・フランス国立日本研究所

＊日　　時：2019 年 2 月 27 日（水）13:30～18:00
＊場　　所：日仏会館　１階ホール　Maison franco-japonaise, Auditorium
＊参加者数：６６名
＊プログラム

13:30 - 13:40　1. 趣旨説明　Présentation du colloque

13:40 - 15:40　2. 講　演　conférence
Cyril LEMIEUX (LIER-FYT / EHESS-Paris)　シリル・ルミュー
Chasse aux fake news: une panique morale?
フェイクニュース狩り：道徳的パニック？

15:40 - 15:50　休憩　Pause

15:50 - 16:50　3. 報　告　Intervention
藤吉圭二（追手門学院大学）FUJIYOSHI Keiji (Otemon Gakuin University)
「誰もが情報発信できる時代」に発信されないもの
What remains unshared in the age when anyone can be source of information
金瑛（関西大学）KIN Ei (Kansai University)
「ポスト真実」の時代における「記憶」と「記録」の関係
Relations entre « mémoire » et « enregistrement » à l'âge de « post-vérité »

16:50 - 17:10　4. コメント Discussion　：シリル・ルミュー　Cyril LEMIEUX

17:10 - 18:00　5. 全体討論　Discussion générale

国際シンポジウムの報告

●奈良会場

デュルケームとタルド：その現代的意義
Durkheim et Tarde : leurs significations actuelles

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケームとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：奈良女子大学社会学研究会

＊日　　時：2019 年 3 月 4 日（月）13:30～18:00
＊場　　所：奈良女子大学　生環系 E 棟 108 教室
＊参加者数：２３名
＊プログラム

13:30 - 13:40　1. 趣旨説明　Présentation du colloque
13:40 - 15:40　2. 講　演　conférence
Cyril LEMIEUX (LIER-FYT / EHESS-Paris)　シリル・ルミュー
La conception durkheimienne du normal et du pathologique et ses conséquences politiques
正常と病理のデュルケーム的概念とその政治的帰結
15:40 - 15:50　休憩　Pause
15:50 - 16:50　3. 報　告　Intervention
赤羽悠（早稲田大学 / LIER-FYT）AKABA Yu (Université de Waseda / LIER-FYT)
神話としての民主主義：デュルケームにおける政治と人類学
La démocratie en tant que mythe : la politique et l'anthropologie chez Durkheim
笠木丈（社会科学高等研究院 EHESS 博士課程）　KASAGI Jo (doctorant à l' EHESS)
ガブリエル・タルドと社会的無意識
Gabriel Tarde et l'inconscient social
16:50 - 17:10　4. コメント Discussion　：シリル・ルミュー　Cyril LEMIEUX
17:10 - 18:00　5. 全体討論　Discussion générale

ラウンド・テーブル「シリル・ルミュー氏を囲んで」

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、デュルケーム／デュルケーム学派研究会
共催：奈良女子大学社会学研究会

＊日　　時：2019 年 3 月 5 日（火）10:00～13:00
＊場　　所：奈良女子大学　文学系 N 棟 339 教室
＊参加者数：１２名
＊話題提供：シリル・ルミュー「フランスにおける社会学の展開」L'évolution sociologique en France
フランス社会学の動向をテーマに、情報交換をおこなった。

国際シンポジウムの報告

＊国際シンポジウム　ちらし（表）

メディアと公共空間
メディアは誰のものか

日時：2019年2月27日（水）
13：30～18：00

場所：日仏会館　1階ホール

※事前申込必要／詳しくは裏面をご覧ください

誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

Medias et espace public :
à qui appartiennent les medias ?

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
――デュルケーム社会学を事例として」（15H03409）
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、
デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：日仏会館・フランス国立日本研究所

デュルケームとタルド
その現代的意義

Durkheim et Tarde :
leurs significations actuelles

日時：2019年3月4日（月）
13：30～18：00

場所：奈良女子大学
生環系E棟108教室

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケームとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

※　3月5日（火）　ラウンドテーブルも開催

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
――デュルケーム社会学を事例として」（15H03409）
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、
デュルケーム/デュルケーム学派研究会
共催：奈良女子大学社会学研究会

国際シンポジウムの報告

＊国際シンポジウム　ちらし（裏）

国際シンポジウム Colloque international

2月27日（水）

メディアと公共空間：メディアは誰のものか

Medias et espace public : à qui appartiennent les medias ?

参加無料 要オンライン申込 Inscription

13：30〜18：00　日仏会館 1階ホール Maison franco-japonaise, Auditorium

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25
JR山手線：恵比寿駅東口徒歩10分　東京メトロ日比谷線：恵比寿駅1番出口徒歩12分

言語：日本語・フランス語・英語（講演については逐次通訳あり）

日仏会館・フランス国立日本研究所Web siteより参加申込みをお願いします
https://www.mfj.gr.jp/index_ja.php

参加申し込みはこちら→
または「メディアと公共空間：メディアは誰のものか」で検索

誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

1．趣旨説明 présentation du colloque（13:30〜13:40）

2．講演 conférence（13:40〜15:40）

シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX　（社会科学高等研究院EHESS）
フェイクニュース狩り：道徳的パニック？
Chasse aux fake news: une panique morale?

（休憩　15 :40〜15 :50）

3．報告 interventions（15:50〜16 :50）

藤吉圭二 FUJIYOSHI Keiji　（追手門学院大学）
「誰もが情報発信できる時代」に発信されないもの
What remains unshared in the age when anyone can be source of information

金瑛 KIN Ei　（関西大学）
「ポスト真実」の時代における「記憶」と「記録」の関係
Relations entre « mémoire » et « enregistrement » à l'âge de « post-vérité »

4．コメント discussion（16:50〜17:10）　シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX

5．全体討論 discussion générale（17:10〜18 :00）

シリル・ルミュー　Cyril LEMIEUX

フランスの社会学者で、EHESS（社会科学高等研究院）教授。Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT)（反省性に関する学際研究室：ヤン・トマ文庫）の所長でもある。
研究テーマはメディアと公共空間の社会学および社会学理論。
主な著作は以下の通り。

＜単著＞
Mauvaise presse（『悪い報道』）2000年
Le Devoir et la grâce（『義務と恩寵』）2009年
La subjectivité journalistique（『ジャーナリスト的主観性』）2010年
La sociologie sur le vif（『現場の社会学』）2010年
La sociologie pragmatique（『プラグマティック社会学』）2018年

＜編著＞
Pour les sciences sociales（『社会科学のために』）2017年

＜共著＞
A l'épreuve du scandale（『耐スキャンダル性』），（D. de Blic との共著）2005年
Faire des sciences sociales : critiquer（『社会科学を行う―批判する』），（P. Haag との共著）2012年
Socialisme et sociologie（『社会主義と社会学』），（B. Karsenti との共著）2017年

国際シンポジウム Colloque international

3月4日（月）

デュルケームとタルド：その現代的意義

Durkheim et Tarde : leurs significations actuelles

参加無料 申込不要

13：30〜18：00　奈良女子大学　生環系E棟108教室
〒630-8506 奈良市北魚屋西町

言語：日本語・フランス語（講演については逐次通訳あり）

1．趣旨説明 présentation du colloque（13:30〜13:40）

2．講演 conférence（13:40〜15:40）

シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX　（社会科学高等研究院EHESS）
正常と病理のデュルケーム的概念とその政治的帰結
La conception durkheimienne du normal et du pathologique et ses conséquences politiques

（休憩　15 :40〜15 :50）

3．報告 interventions（15:50〜16 :50）

赤羽悠 AKABA Yu　（早稲田大学）
神話としての民主主義：デュルケームにおける政治と人類学
La démocratie en tant que mythe : la politique et l'anthropologie chez Durkheim

笠木丈 KASAGI Jo　（社会科学高等研究院EHESS博士課程）
ガブリエル・タルドと社会的無意識
Gabriel Tarde et l'inconscient social

4．コメント discussion（16:50〜17:10）　シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX

5．全体討論 discussion générale（17:10〜18 :00）

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケームとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

3月5日（火）

ラウンドテーブル：シリル・ルミュー氏を囲んで

Table ronde : autour de M. Cyril LEMIEUX

10：00〜13：00　奈良女子大学
文学系N棟339教室

参加無料 申込不要

言語：日本語・フランス語（逐次通訳あり）

話題提供：シリル・ルミュー「フランスにおける社会学の展開」L'évolution sociologique en France
フランス社会学の動向をテーマに、情報交換をおこないます。

奈良女子大学キャンパスマップはこちら→
または「奈良女子大学キャンパスマップ」で検索

連絡先（全会場）：デュルケーム科研推進事務局　durkheim2017@gmail.com

活動報告　※2018 年 7 月から 2019 年 3 月末日まで（白ヌキは年度）

2018 D班（社会学教育チーム）2018 年度第 2 回班別研究会

日　時：2018 年 7 月 7 日（土）13:00～18:00
場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階・C462 共同談話室（神戸市）
出席者：5 名
内　容：小川　伸彦「言説としての古典化と事実としての古典化(1)――AJS のなかのデュルケーム」
梅村　麦生「ディシプリン確立の制度的手段としての専門誌――『ケルン社会学・社会心理学雑誌』を例に」
横山寿世理「続・社会学教科書におけるデュルケム社会学の伝えられ方」
川本　彩花「最終報告に向けて」
白鳥　義彦「フランス社会学初期の社会学教科書」

2018 D班（社会学教育チーム）2018 年度第 3 回班別研究会

日　時：2018 年 9 月 9 日（日）13:30～20:00
場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階・C462 共同談話室（神戸市）
出席者：6 名
内　容：横山寿世理「日本の社会学教科書・参考書に掲載されたデュルケームの社会学概念の傾向」
川本　彩花「理論・学説に関する学術雑誌論文と「伝記」の記述――最終報告書論文「（仮題）社会学史の物語化：日本の社会学教科書の分析」にむけて」
白鳥　義彦「英仏の比較から見る社会学教科書」
梅村　麦生「専門誌にみる古典家の再発見と理論的立場の確立――『ケルン社会学・社会心理学雑誌』を例に(2)」
小川　伸彦「言説としての古典化と事実としての古典化(2)――AJS1898～1937 におけるデュルケームの位置づけの変遷：デュルケームはいつ「古典」になったのか」
山田　陽子「『デュルケームの論点』構成案について」

2018 D班（社会学教育チーム）2018 年度第 4 回班別研究会

日　時：2018 年 11 月 11 日（日）14:00～19:00
場　所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科 C 棟 4 階・C462 共同談話室（神戸市）
出席者：7 名
内　容：白鳥　義彦「社会学教科書の社会学」とデュルケーム
横山寿世理「日本の社会学教科書・参考書で扱われるデュルケームの社会学概念の変遷」
梅村　麦生「社会学のディシプリンと「古典家」としてのデュルケーム――ドイツの社会学教育におけるデュルケーム」
川本　彩花「最終報告書論文「（仮題）社会学史の物語化――日本の社会学教科書の分析」の草稿の報告」
小川　伸彦「「古典化」されるデュルケーム――創刊から 1945 年の AJS における位置づけの変遷を中心に」
山田　陽子「『デュルケームの論点』の出版企画について」

連載　玩味玩読デュルケームのことば　第 8 回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。
周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※　訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.22●

事物が複雑であり理解するのに困難なものであることを人間に教えたのは科学であって、宗教ではない。

<< C'est la science, et non la religion, qui a appris aux hommes que les choses sont complexes et malaisées à comprendre. >>

【ミニ解説】

社会を物のように扱わねばならない、というデュルケームの主張はよく知られているが、『宗教生活の基本形態』のこの一節をふまえるならば、この主張は、社会学こそが社会の真理を明るみに出すことができる、と考えるいわゆる科学主義的信念に依拠したものではないことがわかる。デュルケームが考えるのは、反対に、社会が物のように厚みをもち、複雑で、見通すことができないということである。もし宗教から科学が、したがって社会学が区別されるとすれば、それは後者がこの社会の複雑性、不透明性を認識しているからにほかならない。だとすれば、社会学が提示しているのは、何よりもまずその不透明さに向き合う態度であることになろう。社会学とは、ひとたび社会の真理を一点の曇りもなく明らかにすれば完了するといったような類のものではない。それは、必然的に社会を生きるわれわれがその得体の知れないものは何なのかと問い続ける、その営みそのもののなかに、つねに現在進行形で存在するようなものなのである。

（赤羽悠　記）

【キーワード】
科学、物（モノ）、社会の複雑性

【出典】*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1895(Presses universitaires de France 版 p. 37)
（邦訳）『宗教生活の基本形態』（上）ちくま学芸文庫、山﨑亮訳、2014 年、62 頁

●ことばんごう no.23●

いずれのタイプの自殺者も、いわゆる無限（アンフィニ）という病によって苛まれている。（…）前者［エゴイスム］は、果てしもない夢想のなかに迷いこみ、後者［アノミー］は、果てしもない欲望のなかに迷いこむ。

［　］内は引用者による

<< Les suicidés de l'un et l'autre type souffrent de ce qu'on a appelé le mal de l'infini. [...] Le premier se perd dans l'infini du rêve, le second, dans l'infini du désir. >>

【ミニ解説】

『自殺論』は、統計を基礎データに用いて、自殺の社会的原因を分析した古典として知られる。けれども、この本はたんに社会病理に対する知的関心から書かれたものではないだろう。乾いた冷静な分析のむこうに、人間の苦悩を真摯にみつめるデュルケームの情熱が感じられるのである。方法論という観点からみて興味深いのは、実証的研究の模範のように扱われる『自殺論』が、統計だけではなく、文学をデータとして活用していることである。エゴイスムとアノミーはいずれも「無限という病」だが、その違いは、対象を外側から考察するだけでは把握できない。「種々の自殺タイプの個人的形態」の章で、デュルケームは、ラマルティーヌの小説に登場するラファエルを参照して「エゴイスム的自殺」を論じ、シャトーブリアンの小説に登場するルネを参照して「アノミー的自殺」を考察している。それを通じて、デュルケームは、エゴイスムは「果てしもない夢想」のなかに迷いこむ思惟の病であり、アノミーは「果てしもない欲望」のなかに迷いこむ感性の病であると分析した。このように、文学をデータに活用して分析するとき、デュルケームは、対象を内側から把握し、そうすることで、社会学的思考を深さの次元へ導いているように思われる。

（岡崎宏樹　記）

【キーワード】

エゴイスム、アノミー、文学

【出典】*Le suicide: étude de sociologique,* [1897]1997 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.324)
（邦訳）『自殺論』中公文庫、宮島喬訳［改版］、2018 年、482 頁

●ことばんごう no.24●

科学は、客観的であるがゆえに本質的に非人格的なものであり、集団的作業によってしか進歩しえないものだ。

<< Cependant la science, parce qu'elle est objective, est chose essentiellement impersonnelle et ne peut progresser que grâce à un travail collectif. >>

【ミニ解説】

デュルケム学派誕生を後押しした科学観がこれである。『社会学年報』創刊号の「序文」で述べられている。ここには、各学説が学者の個性とあまりにも密接につながっていた社会学の現状への批判があった。

とはいえ、デュルケムのほか、ブーグレ、フォコネ、アルヴァックス、ユベール、モース、シミアンなど、綺羅星のごとき大物たちの集まりが一枚岩なわけがない。甥のモースでさえ、叔父とはそうとうに異なった立場をとっているともいえる。デュルケム自身、シミアンへの手紙のなかで、「私は、私たちのあいだに均質性が確立されるのを期待していませんでしたし、『年報』を、参加資格は科学的誠実性だけで十分なような論集にしようとしただけでした」と述べていた。学派とはいえ、均質性を誇張してはならない。

われわれの科研研究もまた、同じ精神によって導かれていたのであった――。

（中島道男　記）

【キーワード】

デュルケム学派、社会学年報、科学観

【出典】Préface à *L'Année sociologique*, 1896-1897, vol. Ⅰ, dans Durkheim, E., *Journal sociologique*, 1969(Presses universitaires de France p. 36)

【参考】中島道男『エミール・デュルケム――社会の道徳的再建と社会学』東信堂、2001 年、16-17 頁、117-120 頁

2018 年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●論文・図書

＊　岡崎宏樹、2018、「相互作用と自己――〈自分らしく生きる〉とはどういうことか」奥村隆編『はじまりの社会学：問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 19-35
＊　岡崎宏樹、2018、「非合理性と流動性――社会学の境界で考える」『日仏社会学会年報』29: 49-58
＊　小川伸彦、2018、「都市とコミュニティ――都市研究には社会学のどんな姿が映しだされているか」奥村隆編『はじまりの社会学：問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 165-182
＊　菊谷和宏、2018、『社会学的方法の規準』講談社（講談社学術文庫）
＊　溝口大助、2018、「沸騰、贖罪、死――デュルケム学派宗教社会学における『聖なるもの』」『Νύξ＝ニュクス』5: 110-135

●国内学会・研究会

＊　笠木丈「タルドにおけるクールノーの受容について」（日仏哲学会 2019 年春季研究大会口頭発表、2019.3.23　於大阪大学）
＊　中倉智徳「社会運動の「モナド論的分析」の可能性について――Isaac Marrello-Guillamón による議論を中心として」（日本社会学会第 91 回大会口頭発表、2018.9.15　於甲南大学）

●国際学会

＊　Ozeki, Ayako, “The concept of personality in Durkheim: Generality, commonness, abstractness, and universality”, XIX ISA World Congress of Sociology, 2018.7.21, Metro Toronto Convention Center
＊　Nakakura, Tomonori, “Reception of Durkheim’s theory in East Asia and Post-Western Sociology / Compressed Modernity”, The Inaugural Congress of East Asian Sociological Association, 2019.3.9, Chuo University

●2017 年度以前の成果報告（未掲載分）

＊　中倉智徳、2017、「微小な痕跡に残る社会――ガブリエル・タルドと筆跡の社会学」渡辺公三・石田智恵・冨田敬大編『異貌の同時代――人類・学・の外へ』平凡社: 49-71

（2019 年 3 月 28 日事務局把握分）

成果報告書　目次

デュルケム社会学の成立と受容――ディシプリンとしての社会学を考えるために

第 1 篇：デュルケム社会学の成立と展開

第 1 部：デュルケム社会学の成立と社会学の制度化　【A 班】

第 1 章　デュルケーム社会学とエピステモロジー――デュルケーム社会学のディシプリンを支える「科学性」の問題　太田健児

第 2 章　フイエとギュイヨー――デュルケームの先駆者たち　北垣徹

第 3 章　永遠の真理と変化する実在――デュルケムとベルクソンにおける言語的観念の役割　小関彩子

第 4 章　犯罪の正常性をめぐるデュルケームとタルドの論争　池田祥英

第 5 章　社会学という実践――デュルケームにおける社会の客観性をめぐって　赤羽悠

第 2 部：デュルケム社会学理論のインパクト　【B 班】

第 6 章　デュルケーム社会学の 21 世紀――モース『贈与論』と現代社会学の出会い　三上剛史

第 7 章　社会学の固有性について――経済社会学・MAUSS の歩みとそこからの展開　古市太郎

第 8 章　個人と社会の異質性とディシプリンの変容　江頭大蔵

第 9 章　デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に　金瑛

第 10 章　デュルケムとベルクソン――社会の内在性と超越性をめぐって　笠木丈

第 11 章　聖なるもの、沸騰、事物――デュルケーム宗教論再考　溝口大助

第 12 章　体験理解の方法論的探求――デュルケームからバタイユへ　岡崎宏樹

第 13 章　パーソンズのデュルケム解釈――パーソンズの主意主義的行為理論をめぐって　杉谷武信

第 14 章　デュルケームの宗教論からブルデューの国家論へ――「社会とは神である」をめぐって　村田賀依子

第 15 章　100 年後のデュルケム――バウマンの批判に応えて　中島道男

第 2 篇：受容されるデュルケム社会学とそのゆらぎ

第 3 部：デュルケム社会学の国際的受容　【C 班】

第 16 章　東アジアでのデュルケーム受容と「圧縮された近代」　中倉智徳

第 17 章　韓国調査報告――キム・ミョンヒ氏インタビューより　林大造

第 18 章　バルセロナ三大学調査について　川本彩花　吉本惣一　藤吉圭二

第 19 章　トルコの大学における社会学教育の制度化とデュルケーミスム――ズィヤ・ギョカルプ (Ziya Gökalp) の活動を中心に　横井敏秀

第 4 部：社会学教育のなかのデュルケム　【D 班】

第 20 章　「古典化」されるデュルケーム――1930 年代までのアメリカの社会学誌を中心に　小川伸彦

第 21 章　日本の社会学教科書の中で生きるデュルケム――デュルケム社会学のパースペクティブと概念をめぐって　横山寿世理

第 22 章　『デュルケームの論点』刊行に寄せて――E.デュルケーム没後 100 周年記念に　山田陽子

第 23 章　社会学理論・学説の記述における伝記的背景――日本の社会学教科書の分析　川本彩花

第 24 章　ドイツの社会学教科書とシラバスに見るデュルケーム――社会学の方法論と主題設定に関して　梅村麦生

第 25 章　「社会学教科書の社会学」とデュルケーム　白鳥義彦

クロニクル　2018 年 7 月～2019 年 3 月

■■　2018 年

■　7 月 5 日（木）	部内報第 38 号配信
■　7 月 7 日（土）	社会学教育班 2018 年度第 2 回班別研究会（神戸市）参加者 5 名
■　7 月 15 日（日）	ニュースレター第 8 号発行
■　8 月 2 日（木）	部内報第 39 号配信
■　9 月 6 日（木）	部内報第 40 号配信
■　9 月 9 日（日）	社会学教育班 2018 年度第 3 回班別研究会（神戸市）参加者 6 名
■　10 月 4 日（木）	部内報第 41 号配信
■　11 月 1 日（木）	部内報第 42 号配信
■　11 月 11 日（日）	社会学教育班 2018 年度第 4 回班別研究会（神戸市）参加者 7 名
■　12 月 6 日（木）	部内報第 43 号配信

■■　2019 年

■　1 月 10 日（木）	部内報第 44 号配信
■　2 月 7 日（木）	部内報第 45 号配信
■　2 月 27 日（水）	国際シンポジウム「メディアと公共空間：メディアは誰のものか」（東京都渋谷区）参加者 66 名
■　3 月 4 日（月）	国際シンポジウム「デュルケームとタルド：その現代的意義」（奈良市）参加者 23 名
■　3 月 5 日（火）	ラウンド・テーブル「シリル・ルミュー氏を囲んで」（奈良市）参加者 12 名
■　3 月 7 日（木）	部内報第 46 号配信
■　3 月 31 日（日）	ニュースレター第 9 号発行

編集後記

本科研のニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」も最終号となりました。今号では、4 年間の研究報告や本科研主催の国際シンポジウムの報告を掲載しています。

これまでお読みいただいた皆様、誠にありがとうございました。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第 9 号

発　行　日：2019 年 3 月 31 日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506　奈良市北魚屋西町　奈良女子大学文学部
中島道男研究室内
E-mail: durkheim2017@gmail.com
HP : http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/